

先驅

Vanguard / an organ of anti-stalinist marxism

季刊 **1** '61/12

- 吉本隆明 前衛コミュニケーションについて
- 真樹 朗 エンゲルスの哲学
- 芳村三郎 労働者階級の自己権力と党について
- 対馬忠行 フルシチョフの天国(1)
—ソ連共産党新綱領草案批判—
- 姫岡玲治 官僚制考察の一メモ
- 山崎 衛 革命運動と労働組合官僚(1)
—警職法斗争の教訓—
- Tony Cliff トロッキーの組織論
〈投稿〉ブルジョア経済学に転落した黒田ソ連論
/ 対馬忠行

先 駆

第 一 号

1961. 12. 1

発刊のことば	……………	吉本 隆明	……………	(2)
前衛的コミュニケーションについて	……………	真樹 朗	……………	(4)
エンゲルスの哲学	……………	芳村 三郎	……………	(13)
ある夏期学習会からの報告	……………	……………	……………	(30)
労働者階級の自己権力と党について	……………	……………	……………	(30)
【投稿】ブルジョア経済学に	……………	……………	……………	(48)
—— 転落した黒田ソ連論	……………	……………	……………	(48)
—— 統、支離滅烈なソ連論	……………	……………	……………	(48)
官僚制考察の一メモ	……………	……………	……………	(58)
革命運動と労働組合官僚(一)	……………	……………	……………	(58)
—— 警職法闘争の教訓	……………	……………	……………	(69)
【解説】「世界労働組合綱領草案」について	……………	……………	……………	(85)
フルシチョフの天国(一)	……………	……………	……………	(90)
—— ソ連共産党新綱領草案批判	……………	……………	……………	(90)
トニー・クリフ	……………	……………	……………	(112)
トロツキーの組織論	……………	……………	……………	(112)
トロツキー われわれの政治的諸任務(抄訳)	……………	……………	……………	(128)
ルクセンブルグ	……………	……………	……………	(130)
ロシア社会民主労働党の組織問題(抄訳)	……………	……………	……………	(130)

現代思潮社 / H・ルフェーヴル著
 総和と余剰・全七巻

6 マルクス主義者とはなにか
 森本和夫訳 / 価三〇〇円

5 疎外と人間
 森本和夫訳 / 価二〇〇円

4 わが思想の歩み(下)
 中村雄二郎訳 / 予価二七〇円

4 わが思想の歩み(上)
 中村雄二郎訳 / 予価二七〇円

3 哲学の契機
 白井健三郎訳 / 価三六〇円

2 歴史の証人
 白井健三郎訳 / 価一九〇円

1 哲学者の危機
 森本和夫訳 / 価三〇〇円

週刊労働運動 第三十九号予告

- 特集「春日批判」／編集部
- 都内主要労組内活動家の討論集會——
- 賃金斗争の現状とそのあり方
- 賃金討論集會のまとめ——
- 中小企業労働者の闘いのあり方
- 統一労働組合論を中心にして
- 中小企業労組活動家の研究討論集會——
- ソ連共産党新綱領(草案)
- の批判的紹介(Ⅰ) / 小川 潤
- 共産主義運動の経験
- キューバ革命—— / 志水速雄
- 新島と共産党 / 寺本節雄
- 「政治時評」
- ソ連の核実験と日本の政治勢力の反応—— / 中島嶺雄
- 連続講座
- 戦後日本労働政策史 / 小山弘健・山本正之
- 文芸思想戦線——「火山灰地」をみて / 桶谷秀昭
- 日本経済分析「経済白書」批判 / 秋津 孝

12月号 / 11月20日発売予定 峯 書 房 東京都千代田区富士見町1の14根本ビル

発刊のことば

安保闘争から一年余をへた現在、日本の左翼的思想や理論が擬制の権力の呪縛から解放され、漸やく自由に発酵しはじめた感がないでもない。

思うに、これまで既存の権威の重圧の下にあった思想、理論は、それら本来の自立性を無惨に奪われてきたことよって、きわめて卑小な「党派性」や「政治性」を刻印され、御都合主義的にあつかわれることに慣れてきたところ、このような状況から思想や理論の権威を回復するためのなほどうかの契機が、かの安保闘争の大波がすべてを呑みこんでしまったところで生じてきたといえはしまいか。

既成の権威に反抗する目的をもった小冊子がすでにくつかあるばかりか、これからも生れてくることが予想される。われわれの反スターリン主義的マルクス主義の理論誌「先駆」の誕生は、この傾向をいっそう多彩にするであらう。

安保闘争の敗北に直接つながる現在の状況は文字通り一個のカオスである。

様々の色合いをもった思想的、理論的傾向が、軒を並べてひしめきあっている。そして、その各々が自己を主張せんとして競いあっているといえよう。

しかし、われわれはただ次のことだけを確信したいと思う。

自己以外のいかなる権威にもくっすることのない、自立的な思想に貫らぬかれた創造的な理論だけが、人間活動の全分野に究極的に影響することが可能であり、かつ大なる未来を展望しうるであらうということ。

「先駆」の周辺にはいまのところ、安保闘争の敗北とともに挫折をみた共産主義者同盟に、かつて所属したところのある者が数多く存在している。

この同盟の崩壊は、日本の反スターリン主義左翼の戦線に大きな波紋を投じた。それゆえ、公認左翼と異なっ

たいかなる組織といえども、その影響から超然としていくことはできなかったのである。

また、この組織の崩壊は、その構成員にとつてはなによりも深刻であった。いまだに、忘然自失の状態から回復できないでいる者、反スターリン主義の破産という者、マルクス主義の否定を説く者、超セクト主義的組織への一種の転向に身を安んじた者、……

われわれには「死んだ子の歳を教える」趣味の持ちあわせはない。

しかしながら、この組織が内包していたであろう豊富な可能性を刻明に追求し、挫折の深刻な自覚のうえに立つてなにかを開花させることの意欲は、だれにも劣らず持ちあわせているつもりである。われわれには、みずからの過去、挫折した運動を蔽履のごとくあつかうことはできない。

この立場にたったとき、われわれのあいだにただ一つだけ、共通の旗印とでもいべきものが鮮明になつてくる。

反スターリン主義的マルクス主義理論の創造、これである。

それはけっして出来合いのものではなく、現在の混沌の中から創りだされなければならないのだ。そこでは、これまでの一切の思想的、理論的成果を貪欲に撰取し、深く現実とかかわりあう創造活動のはてしない苦闘だけが要求される。セクト主義は許されない。

「先駆」は、特定の政治組織の機関誌ではない。しかし、「先駆」が今後、いかなる形態変化を遂げようとも、右に述べた意図だけは頑強に継承されていくはずである。

「先駆」の誌面は、それが反スターリン主義的マルクス主義理論の創造のために役立つものならば、広く公開されるであらう。思想的、理論的創造のための活動が、一片の妥協もなく激突することこそが望ましい。このなかからだけ、われわれの旗印が鮮明に浮き出てくるであらう。

したがって、「先駆」の誌面は、亜流やまたその亜流の目白押しではない。個々の論文には、執筆者個人だけがそれぞれ責任をもつであらう。

(一九六一年十月二五日)

前衛的コミニケーションについて

吉 本 隆 明

レーニンは一九二三年一月のゴリキキへの手紙で「あなたが『あるボルシェヴィキ』の新しい治療を受けているとの知らせは、いくらもとのボルシェヴィキだったにしろ、私をすっかり不安にしてみました。医者としての同志、わけてもボルシェヴィキの医者としては桑原桑原！ ほんとうに、いつだったか、いい医者が言ってくれましたが、医者としての同志たちは一〇〇分の九九まで『驢馬』なのです。あなたに断言します。私たちは（何でもない時のほかは）第一流の名医にしかかかってはならぬのです。」とかいたそうである。（本多秋五「転向文学論」）

いま愚劣な前衛主義者にかこまれて、レーニンを横取りして論文でもかこうとすれば、これ以外の言葉は、すべてかれらに呉れてやれ、とでもいうよりほかない。国中に藪医者の「前衛」が充ち溢れ、あとからよほどお人好しの患者以外にはついてゆかないというのが、現在の思想状況であることをはっきりと確認する必要があるから。プロレタリア「党」だ、構造改革「党」だ、人民民主主義「党」

と夢にも見たことはないし、結局、自分自身でこしらえた道以外からは、かつてだれも未来へ入ったものはない。△わたしはわたしの道を行く▽、というドトンの文句さえあるくらい世の中である。

現在、わが思想情況のなかにあらわれている「前衛」のうちには、革命に到達できそうなものなどひとつもない。パニックだ、パニックだ、とか、戦争だ、戦争だとか、構造改革だ、構造改革だとか天下が泰平なのをいいことにして、まったく他力本願の念仏をとなえているより能がないものに、革命などができるはずがないのだ。

さすがに、いまでは、わたしが「前衛」党を批判したり「前衛」主義者を批判したりしても、わたしを反動に加えるものはいなくなつた。今より六、七年まえ、はじめて戦争責任論を展開したときとくらべれば、雲泥のちがいである。なぜ、事態はこのようになったのだろうか。かれらもまた、じぶんの所属する「前衛」党の無謬性を信じられなくなったからである。かれらは、わたしの主張にちかずにいたのだろうか？ 近づいたのである。しかし、誰でもじぶんの足跡が途中で消えてしまうのを好まないように、わたしとかれらとの異差を強調しなければならぬ。そこで、青春を費したところのものに、たとえ誤謬があつたとて、みだりにこれを去ることができようか。それは自ら選んだものなにして自らの責任をないがしろにするものだから、そこに止まり、それを内から変えてゆこうとする努力をすててはならない、というように。

責任だつて？ 大衆は、誰ひとりきみに責任など取ってもらおうとも思っていないし、きみよりもづつと大人で、づつとまじだ。きみはただ閉された仲間と一緒にいた哀れな囚われた若者、もういい加減

だ、なかには眼に見えない「党」だ……などどうしようもなくなくなった藪医者たちは、特效薬のように「党」をかつきまわっているから、よほどのショック療法でも加えなければ、うわ言をやめさせる方法はない。

試みに刺を通じて門口に立ってみたまえ。そして、中に向つてこう告げてみたまえ。われわれは諸君の終焉の声をきくためにきた。かつて一度もそう思ったこともないように、諸君の「党」の終焉が、見すてられた大衆、インテリゲンチヤの運命に關するものとは思っていない。しかし、人の死するやその言はよし、というコトワザもある。一度くらい奈落の底にとどくほどの声ではほんとのことを口にしてもよいはずだとおもってきたのだ、と。

しかし、驚いてはいけけない。きかれるのは相も変らぬ「革命」的空語であり、けつして、大衆の力から割り出したコトバではなく、宗派の本山から割り出された声なのだ。すてておけ。われわれは、かれらの門口から、未来へ入ろうなど

に眼をさまして戻ってくるどころだとかんがえ、まあ、あまり叱咤もせずに迎えてやろうとおもっている小兒だとしかかんがえていない

わたしが無責任な批判ばかりするだつて？ きみの愛好する大衆にたいする責任というやつでバランス・シートをつくってみようではないか。どちらが責任をとっているかは、一目瞭然である。某年某月某日、きみが何をしていたとき、わたしは何をしていたか、某年某月某日、わたしがパチンコ玉をはじいていたとき、きみが映画館の暗がりでも眠っていた、某年某月某日、きみがプロレタリア文学を賞めそやしていたとき、わたしはそれを批判していた、某年某月某日、きみが細胞会議でかくかくの議事を論議していたとき、わたしは失業者の貌をして職業紹介所へ向つていた、というようなことをつけ加えてもいい。そのうえで、きみがわたしより損をしているとおもつたら、遠慮はいらないし、とがめられることもないで、わたしより得なことをするがいい。きみは、じぶんに他人よりも辛いことをやっているのだ、という感じがなくならないあいだ、けつして「前衛」にはなれないし、また、もともと辛いことをする必要はないように人間はできている。しかし、沢山の偶然にないまぜられた必然が、きみを今の境涯につれていったとしたら、きみはそこを逃れられないし、また逃れる必要もないのだ。わたしたちはそのようにできあがっている。それが、わたしたちのたまたかう場所である。

わたしが、日本のレーニン主義者にかんずるいちばんの不満は、労働者や大衆をオルガナイズされること待っている何ものか、とかんがえていることである。しかし、かれらは具体的に生活している何かではあつても、オルガナイズされるのを待っている何かでは

ない。日本の「前衛」的コミュニケーションが、つねに労働者や大衆のなかのコミュニケーションを待っている何かに向って放たれないから、コミュニケーションの伝達されない、あるいは、コミュニケーションを拒否する生活実体へ向って放たれないのは、もともと、レーニン自身が、コミュニケーションについて、楽天主家であったことにもよるし、それをただ単に模倣しているにすぎないからである。ここで、「前衛」的コミュニケーションの範囲はある限界線をつくり、その内での決議、アピールは、その外へ、大衆の外から大衆をその限界線のなかへ吸引するように行われる。

しかし、おそらくこの逆型のコントラ「前衛」的コミュニケーションがありうるはずである。それは、コミュニケーションを拒否する大衆の生活にむかって、その生活のほうへつき放し、その方へ組織化する方法である。しかし、もっと廻り道をしよう。

「前衛」的コミュニケーションの方法は、現在の「進歩」的末端にいたるまで採られている方法の範疇である。これは、魚屋のおかみさんをオルグして母親大会につれてゆこうとする平和と民主主義者から、市民会議の地域的な結成をとく市民主義者まですこしもかわりない。

もしも、労働者に「前衛」をこえる方法があるとするれば、このような「前衛」的コミュニケーションを拒否して生活実体の方向に自立する方向を、労働者が論理化したときのほかはありえない。また、もしも魚屋のおかみさんが、母親大会のインテリ××女史をこえる方法があるとすれば、平和や民主主義のイデオロギーに喰いつくときではなく、魚を売り、飯をたき、子供をうみ、育てるといふもん

の失敗と錯誤の歴史から学べ、とかかれていたのである。しかし、これらの批判者は、自分自身の軌跡から何を学んだのだ？そして、いまだどこにいるのだ？ 佐藤昇は、かつて戦時中軍事工業新聞にあり、戦後共産党にあり、いまそこを離れた自己の軌跡から何を学んだがゆえに、二段革命論か、平和共存拒否か、構造改革拒否か、というような目算で、現代マルクス主義の諸潮流を分類しているのだ？ 香内三郎は、かつて学生運動をやり、いま、学者ジャーナリストをやっている自己の軌跡から何を学んだがゆえに、トロツキズムの批判をやっているのだ？ 香内自身は何ものなのだ？ 何を学んだ？ われわれの現在の思想状況のなかで、もし充分の時間があり、それをかけることができるならば、これらの通俗マルクス主義者と理論的な細部にわたって論争をかわすべきであろう。たとえば、佐藤昇とは革命のヴィジョンについて、森信成とは唯物論とは何かについて、香内三郎とは安保闘争の評価について、梅本克己とは芸術論や言語論について、という具合にだ。そして、われわれは、充分とはいえないまでも、その時間をもっている。やがて精密な反批判を展開するだろう。

しかし、ここでは、かれらのなかにあるまだ醒めきれない神話、借り物の洋服、赤いシャツの銀鎖りをコントラ「前衛」的コミュニケーションの方法から批判すれば充分である。

わたしが、わたしの思考と行動の軌道を固執すれば、かれらもまた自分のそれを固執し、わたしを傍観者と名付けたがる「前衛」主義者に変貌する。ほんとうは、大衆の歴史と無関係なひとにぎりの集団で、大衆の歴史に傍観してきたのはじぶんたちであることも知

だいをイデオロギー化したときであり、市民が市民主義者をこえる方法も、職場の実務に新しい意味をみつけることではなく、今日の大状況において自ら空無化している生活的な実体をよくへソの辺りで噛みしめ、イデオロギー化することによってである。

ところで、われわれの「前衛」主義者は何をしているのだ？

構造的改革派と同調者が、たとえば、講座「現代のイデオロギー」のなかでやっているのは、「現代日本マルクス」主義の革命論と戦略論による振りわけである。まったく、十年一日のようなその論議、字面だけの勇ましき、安保闘争敗北の死臭のうえに、青年たちの声なきうめきのうえに、権力から粉砕されて四散した学生運動の屍のうえに、現代日本マルクス主義の運動には、講座派マルクス主義と、労働派マルクス主義と、トロツキズムの潮流があるなどと（佐藤昇「現代日本マルクス主義の三つの潮流」）いけしやあしやと分類し、甚だしいのはマルクス主義やプラグマチズムを商売にしている学者ジャーナリストの分際で、現代の「トロツキズム」批判などをやっているのだ。（香内三郎「現代の「トロツキズム」批判」）

しかし、おそれた分類や批判などはやめるがよい。すくなくとも戦後十五年をつうじて、天皇制支配から自由になった以後の自立的インテリゲンチヤや労働者は、ソヴェト・ロシアの権威からも、日本共産党の極権からも自由なところで、それに頼らずに労働運動を組織し、文化について考察し、それにもとづいて、ひとつの旗標をまもりつづけてきた。その旗標にはたとえどんなことが書かれているか、これらの批判者に見えなかったとしても、何ものもたのむな、ただ戦前、戦事、戦後をつうじての日本知識人と労働者や大衆

らずに。この関係は相互的である。だから宜しい。わたしはじぶんの軌跡を放棄しよう。しかし、かれらはその「前衛」党くらしの月日を放棄することができぬか？ できないだろう。放棄すれば彼等の掌の中にのこるのはゼロだから。いや、彼等はゼロではない。それによって得た学者やジャーナリストとしての位置がある。しかし、希望をいだいて「前衛」的コミュニケーションに応じた労働者や大衆には、もし放棄すれば何ものこらないのである。いや、負のこるのである。かれらが教えこまれ、じぶんを腐らした方法はすべてひとつであり、サルトルがとくに指摘している。

「ジョゼフ・ド・メーストールとガロディ氏とのあいだには、（任意の日本の「前衛」主義者の名前を代入せよ―筆者）才能とはちがうが何かしら共通なものがある。そして、もっと一般的にいえば、行き当りばったりフランス共産党から百の保守的なやり方を引き出すためには、共産主義者の書いたものの一編をぎっと読むだけで十分なのである。くり返しによって、おどかしによって、仮面をかぶったおどしによって、断言のもつ軽蔑的な力によって、一挙にあらゆる論争の上に席を占め、人を幻惑し、ついには伝染力のあるものとなるほど傲慢で尊大な確信を示すことで一向になされぬ論証を謎めいて暗示することによって、説得がなされているのだ。反対者にはけつして答えがあたえられない。反対者は信用されないのであり、警察や情報局の者であり、ファシストなのである。（略）トロツキストはスターリン主義者にとって、ユダヤ人がモースに比べてかたがた悪いのである。」

もしも、この方式を教えこまねなかった「前衛」主義者がいたらお目にかかりたい。かれらは、兎戯に類することしかしなかった場合でも、完全な密教の信徒であり、メソソである。近年、わたしとの論争でこの方式を採用した「党」員文学者のひとり、最近、声明をだしてこんどは「党」内民主主義を主張し、「党」外との連けいについて「対等」の立場で話合おうという呼びかけをやっている。いったい信用するのは誰と誰だ！ もしも、これがこの「党」員文学者の良き転回を意味するならば、それを認めてもいい。歴史とは個人に関してもそういうものだ。ということにしてもいい。しかし、文学者でないただの労働者や大衆の「党」員のばあい、いったいどうするのだ。かれはとて、日常社会に復帰できないほど、くずれ果て、何もかも信用しきれない状態においてなげ出される。これらのくずれ「党」員たちは、亡霊のように「前衛」的コミュニケーション社会をうろつき、ただ人の足を引いてひきずりおとすほどのことをしながら一生を棒にふるのである。

すべての神話は、その起源をもっている。さいしょに、ふと影のように「キリストに賛成せぬ人はキリストに反対する人であり、キリスト教的でないものは反キリスト教的なものである。」(フォイエールバツハ「キリスト教の本質」というさきさきやき意識にやってきたとき、かれは神話のなかに入る。自由なインテリゲンチヤもまた自由ではない。プロレタリアの規律が必要だ？ 今より約百年ばかりまえ、農兵や郷土であったとき以外に、自力で権力をうちたおすたかいに参加したことのないうわが労働者に、規律の範疇を課するのは(たとえそれが△プロレタリア▽という名前を借用するだけ

であつても)、まるで永久に奴れいでいるというようなものである。「党」は亡霊のように前衛主義者のあいだを横行する。反帝反スタプロレタリア「党」や倍増した「党」員を擁する日本共産党から、眼にみえない「党」を信仰する地方分派にいたるまで、かんがえ直せ！ やり直せ！ それは「前衛」的コミュニケーションの方法の錯誤なのだ。

どんな大衆の生活も、「前衛」党のために存在するのではなく、それ自身のために存在している。この単純な客観的な真理は、「党」の亡霊が横行するところ、「党」員の脳髓が過熱するところでは、しだいに影がうすくなる。また、どんな革命もただ労働者や大衆がその経済的な人間的な疎外をうちわらわられて、全人間的になるためにしか存在しないということもわすれられる。そして、この単純な真理は、かれが「党」員同志でいちゃついているのではなく、いつも大衆の生活実体と無形の無言のコントラ前衛的コミュニケーションを果たしている以外には保てないのである。ところで、わたしたちの構造的改革論者はどんなことを、大衆についていつているのか。

「この、同盟軍依存の戦略構想(講座派一註)において欠けているのは、労働者階級や勤労大衆を社会主義的思想によって鼓舞し、社会主義の精神によって教育し、社会主義をめざす闘争に組織すべき革命の指導部隊としての主体性であり、大衆の戦闘力や創造性にたいする信頼である。したがって、こうした考え方にとらわれているとすれば、今日、社会主義的思想が資本主義諸国の広汎な勤労者のなかに浸透しているというフルンチョフの指摘に言葉の上で賛成し

てみても、実際にはそれを少しも信じていないことになる」

(佐藤昇「現代日本マルクス主義の三つの潮流」)

昔々の修身課の教師でさえこんなつたない説教をすることは稀であった。労働者階級や勤労大衆を社会主義的思想によって鼓舞するだ？ 社会主義の思想が資本主義諸国の広汎な勤労者のなかに浸透しているだ？ いったい、どこに鼓舞するような△社会主義▽の思想があり、どこにそれに浸透された広汎な勤労者がいるのだ？ こういう方法、こういう盲目はただ構造的改革派だけに特有なものではない。

「学生運動はもろん小ブルジョアの運動ではある。だがそれがプロレタリア運動の一環として位置づけられ推進されるかぎり、かかるものとしての学生運動の展開は、ただに一般学生大衆の政治意識を向上させ平穩無事の日常的意識への低迷からときはなちうるだけでなく、さらに、スターリニズムと社会民主主義の極端のもとに苦吟している今日の労働運動に深刻な影響をあたえずにはおかないであろう。そしてとくにこの運動を組織し、その先頭によって闘う学生運動家たちは、小ブル的個人主義から脱皮しプロレタリア的人間としての自己形成をかちとり、労働者階級解放の闘いに献身しうる主体としてみずからを革新し創造するために絶えざる努力をつみかさね、そしていま労働戦線の内部で苦闘している革命的労働者たちと結合して、プロレタリアート解放のための革命的前衛組織を創造するために闘わなくてはならない。」(黒田寛一「敗北と挫折の体験にふまえて」)

このスコラ哲学と、ゴミ屑のような政治屋根性を反帝・反スタの

につきました自称革命的マルクス主義者は、脳髓の屈伸性と発条をうしなっていることで、ほとんど救い難い△マルクス主義▽主義のひからびたミイラである。この謀略好きの政治屋が△プロレタリア▽というとき、そこに生きた具体的な労働者のイメージはどこにもなく、ただプロレタリア階級意識の幾何学的な点線が考えられ、学生というとき小ブルジョアの脳髓をもった、これからプロレタリアの人間へ染色しうる無機的な生体にはすぎないのである。小ブル的個人主義から脱皮しプロレタリア人間としての自己形成をかちとり、労働者階級の闘いに献身しうる主体としてみずからを革新し創造するために絶えざる努力をつみかさね、だ？

むかし、狐付きの軍国主義者どもや、エセ・マルクス主義者、典型的な救済者どもが、こういう天皇の教育勅語まがいの偽善的な御託言をならべたものだ。ここには、レーニン型の「前衛」的コミュニケーション意識が、わが日本の劣等感のかたまりのようなインテリゲンチヤ的風土のなかで、硬直し、奇形化した典型がある。またわが社会の歪形化された構成のなかで極限までひねこびてしまった範例がある。スターリンの論文でさえ、ここまではワイ小化されていない。まさに、△朕惟ウニ……汝等努力セヨ▽まで情落しつくしているのだ。

学生は小市民インテリゲンチヤである。このことは善でも悪でもない。その生活実体は本来的なプロレタリアの生活以下のばあいも、それ以上のばあいもある。学生運動は学生インテリゲンチヤの大衆運動である。その運動が、具体的に労働者運動以上の力を発揮するばあいも、それ以下の役割を果すばあいもある。これは、客観的な

情勢の如何により具体的な運動過程のものによって表われるのであり、如何なる理念によっても先験的に規定されるものではない。そんなことは自明のことである。しかるに、わがスコラ哲学者によれば、学生運動はプロレタリア運動の一環だといふのだ。ひからびた脳髓のなかでは、小ブルはプロレタリア階級に移行すべき生物として、プロレタリア運動の至近距離に、その一環となることを待ちのぞみ、そうなるほかにないように位置づけられているのだから、具体的な現実過程は、貧弱な小ブル哲学者の空想など容れる余地はないのである。まず、インテリゲンチヤ大衆運動として自立しないような学生運動も、この独占資本下のいかなる社会構成のなかでも、他の運動と直接、間接の環を結ぶことはできないことはあきらかである。現実の事物の運動への理解を「マルクス主義文献の読みあさりから入ったこの哲学者において、レーニン型の組織論の交通形態は、極端にまでわい小化される。もちろん、そんなことを指摘してチンピラ哲学者をいじめるのは容易であるが、レーニン型の「前衛」的コミュニケーションの方法が、わい小化された極限において、当然、こへゆきつかざるをえないことに、さかのぼって、問題を根底的に問うでなければ、事態は一向に改善されることはないのである。わたしは、いま、ふたつの通俗的な「マルクス主義」の説教師が、その程度にちがいはあるにしろ、おなじような説教（一方的コミュニケーション）型をとることを引例してみた。ほんとうは、ここで問われているのは根源的なものだであるとおもえる。

はたして、一般学生大衆の政治意識は、このスコラ哲学者のいうように、日常的意識によってそのなかに低迷しているものであろうか？ また、現在、眠っている労働者大衆は、日常的の生活の安楽さに麻酔することによって階級的な自立意識をうばわれているのだろうか。もしそうだとすれば、スコラ哲学者のいうとおり、これらの日常生活に低迷している学生大衆や労働者を、サークルにでも組織し、革命的マルクス主義と自称するスコラ哲学を鼓吹すれば、革命化することになり、その日常意識を打破されることになる。しかし、この方法は、新人会以来、福本イズム以来、ふみおこなって決して成功しなかったところのものであり、すでに、日常意識と非日常意識とはどのような関係にあるのか、という問題として、わたしたちによって探求しつくされてきたものだである。このスコラ哲学者の発想こそ、歴史の現実的過程から何も学んでこなかった脳髓「マルクス主義」のなれの果てであり、ただ、ラジカリズムであるということ以外に、何の意味もない「前衛」的コミュニケーション意識の典型である。

わたしは、このスコラ哲学者のように「一般学生大衆」や、一般労働者大衆をかええない。即自的な一般学生大衆や一般労働者大衆は、けつして、この自称革命的マルクス主義哲学者がいうようにまだプロレタリア意識化されないインテリゲンチヤや労働者なのではない。潜在的には、このスコラ哲学者の口説などを直ぐに打倒してしまう萌芽ももち、また、どんな保守主義にも、リベラリズムにも、支配者意識にもなりうる萌芽をもった存在である。だいいちの誤認はここにある。

また、これらの学生大衆や労働者大衆は、日常生活に馴れ、また、それにひたり切っているから、このスコラ哲学者の革命的マルクス

主義によって急進化したり、階級意識に目覚めたりしないのでは無い。かんがえてもみたまえ、現在の停滞し、膨大化した独占支配下で、そのどこをさがしたらひたり切ったり、安楽になったりする持続的な時間があたえられているか。かれが、日常生活にひたり「低迷」すればするほど、どうしようもなくなっている支配の秩序を萌芽的に識知せざるをえないのだ。コントラ「前衛」的コミュニケーションの方法意識からすれば、この日常意識、快楽の機関はあり、物的な交通手段は拡がっているにもかかわらず、すでに日常生活そのものなかに、どんな持続的な安楽の保証もなくなっている高度資本主義の社会構成のなかの生活実体そのものを意識化する方向にコミュニケーションの志向をむけなければならないはずである。

これは、べつに学生大衆の日常的要求をとりあげなければならぬとか、労働者大衆の経済的な要求をとりあげることが第一義だとかいうことを意味するものではない。これでは、たんにスコラ哲学者の説教の急進の仮面を乗けただけで、まったくおなじ発想にほかならない。また、一般学生大衆や一般労働者大衆を、まだ「説教師」まで到達しない段階にある大衆であるかのように誤認して、無意識のうちに加「説教師」のオルガニゼーションの予備軍であるように錯覚しているにすぎないことになる。一般学生大衆や労働者大衆は、これらの「説教師」などよりも生々として存在するし、潜在的にはそれを十分に圧倒するほどの力もたくわえている存在なのだ。この力をひきだす方法は、宗派的「説教師」たちに同伴せよ、おまえはプチブル・インテリまたはまだ目覚めていない労働者だから、階級意識に目覚め、プロレタリア運動の一環となれ、などとオルガニゼ

ーションすることではなく、自立せよ、その日常生活意識をとことんまで意識化してみよ、というコントラ「前衛」的コミュニケーションでなければならぬ。はて？ と、反帝反スタプロレタリア「党」派から、人民民主主義「党」派や、構造的改革「党」をとり、眼にみえない「党」派までいたる前衛主義者は、首をかき上げる。すると、いったい、われわれのすることは何なのだ？ 労働者大衆には、おまえの日常意識をもっともつと底のほうまでつきつきめよ、自立せよとよびかけ、一般学生大衆には、自立的なインテリゲンチヤ運動たれ、もつともつと日常意識に低迷せよ、とよびかけるとすれば、いったい、だれがおれたち「前衛」主義者のカモになつてくるのだ？ おれたちは、ひとにぎりの「前衛」主義者として何をなすべきか？

そうだ、かれらは、わが国の四〇年にわたる「前衛」的コミュニケーションの方法を無意識のうちに踏襲し、レーニンでは生き生きとした屈伸性をもっていたものを、日本型の密教交通手段にすりかえたことについて、しばらく、その非日常的な「前衛」意識に低迷して考えてみたほうがいい。自己が、自己の場所を見定めるために、だれでもそうするほかないのだし、そうしてきたのだから。すると、「前衛」主義者は、一般学生大衆や一般労働者大衆のもつとそばにびたりと付かなければ仕方ないことに気がつく。これは、日本資本主義の現実の客観的な運動そのものが強いる必然的な交通形態である。そのようなどんな場所もたない「前衛」主義者は、ひとにぎりで、または単独でひとつの時代的な軌跡を描き、現実の運動が、かれの意識の交通形態とどこで激突し、どこでへし折られ、どこで

敗れるかを試みるよりほかないのである。

さて、わたしは、反感や憎悪を他人からも、自分からも消すことができない。革命というやつが、鍛冶屋仲間の吹子や鉄槌の叩きあから生れるとおもっている「前衛」主義者が、わたしにいく憎悪や反感を、どこへ吹きとばしてやる妖術もわたしは、もちあわせていない。(許してやれ、それくらいしか誇るものはないのだ) また、わたしから「前衛」主義者というのは、労働運動でも、文化運動でも、いつも馬鹿なことを仕出かし、運動を組織エゴイズムにより割りつけ、そのあげく、「前衛」的無謬性の神話によって、責任を免れてきた奴だという反感や憎悪を消すことができないように。憎悪や反感が不毛だというの神話である。わたしたちは、支配者とたたかう方法をこれらの対立以外から手に入れることはできないからだ。

「きみは資本主義が死滅し、社会主義となり、社会主義が死滅し、共産主義となることを信ずるか?」、「信ずる」、「きみはじぶんが小市民インテリゲンチヤであることを認めるか?」、「認める」、「きみは労働者階級が資本主義を止揚させる主体であることを信ずるか?」、「信ずる」、「ならばきみは小ブルの個人主義から脱皮しプロレタリア人間としての自己形成をちとることを誓うか?」、「誓う」、「ならばスターリニスト党の諸分派か、トロツキスト党の諸分派の何れかを選ばねばならない」

愚劣な「前衛」的コミュニケーションをやめるがよい。もしも、わたしたちが選ばねばならなかったものがあつたとしたら、まず先験的に日本資本主義社会そのものであつた。つぎに何をえらんだの

だ? たくさんの現実的事件と、じぶんの遊戯や勉強や貧困や生活であつた。そうして、つぎに何を選んだのだ? いったいどうに変わればえもしないこの現実であつた。あたまのなかにいや応なく蓄積されたのは、マルクス主義の文献であり、ブルジョアの知識であり、自然についての認識であり、芸術についての諸感覚であつた。そして、これから何を選ばねばならないのか? さんねんなことに現実であり、現実についての認識である。われわれは、じぶんが亡者となる以外に、亡者の良し悪しを撰択するなどということはありえないのである。

いま、わたしたちは、この世界に出現する事柄と、わたしたちの社会に出現する事柄について、すべてを抑え直さなければならぬところなきにきいている。自己に対する世界に対する懐疑なしに、福音をとくものに禍いあれ。ただでさえ、社会主義の指導者と称する連中も、資本主義の民主主義者と称する支配者も気狂いじみた火花をうちあげている。どちらにしろんでも、わたしたちの撰択した現実には救済されないことだけはわかりきっている。すべてを抑え直さなければならぬし、気狂いじみた指導者が、社会主義の勢力か、資本主義の勢力か、何れかを選べといつても、われわれは亡者を拒絶しなければならぬ。わたしたちの現実を、その抑圧と疎外を何遍でもえらび、そこからすべてを変革しなければならぬし、それ以外の方法は与えられていないことを知るべきである。

エンゲルスの哲学

—ある夏季学習会からの報告—

1、はじめに

これは、ある大学の夏期学習会からの報告である。私は、安保闘争の荷い手であつた二、三年生と、それを直接には体験しなかつた一年生が、エンゲルスの哲学をどう受けとつたか、という報告と同時に、現在の「正系」マルクス主義哲学のライト・モチーフを形成したエンゲルスの思想から、われわれが自ら解決の責任を負うべき理論的課題を引きだしたいと思う。

エンゲルスの思想は今までさまざまな角度から抱えられてきた。第一に、スターリン主義哲学と呼ばれるあまりに簡潔な教条の母体として。しかし、それがエンゲルスの忠実な模写というよりは、大衆に残忍な微笑を投げかけながら、大衆を「啓蒙」しつつ、それえの権威を盗みとろうとした啓蒙君主的な専横さの独創的産物であつたということは、彼が「哲学の止揚」というテーマを、そしらぬ顔で見逃したことから分る。

真 樹 朗

第二に、スターリンの最大の遺産として、現在「自由主義的・民主主義的」改革者が何よりも大切に継承している、マルクス主義の諸カテゴリーの階級性という呪うべき偏見からの解放と関連して、形式論理と弁証法の問題が提起された時、エンゲルスは再びスポーツライトを浴びた。何しろ、歴史を超え、階級を越えた何物かを発見しさえすれば、あの階級性という鉄壁から逃れられるのだ。エンゲルスの断片の中からひろい上げた「ある限界の中で妥当する真理」。「初等数学と高等数学」……遂に鉄壁からの脱出口は発見された。何たる精神の安堵。精神衛生上の好ましき効果。しかし、それもうまくはゆかないことを、国会突入の闘士たちは発見した。

第三に、エンゲルスの思想の中に「改良主義」への志向、修正主義との親近さを発見した人々がいる。「新しき路線」の主張者も、これに飛びつく程うかつてではない。彼らはエンゲルスの子であることという前に、レーニンの子であることをいわなければならぬからだ。しかし、「思想主体に自己を投入して、現在の主体としてのカクメイの共産主義者たらんとするもの」としては、エンゲルス

は思想主体としてまことに不適格である。陰に陽にマルクスに対するエンゲルスの相異が主張される。エンゲルスはマルクスを絶対化するための「犠牲の贖」とされる。しかし、エンゲルスとマルクスの思想的相異については、何一つ決定的なことはいわれていない。エンゲルスの哲学的著作、「反デューリング」「フォイエルバッハ論」「自然弁証法」に関して、マルクスが何ら本質的な異議を差しはさまなかつたことは充分証拠をあげることがらである。エンゲルスは今まで常に「權威」としてか、あるいは「反權威」として扱われてきた。

何よりも、先ずエンゲルスがたとえマルクスを歪め、その背教者であつたとしても、我々は一個の思想家としての充分の尊敬の念をもつて最も原則的な全ての思想家に対して我々が接するのと同じ態度でのぞみたいと思う。そしてマルクス主義の思想史的過程をちよつと思ひつかへてみるだけで、エンゲルスがすでに、そこに留まらないことを知るであらう。

私の参加した学習会は、六一年八月末、東京から約四時間（汽車で）はなれた高原のユースホステルで行われた。参加者は、安保闘争のさ中、数々の「武勳」(?)で知られた全学連加盟の某大学の学生約三十名である。

テーマは、国家論、経済学と「空想から科学へ」であつた。各テーマに数人のチュニターが配置された。私は、「空想から科学へ」のチュニター、A君(第一章)、B君(第二章)、C君(第三章)と共に討論に加つた。

勿論この報告文が、事実をありのままに語るベツタリリアリズム

から程遠いことは、読者もすぐ気付かれるであらう。しかし、ここで語られたことが、安保闘争を闘った学生の集団の思索であることは読者が信じて良いことである。

2、東京での予備討論

—— パラグラフの分類 ——

予備討論に基いて、レジュメをつくるために私たちが、海や山やデモで日焼けした顔を集めたのは八月半ばだった。私たちが皆ちがう訳本をつかっているために、ページ数では読み合せができなかつた。そこで私たちはパラグラフに番号をふることにした。「空想から科学へ」第二章は全部で十二のパラグラフに分れた。「註1」そこで各パラグラフに「小見出し」をつけようということになつた。先ずA君が自分のアイデアをだした。

「始めざつと読み流した時には気付かなかつたけど、エンゲルスのこの文章は一見無方針に書き流したように見えて実はものすごく論理的に配慮されていると思うんだ。第二章全体の十二のパラグラフが四つづつ三組に分れる。そして各四個のパラグラフが内容上三つに概括できると思うんだ。僕は次のように「小見出し」をつけて見た。

- I
- a、Pr. 1、弁証法的思惟の発展(ギリシャ→近世→ヘーゲル)
- b、Pr. 2、思惟の弁証法的発展(現象→実体→本質)弁証法的、Pr.

中に弁証法的な考え方があつてヘーゲルはそれをまとめた、といっているが、このような見方が正しいとすれば、弁証法とは断片的なものだということになってしまうのではないか。哲学者を評価する時、その中にたまたま、弁証法的考え方があつた、とするのは、その思想を断片に還元することによって同時に、弁証法をも、自然と社会と思惟の一般法則といながら実は断片的なものにしてしまうのではないかなあ」〔註2〕。

「そうかなあ」と異論をはいたのはB君だ。「Pr. 2では、人間の認識の発展が、過程的に、最初は現象を把握する感性的段階として『連関と相互作用のかぎりなくからみ合つた光景』といい、この段階は哲学史的には、古代ギリシャのヘラクレイトスだ。次に、個々の要素を、それ自体として把握する段階へ発展し、これはベーコンやロックの機械的形而上学に照応するんだ。エンゲルスは、この段階からさらに、本質を弁証法的に把握する段階として次のパラグラフを設定したんだ。だからここで、歴史的、論理的把握が考えられたんで、君の見方はあたらない。Pr. 1では歴史的なものがそれ自体として述べられているから、そこだけでは、論理的把握はでてこない。しかし、Pr. 2では、我々が不断にくりかえす、認識の過程(Pr. 1をタテの過程とすれば、これはヨコの過程だ。)」と、哲学史とが統一的に述べられるんだ。それにエンゲルスは、哲学史を、唯物論↓観念論↓唯物論という、『否定の否定』の例として述べているんだから、これと類推して弁証法↓形而上学↓弁証法とみたっていいわけさ」〔註3〕。

C君の発言。「A君によればPr. 1は歴史的説明、Pr. 2が論理的説

3で扱う)

- c、Pr. 3、弁証法の論理—対立物の統一
- Pr. 4、自然弁証法

II

- a、Pr. 5、ドイツ哲学における弁証法的思惟の発生(カント)
- b、Pr. 6、ドイツ哲学における弁証法の完成(ヘーゲル)
- Pr. 7、ヘーゲルの限界
- c、Pr. 8、機械的唯物論から弁証法的唯物論へ

III

- a、Pr. 9、階級対立の激化は「三つの源泉」をいかに変化させたか
- b、Pr. 10、史的唯物論の形成と原理
- c、Pr. 11、剰余価値学説

Pr. 12、(Pr. 10、Pr. 11、を受けて)マルクスの二大発見

十二番目のパラグラフは、文庫本で、三行(岩波文庫)だから考へなくてもいい。僕はPr. 9は第一章に回して、Pr. 10は第三章へ、Pr. 11は経済学の方に回して、第二章ではPr. 1からPr. 8までを扱えばいいと思うな」。

「ウン仲々いいな」と相づちをうったのは、第二章を会場でレポートすることになってるB君だ。「そして最初の四個(I)を『弁証法的な見方と形而上学的見方の対立』として、次の四個(II)を『唯物論と観念論』、最後の四個は、まあ『三の源泉』だ。これでもうレジュメができるぜ」。

所でその時C君から意見がだされた。「Pr. 1では、アリストテレスからデカルト、スピノザ、そしてデイドロ、ルソーに至る思想の

明。B君によれば、Pr. 1は、予備的な説明でPr. 2で、歴史的論理的に説明される。どちらも、大げさで、不正確だと思ふんだ。エンゲルスは、Pr. 1からPr. 4まで全部を形而上学的見方と弁証法の見方の対立として述べているんだ。A B両君の見方では、Pr. 2は、認識の三段階の最初の二つをのべたので、第三の段階はPr. 3になる。しかし、僕は、1も2も3も4も、皆、形而上学と弁証法の対比だと思ふんだ。それが当時のエンゲルスの考えだったんだ。彼は自然弁証法でこういつているぜ。『連関の科学としての弁証法の一般的性格を形而上学との対立において展開すること』〔註4〕

読者にはここでのA、B、C三君の立場が、どの一人をとつても、矛盾しており、一人も一貫していないように見えるかも知れない。A君が発言した「Pr. 3と4の内容の問題はしばらくおいて置く。若し、Pr. 2の前半と後半を、認識の過程における、我々が、現象論と実体論と仮に呼んだ段階に当るとすれば、Pr. 3は、その止揚された段階として内容がかかれる筈だ」とみていいだろう。」

といってA君は考えこんでしまった。Pr. 3、4は凡そ次のようになっている。(註1で示したように、Pr. 3は英語版では五つのパラグラフに分れている。それをイ、ロ、ハ、ニ、ホとしよう。同様にPr. 2はイ、ロ、Pr. 4もイ、ロ、に分れる。)

Pr. 3の内容

イ、形而上学者は、事物とその思想的模写である概念を、全然媒介のない対立において考える。肯定と否定、原因と結果は絶対に相排斥する。

ロ、形而上学的見方は、対象の性質に応じて、ある一定の限界で

ここではむしろ、エンゲルスが内容上、認識の発展を、現象↓実体↓本質と考えながらそれをも、形式上、形而上学と弁証法との対比として叙述した、内容と形式の矛盾こそ問題になるのではないだろうか。

ここでの討論ではしかし、このナゾをとくカギが何であるのか分らなかった。B君は不安になった。彼は皆の前でレポートしなければならぬ。少女歌劇の「男装の麗人」のように美しく、艶福家をもつてきこえるB君は、彼女にたのんで、次のような表をつくつてもらった。表は二つあって、きれいな字でこんなことがかいてある。

第一の表は、「反デューリング論」序文、序説、第一篇「哲学」の各章に(勿論、「空想から科学へ」に載っている所はのぞいて)「空想から科学へ」第二章のパラグラフのどこに関連するかが、記載されている。第二の表は、第一の表を組みかえてつくられたもので、「反デューリング論」全体が、ぼう大な断片の集成とされて、その各断片が、第二章の各パラグラフに再配分されている。こつそりと読者にその一部を紹介しておこう。カッコの中の数字は、大月版ME選集十四巻の頁数である。

Pr. 3、4

イ、「対立物の統一」死、気体と液体(二三)、生命↓死(一八四~五)、量的同一性↓転化、エネルギーの例(十三)極性の一致、数列(二四一)、有限と無限(二四一)、真理と誤謬(二九八)、運動と物質(二五三)、分子と潜熱(二五九)、

ロ、「量質転化」水(二三二、二五〇)貨幣↓資本(二四八)

は有効であるが、おそかれはやかれ限界につき当り、一面的で、偏狭で、抽象的なものとなり、解決のできない矛盾に陥る。

ハ、生と死は嚴格には区別されない。死は長くつづく過程である。ニ、どの有機体も、各瞬間毎に、同一物であると同時に、同一物ではない。

ホ、いっそう厳密にみると、対立物の両極、肯定と否定は対立していると同時に、不可分である。両者は相互に浸透しあっている。原因と結果は、世界全体との一般的な連関のなかで観察するやいなや、普遍的相互作用に解消する。

B君が発言した。「エンゲルスはここでも形式論理と弁証法を対比して見ているんだ。Pr. 2を僕らは勝手に、現象↓実体とみたけれどやっぱりマズかったのかなあ。」

A君が発言した。「いやちがうさ。Pr. 2はどうかきかえたって、認識の発展段階としての内容をもっているんだ。若しも、弁証法が単に形而上学との対比において抱えられたら、つまり、生長、発展と、連関の論理としてしかいわれないなら、それは、ギリシャのヘラクレイトスや、『諸行無常』と変らないさ。それは現象論になつてしまふ。しかし、それすらもエンゲルスは『ここでは二つの思惟方法の根本性格を簡単にのべておく』と述べているんだ。それにリンネからダーウィンへの生物学の発展を例にしているのをみても、そう見るのが正しいのだ。勿論、実体論と形而上学はイコールではない。三浦つとむ流にいえば、実体論を度はずれに拡大すると形而上学となるのだ。」

協業↓マニファクトリア↓大工業(二五〇)、炭素化合物(二五一~二)、ナポレオンの軍隊(二五二)ハ、「否定の否定」資本の蓄積↓止揚(二五八)、大麦の粒(二六三)、 $a \rightarrow (a) \rightarrow a^2$ (二六五)、微分方程式(二六五)共有↓私有↓共有(二六〇)、哲学史(二六七)、ルソーの平等論(二六八)

ニ、「否定の否定とは？」(二七〇)ホ、「弁証法とは何か」(二七一)へ、「弁証法的否定と形而上学的否定」(二七一)

〔註1〕岩波文庫、国民文庫で一字下げている所をワン・パラグラフと算える。ドイツ廉価版(一九五九)でも同じ。但し、英語版 Foreign Language Publishing House (Moscow 1958)ではPr. (Paragraph) 2がさらに二つに、Pr. 3が五つにPr. 4が二つに分れ全部で一八個のパラグラフから構成されている。本稿では、邦訳版、独語版の分割に従う。

〔註2〕Pr. 1の内容は次の通り。一八世紀のフランス哲学と同時に、またその後に、新しいドイツ哲学が生れ。ヘーゲルにおいて完成した。古代ギリシャの哲学者は天成の弁証家だった。近世の哲学は全体としてはイギリスの影響によって形而上学的だったが、デカルト、スピノザのように弁証法の輝しい代表もいた。一八世紀フランスも哲学専門の領域以外では、デイドロ「ラモーの甥」ルソー「不平等起源論」のごとき弁証法の傑作を生んだ。尚「反デューリング論」中の次の言葉を参照せよ。

「否定の否定の法則(弁証法と、読んで良い―マキ)のは、自然

と歴史のなかでも、またそれがついに認識されるにいたる以前の我々の頭脳のなかでも、無意識的におこなわれてきたのであって、これがヘーゲルによってするべく定式化されたにすぎない」(大月版M・E選集一四卷二七三頁。以下本稿でカッコの中の和数字は同書の頁数を示す。)

「ギリシヤ人にあつては——まさに彼らがまだ自然を分解し分析するところまでですんでいなかったという理由で——自然はまだ全体として大局的に直観されている。自然の諸現象の全体的連関といつても、個々の点まであきらかにされているものでなく、それはギリシヤ人にとっては直接的な観照の結果なのである。ギリシヤ哲学のふじゅうぶんさはこの点にあり、これがためにギリシヤ哲学のうちに他の見方に屈服しなければならなかった。しかしながら、その後のあらゆる形而上学的な競争相手に対するギリシヤ哲学の優越性もまた、この点にあるのだ。形而上学がギリシヤ人に対して個々の点で正しいとすれば、ギリシヤ人は形而上学に対して大局的な点で正しい」(三一)。この引用はPr.2の内容をも補足している。

「弁証法における否定とは、たんにいなということでも、一つのものを存在しないと宣言することでも、そのものを任意の仕方でもこわすことでもない。すでにスピノザはあらゆる限定または規定は同時に否定であるといっている」(二七二)。

「数学そのものは、変量をとりあつかうことによって弁証法的領域に足をふみ入れる。そしてこの進歩を数学にもたらしたものが、弁証法的哲学者デカルトであることは注目すべきことであ

ははつとした。彼は例の対照表を眺めて、生命と死、固体と液体、運動の例を説明をした。「次へ進みます」というとまた声が上った。どうもまずい。

ヤセツポチのT君である。「やつぱりおかしいな。人間が将に死ぬ瞬間。人間は死んでいると同時に生きている。水が氷になる瞬間、水は固体であると同時に液体である。飛ぶ矢は全ての瞬間にそこにあると同時にそこにはない。オレが疑問に思うのは、先ず、死の例と水の例の二つと飛ぶ矢の例は同じ意味でいわれているのかどうか。そして、死の例と水の例では、他の瞬間には弁証法はなりたないのか。また、飛ぶ矢の場合、何もむりして、そこにあると同時にそこにはないといわなくても、運動しているといえれば、その本質は把えられるではないか、ということだ」。会場はざわめいてきた。

巨漢(約二六貫)のS君が手を上げて発言を始めた。「死の例と水の例とくらべて運動の例が同じ意味かどうかは、その内容によるのだから、君の後の方の質問に答えればいい訳だ。死や水の例では、液体、固体という区別が絶対的なものでないことが、ここから分るのだ。だから、ある瞬間においてだけ矛盾が現れるのではなくて、その瞬間が端的に矛盾として把えられるのは、元来その区別が絶対的なものではないからだ。

運動の場合も従って同じ意味でいわれている訳で、同時にそこにある、且つない、というのは、決して映画フィルムの一コマと次の一コマのようなことをいっているのではなく、現実には、その一コマの中であると同時にない、ということだ。レーニンには、マッハ主義者が映画のコマのように考えることを鋭く批判しているね。

る」(二四三)。

〔註3〕Pr.2の内容については、註1のギリシヤ人に関する引用を見よ。尚それ以外に「分析なしに綜合はない」(二二八)哲学史に関しては「古代の哲学は、自然発生的な唯物論であった。……物質に対する思惟の關係の真相をきわめることができなかった。ここから：靈魂についての学説が：靈魂不滅の主張が、最後には一神教が生れた。こうしてふるい唯物論は観念論によって否定された。しかし哲学がさらに発展するにつれて、観念論もまた維持されなくなり、近代的唯物論によって否定された」。

〔註4〕大月版M・E選集一五卷、五二頁、「弁証法」の冒頭。

3、午前の討論 — 対立物の統一 —

いよいよ本番である。場所は宿舎の大広間、窓の外は一面の白樺並木、誰もが「何故ここへこんな仲間と一緒にきたのだろう」と思っている。B君は先ず向って右側にかたまつた女性の一団に「品定め」の一瞥を投げ与えてからオモムロに始めた。Pr.1、2は何とか無事にすんで、Pr.3の説明に入った。

「弁証法は、だからな、物事を固定的に把えないで、運動、変化連関として把えるんだ。するとな、肯定と否定、原因と結果、量と質なんでも互いに転化したり、同一物だったりするんだ」。皆、キツネにつままれたようにしてきている。B君自身、話していることに自信はないのだ。一人の勇敢な質問者が現れた。「なんだかさっぱり分らないぞ、実例を上げて分りやすくやってくれ」。B君

このことは、科学的にもうらづけられることで、生命の場合は物質代謝が、気体と液体の場合では、気体方程式と浸透圧の方程式が同じ形でかかれること、運動の場合には、それを記述する微分概念が矛盾的にしか把えられないことが挙げられるね」。しかし質問者T君は、後へ引かなかつた。

「君の解答は、オレの質問の意味をますますはつきりさせただけだ。君は、区別の絶対性がくつがえされるといった。その批判は次のような、暗黙の前提を伴っている。甲が「固体は固体である。存在するものは必ず、特定の空間にある」と主張する。乙が批判する時、その批判の仕方は必ずしも、君(エンゲルスといつてもいいだろう)のようにする必要はない。「万物は流転する」といつたっていいんだ。所が、それが事物を矛盾として把えることにおいて批判しようとしたら、その批判は、被批判者の主張を受け入れそれをもとにして始めて成り立つのだ。つまり、そこには「固体は固体である」が依然として含まれている。「そうだ、君はいい点を指摘してくれた。つまり、そういう形での批判を止揚するというのだ。君は僕にくつがわかってるつもりらしいが、実は支持しているにすぎない。「僕の話の途中で、チャチャを入れなでくれ。君を支持するかどうかは問題ではないのだ。「固体が固体である。存在するものは必ず特定の空間にある」を弁証法が内包しているとすれば、弁証法が思惟の必然の(つまり正しい)歩みであることをいうためにはその前に「固体は固体である」という形而上学的な見方が必然であるといわなくてはなるまい。所がそれを「形而上学」として、弁証法と対立して、しりぞけてしまったら、ちっとも「止揚」なんか

ではなくなるではないか。コドモとコドモのけんかになってしまつて、オトナとコドモのけんかではなくなつてしまふのだ。物事を、運動、変化、消滅、連関として把握するためにヘーゲルは必要ではない。ギリシャ哲学で沢山だ。それに運動、変化、消滅、連関を把握することに反対する形而上学者が一人だっているか。全ては連関してゐるんだ。風が吹けばオケヤはもうかるんだ。この連関の論理は弁証法的ではないのか。でないとしたら、それは何故か。君は、主要な連関と副次的な連関という、哲学の創造的發展をやつてのけるつもりか」。

B君は心細くなつた。討論は自分と無関係に進行する。何でレポーターなんか引きうけてしまつたのだろうと思つた。マキ講師はアゴばかりなせている。隣のC君に話しかけてみた。「おいピンチだなあ。おれたち東京で何を討論してんだ。ちつとも役に立たないぜ」。C君がメモをとる手を休めて答えた。

「今気がついたんだけど、東京での予備討論と関係があるんだ。エンゲルスが内容上認識の發展する段階をとり上げながら形而上学との対比として述べていることが問題になつたなあ。T君が弁証法の論理として問題にしたことを、認識の段階的区別に適用してみればこうなるのさ。つまり、実体論の段階の必然性が把握されなければ、本質論としての弁証法への發展はできないで、現象論に逆もどりしてしまうのだ。ヘラクレイトスや、兼好、芭蕉、西行へとね。僕たちはパラグラフの分類を問題にしている間は、それが「対立物の統一」などということと関係あるとは気づかなかつたのだ」。

B君の頭は混乱して来た。現象↓実体↓本質という図式と、「対

立物の統一」との関係？「対立物の統一」などという論理は、本質の段階になつて始めてでてくることではなかつたらうか。現象↓実体↓本質の過程はそこに至る梯子のようなものだと彼は思つていたのだ。「坊ヤ」と呼ばれるY君が立つた。

「私は思うんですが、あるいは関係ないかも知れないけど、例えばハゲアタマの場合ですね。会場の笑い、騒然として来た。ヤジがとんだ。「ふざけるな！」「ナンダ、ナンダ学生課長のことか！」「いやちがうんです。人からきいたんだけど、ハゲ頭と毛頭は対立物の統一なんです。(ますます騒然)毛を一本一本抜いてゆくでしょ、すると毛頭がハゲ頭に転化するんです。だけどこれが対立物の統一として把握されるためにはですね、『ハゲ頭』という概念と『毛頭』という概念が『頭』という実在の中で統一されるときれなきやいけないうで、(その時またヤジ)「ハゲ頭が概念か、」いや、僕がいたかつたのは、弁証法っていうのも、概念と実在との関係、つまり認識論の問題として考えた方がいいと思うんだけど、「ハゲ頭」が概念なのか、実在なのか判然なくなつたから僕の発言はこれでやめます」。

B君はますます不安になつて来た。さつき隣のA君に話したら、彼は認識の發展段階と弁証法の基本法則を関連させて問題にしていた。今度の発言者は、概念と実在との関係における認識論の問題だという。こんなドタン場になつて色々な問題はでてくるのだ。しかし、それをゆつくり考える暇がない程会場はうるさい。アチコチで、ハゲアタマやヘラクレイトスや水の分子間引力や、デデキントの定理や集合論の矛盾までが飛びだして、雑談の花がさいている。「雑

談はやめて下さい。発言する人は手を上げて下さい」。

巨漢のS君がまた手を上げた。彼は他のテキストのレポートをした人で、いわば与党だ。それに彼は会議にはなれてゐるから、こういう時には、皆をうまく納得させてくれるのだ。K君はピンチヒッターを迎える気持でS君を指名した。

S君の発言。「今まで正式に手を上げて発言したY君とT君の質問に答えた上で、討論の方向について提案をしたいと思ひます。

先ずY君の問題について。「ハゲ頭」が概念かどうか、ということですが、唯物論の立場からすれば、Y君のように、概念と実在を先ず分離することはまちがつてゐると思ひます。この立場はカント主義におちいる危険がある訳です。

次にT君の質問に答えます。運動を矛盾として把握する必然性の問題ですが、先程微分概念について私がふれましたが、これは運動を数によって量的に把握することと関係があります。すると運動の質的側面と、量的側面の問題へと發展する訳です。

そこで提案する訳ですが、カント主義については第五のパラグラフで問題にし、量と質の問題は、これまた重要ですから、午後の学習会をそれにあてることにして、ここではもう時間ですから昼食をとるようにしたらいいと思ひます」。

効果は絶大であつた。皆、歓声を上げて、食事の準備を始めた。大衆とは極度の秩序に対しては混乱を望み、極度の混乱に対しては秩序を望むものである。先程はY君の発言が歓迎され今度はS君だ。しかし、T君は歓声の中で何かを発言していた。「S君のいうことはギマン的だ」といつているらしかつたが良くききとれない。T君も

あきらめて食事始める頃には、会場は再び静かになつた。ああ「パンと土地と平和」

4、ひるやすみ — 唯物論 —

ひるめしを驚くべき速さで終えてしまふと討論を始めた熱心なグループがあつた。(尤も、食事に対して熱心であつたのか、討論に對してかは判らないが)経済学のチューターをしていたグループだ。「ハゲアタマ」哲学を唱えた坊やのY君が「販売と購買の同一性」について話している(註1)。「売ると買うは同一物だ、といえ、変にきこえるけど、売るまたは買うという過程を、客観的な実在として見ると、売る⇌買うということは少しも変じやないんですよ。甲が乙から買う、とは乙が甲へ売るといふことですよ。問題は、販売という概念と、購買という概念が同じだ、ということなのではなくて、そういう抽象的な概念が実在との関連で把握される時弁証法が成り立つと思ふんです。販売という概念と、購買という概念が同じ抽象態としてのレヴェルで対比される限りでは、これらは絶対的な差別をもつてゐるんです。また、この差別を把握なくてはいけないんです。さつき皆に分りやすくしようと思つて、ハゲアタマをもちだした時には混乱しちゃいました。頭に毛があるかないかは属性の問題ですから」。

「だげどき、資本論の序文には、ヘーゲルの弁証法は逆立ちしてゐるけど、私のは足で立つてゐるってマルクス書いてるだろ。君のいうとおりだとすれば、弁証法は、唯物論の認識論として成り立つん

だ。所が弁証法はヘーゲルの観念論として完成された。君のいいわけからすれば、観念論ではそもそも弁証法なんて成り立たんということになるぜ」。

「ウーン、その問題は分らないけどな、Y君のいい分は基本的に正しいと思うな。おれたちが資本論読んでてもさ。いつもひどく抽象的に書かれたことでも具体的なイメージと結びついてると思うんだ。最も、そのイメージと言葉との距離があまり遠くて、判んなくなっちゃうんだだけだな」。

「ヘーゲルの場合にはね、概念はそれ自体実在的なものと考えられてるんだと思うんです。所がマルクスのいうように、それをひっくりかえしたら、ヘーゲルのような概念の把え方をそのままもってくるわけにはいかない訳です。どうしても、概念と実在とは一定の対立関係におかれると思うんです。マルクスがこういうでしょ『意識にとつては、カテゴリーの運動が、現実の行為にみえる、世界が意識の生み出したものとなる。所が、思考によつて把えられた具体的総体性は、思考の産物であるという限りで正しいのだ』。この言葉はカントが『カテゴリーは、経験によつて与えられたものを逸脱しない限りで正しい』といっているのと、前提はちがうけど、内容は類似していると思うんです。カントの場合、カテゴリーの先験性という前提があるし、マルクスの場合、『思弁の構成の秘密』で明らかにしたような唯物論の前提がある訳です。僕はこの問題を『唯物論における疑似カントの問題』と呼んでるんですけどね。この問題で唯物論の立場から見ると一番役に立つ成果といったら、今でもやっぱり、イギリスの経験論でしょうね」。

「どうや、おれのいうとること仲々正しいやろ。そいういやあ、おれんこのアカハタ配り代ったよ。トリアッチがおっぱりだされて、ミンミン（民族民主解放戦線）になった」。

「さっきの話に戻るけどな。唯物論というのは、結局の所、世の中にあるものは全部物質だ、ということだろう。だから思惟というのは、物質が自分を意識するということだ。それはまた、物質の反映なんだ。そしたら、思惟と存在と対立させるのはおかしいんじゃないか。弁証法にした所で、存在の中にある弁証法が反映するんだろう。でなかったら、思惟が勝手に何かをつくり出すということになるぜ」。

「そりや変だ。論理の飛躍だ。第一、唯物論だって存在と思惟の対立から規定されるんだ」。

「それこそ変だ。君のいい分からすれば、一切の思惟をはなれた存在を認める、ということだ。所が思惟をはなれた存在をどうやって認めることができるんだ。君のは形而上学だ。姿もかたちも知れない何かを認めるのだ」。

「いや君こそ形而上学だ。君の立場からすれば、存在を語ることは思惟を語ることで、思惟を語ることは存在を語ることで。唯物論といつても、絶対的にあるものを認めるにすぎないから、観念論との区別はどうして生れるんだ。君の立場からすれば人間が何故誤った考えをするのか判らなくなるぜ。丁度、全ては神さまがつくった、といったとんに、神さまが何故地上に悪者をつくったか判らなくなるみたいにな。君のは唯物論の神学だよ」。

「神学で悪かったね」と彼がひらきなおってしまったので、話は

この問題は大雑把にいえば『概念的なものはどうやったら、感性的なものとのつながりを明らかにできるか』ということですね。マルクスのいう『下向と上向』という方法の問題にしても、僕にはこの問題と関係あると思えるんです。感性↓概念↓感性和図式化することもできます」。

「だけどなその問題は毛沢東が『実践論』で解決したわけだろう」。

「そうかなあ。『実践論』じゃあな、誰かが延安かどつかへ視察にいってき、屋根のカワラの色が何か眺めてるとその内、ひとりだけで、概念的把握になっちゃうんだ。そんでな、その正しさは実践によつて明らかになるんだ。これじゃまるで人間は検証のために実践するみたいだぜ。予想どおりの結果が得られたら正しい、とするぜ。プデングの味は食って判るんだ。所が、味は食わなきゃ判んないのがあたり前だ。若し、望みかなえればすべては正しい、てんだったら、ほらあのアメリカ帝国主義のイデオログ、何とかいったなそうウイリアム・ジェームス先生と変えないぜ」。

「あんな、おれはな、もうひとつ知つとるんよ。アカハタみるやろ。毎日、毎日こうかいてあるわ。『党員増は、二つの敵路線の正しさを、実践によつて検証しとる』てな。そんでこんどヨヨギにビルが建つんだとよ。『二つの敵路線』の故に、党員がふえたんか、にもかわらずふえたんか、それ以外の理由でふえたんか、奴らは何もゆわんのだ。するとやなあ、ある一つの実践を、ある理論の検証や、というためには、理論自体がどうしたらええのか、ゆう問題がでてくると思うな」。

そこで終った。Y君は、B君をさそつて、女学生と散歩にでかけた。ヤセポチのT君は、A君やC君とつれだつてどこかへいったらしい。S君は、B君と打ち合せをして、午後はS君が八百長質問をすることになっていたので、B君のもっている対照表をみて何かメモをとっていた。いやはや大変な陰謀である。誰がこの陰謀を打ち破るだろうか。事実は小説よりも奇なりと申しまして、以外なことに、午後の討論を冒頭から混乱におとし入れたのは、ドモリのH君である。彼の思想は極めて民社的で、ウワサによれば、彼は学習会を混乱させるために「民学連」から派遣されたのだという。当のH君は今、宿の女中さんのオシリをさするため、廊下の角でイキをこらして待ち伏せをしている。T君やA君やC君は何を話していたかというんですか。そんなこと知りませんよ。私だって色々することがある」。

「註1」この論争では「経済学批判序説」「フォイエルバハ論」等が扱われることになるが、内容は多く知られてると思うので、出典は、いちいち示さない。どうせ読者は註なんて読まないだろうし。

5、午後 の 討 論 — 量 質 発 展 —

K君は今度こそうまくいったと思った。反デューリング論から水の量（温度）から、質（態）の転化を引用し、その上精密なグラフを模造紙に書いて説明を加えた。いやそれだけではない。プロレタリア革命にそれを適用して、日和見主義者を論破したのだ。

さらに、有機化合物の例をだして、それが資本論にもつていることを指摘した時には、向って右側の女性の一团も熱心にメモをとって聞きいつていた。

C _n H _{2n} O ₂		沸点	融点
n=1	C ₂ H ₂ O ₂	100	—
n=2	C ₂ H ₄ O ₂	118	17
n=3	C ₂ H ₆ O ₂	140	—
n=4	C ₄ H ₈ O ₂	162	—
n=5	C ₅ H ₁₀ O ₂	175	—

← 量 → 質
[K君の書いた図表]

ルスもやはり、一九世紀のまだ、科学も未発達で、資本主義も現代のように福祉国家的な方向を見せていない時代の思想だったと思うんです。この化学の例が一番良くそれを示しています。

若しエンゲルスが正しいとすれば、次の場合どうなりますか。
第一、沸素化合物の場合

X—Fn		沸点
n=1	Na F	980
n=2	Mg F ₂	1400
n=3	Al F ₃	1040
n=4	Si F ₄	-77
n=5	P F ₅	-83
n=6	S F ₆	-55

← 量 → 質
[H君の図表1]

若しこの図表を次のように書きなおしたら諸君はまたどうしますか。
でもこの場合は諸君は何か逃げ道を見つめるかも知れませんが、次の場合はどうでしょうか。
第二、炭素の三つの態の場合。温度の変化もなく、分子内の組成

沸点	Mg F ₂	n=2
1400	Mg F ₂	n=2
1040	Ae F ₃	n=3
980	Na F	n=1
-55	S F ₆	n=6
-77	Si F ₄	n=4
-83	P F ₅	n=5

[H君の書いた図表2]

原子数の変化もなく、炭素は不定型炭素(例えば獣炭)、グラファイト(黒鉛)、ダイヤモンドという三つの全く質的に異った姿をもっているのです。
諸君が、若し弁証法をもって、資本主義の否定を、また漸進的改良を批判するためには、その弁証法は一般的真理でなくはいけない。しかし、今日の全ての科学が、マルクス主義の非合理的な形而上学、黙示録的予言趣味を雄弁に批判しています。(H君の発言は実際にはもっと長く、名文であった。私は彼の発言が、ドモリを訂正されて読者に伝えられた場合の恐るべき効果を考えて、短縮してしまっただけだ。会場は一挙に沸騰点にたっしてしまっただけだ。)

まず巨漢S君が立ち上った。「全ての反共思想家に共通する本質が今のH君の発言の中にも明確に浮び上っている。それは、マルクス・エンゲルスの歪曲に基づく批判である。第一に量質発展の法則があるが故に、革命は飛躍として行われるべきであると、エンゲルスは一度もいわないばかりか、むしろ積極的にそのような「熱病やみのヘーゲル趣味」を歪曲として批判している。
第二に、エンゲルスは唯一度も自分の思想がその時代の科学の発展によって制約されていないと主張したことはない。
エンゲルスの挙げた個別的な例証に、現代の科学からみて誤りがあるのは当然だ。しかし我々は彼の個々の命題ではなく、そのすぐ

れた方法的核芯、つまり唯物弁証法をそこから学ばなくてははいけない。

T君が立ち上った。「S君の発言では問題の焦点をずらせることが核芯なんだ。第一の問題に関して、たしかにエンゲルスは、法則があるが故に、とはいわない。その代りに、先ず何ら規定されていない抽象的な「法則」なるものもちだされ、次にそのおびただしい例証がもちだされるのだ。S君に若し『では量質発展の法則はどうなる』ときいたら、恐らく彼は再びより正しい例証をもって答えるだろう。自然や社会や思惟の中に、ある量的に計測されうる漸次的変化から、突然の質的变化へと飛躍する例は無数にあるだろう。例えば、オシッコがこらえきれなくなって、便所へかけたすのだったとしても知れない。そしてその限界点において、「こらえる」と「こらえない」は対立物の統一であるかも知れない。例証主義は卑俗であるから誤りであるのではなく、構成する概念が無規定のままに投げだされ、抽象的な法則と実例が単に対応させられているにすぎないから誤りなのだ。我々がこの法則と実例の対応関係それ自体を問題にしないで、放置しておくかぎり、法則自体まったく無意味なものとなるのだ。一つの事例がくつがえされれば、他のよりよい事例へと移ってゆく。この限りで二法則は絶対に誤りである筈はない。それは将に無意味であるが故に、だ。若し、それが意味をもつとすれば、それは、法則にもとずくが故に正しいと暗黙の内に主張することによってなのだ。中国製の哲学教科書をみたまえ、非常に多くの「実践的実例」が、ブルジョア哲学の非実践的な性格と対比されつつ提出される。例えば、教条主義者や、経験主義者は……こ

の尊敬すべき実践性の本質は何か。著者は読者に暗黙の内に、党の方針は、哲学の法則が正しいが故に正しいと認めさせているのだ。中国製哲学は、その内部の分派斗争における勝利者の神学となっている。そして現在「正しいもの考え方」を学びつつ、大衆は、「正しい党の考え方」を学んでいる。指導者はアテンションの中で、矛盾の主要な側面とか、敵対的矛盾と非敵対的矛盾とかいうだけで、すでに大衆から正しい、とされる事前教育が行われているのだ。ミンミン青年同盟にしてまたしかりだ。エンゲルスの思想の欠陥の中から、イデオロギーとしての「マルクス主義」が生れたのだ。

第二の問題も、簡単にふれるとしよう。エンゲルスもまたその時代の制約をうける。従って個々の命題でなく方法的核芯、唯物弁証法を学べとS君はいう。個々の実例を命題とおきかえ、将に問題となっていて、量質発展を、唯物弁証法とすりかえる所に彼の思想の本質が現れているのだ。S君が午前中に、自ら量質発展をとり上げようといったことについては何もいわない。しかしこのスリカエは見逃せない。

思想が時代によって制約され、思惟が対象によって制約されることを前提とするS君が、時代によって制約されたエンゲルスの思想の中から、個別的な対象の制約をこえて成り立つ「方法論」なるものをいかにして抜きだしてきたのか。何故このような「方法論」が可能なのか。S君は答えるだろう。第一に、時代を共通する客観的事物の存在。第二に、個別的な存在の本質を抽象として把握することによって。若しS君が、それ以外の答えをだしたら、僕はS君が、前に述べた内容と矛盾することをただちに示して見せよう。

つまりS君は、実例を個別と、方法を抽象的普遍とみている。若し、実例がくつがえされたら、その方法の正しさを主張すれば、いいのだ。しかし、その方法（例えば、「量質発展」）もまたくつがえされたら、今度は「唯物弁証法」だ。S君とエンゲルスと時代の距離がひろくなればなる程S君は、エンゲルスからますます抽象的な方法を学ばなければならなくなる。そもそも、対象と主体（存在と思惟）の関係（認識論）としてしか成り立たない筈の方法論を、単に抽象された対象としか考えない誤り、元来、実例においてしか内容が示されていない法則を実例をこえて理解しようとするこの不可能さ、についてはいわないことにしよう。T君は、批判者、問題提起者としては鋭い指適をするが、そこからどうするかについてはいつも何もいわない。そこで討論が、混乱したりワキ道にそれたりすることがある。

新たな発言者M君が立ち上った。M君は、ずっと長い間発言したくてたまらなかつたのだが、一体何をいつていいか分らなかつた。T君の発言の後半になってやっと発言のチャンスをつかんだのだ。

「T君は、S君の客観主義を見事に批判しはしたけれど、T君自身はまだ客観主義を完全に克服してないことだから、H君の提起した問題への解答とはならないと考えるのです。客体化された理論としてのマルクス主義を問題にしている限り、H君の立場とS君の立場の間を動揺する以外にはないのです。マルクス主義は先ず何よりも、世界観です。それは疎外され、物化された定在としてのプロレタリア主体の論理として、マルクスの実存の立場に自らを主体的に投入する、不断にマルクス主義者たらんとする立場において把握さ

れるのだと思います。このようなプロレタリア的実践の場所的自覚の立場に立たない限り、一切の理論は灰色の屍にすぎないのだと思います。我々は、このような灰色の理論を、客観主義的にうんぬんするのでなく、先ず何よりも、このような客観主義を克服した主体的な立脚点に立たないかぎり、哲学とか、論理学とかいってもナンセンスだと思っています。」

「やはりそれでは何もでてこないのだ」と叫びながら立ち上ったのは、「空想から科学へ」の第一章をレポートしたA君だった。「先ずマルクス主義が一つの理論として把握されなければならないことは今までの第一章を研究する中からすでに明らかになっていると思います。『人間が物を、ではなくて、物が人間を支配している』と喝破したトマス・カムパネラ、人間の疎外されざるべき（譲渡すべからざる）権限を主張したルソー、また多数の社会主義者、無政府主義者は、プロレタリアの解放、人間の解放を主張していました。マルクス主義がそれらと区別されたのは、その理念においてではなく、科学としての理論においてだったと思います。このことを私たちは、及川朝雄氏のようなどうしようもない結果論者を批判しつつ学んできたわけですから。」

エンゲルスがその時代に制約されていたということから、僕たちは時代を共通する何物かがそれが方法と呼ばれようと、世界観と呼ばれようとを抽象してきた所で意味のないことだと思えます。それよりも、僕たちはむしろエンゲルスの把握の中から進んで、僕たちが解決しなければならぬ問題を発見して、それを自分の課題とすべきだと思います。エンゲルスの誤りや欠陥を、その時代に帰し

た所で我々には何もなりません。エンゲルスがその時代においてすでに正しく考えていたか、また、時代と共にその思索はどのように進むべきであったか、と考えてゆくために、H君の提出したデータは役立てられるべきだと思います。討論を本来の主題に戻すべきだと思います。」

B君が立ち上った。「H君のデータを見て分るよう科学的には、水の場合も、有機化合物の場合も、炭素の場合も、まだ確定的な解答はでてないかも知れないけど、物理化学によって、分子内の原子の空間的構成や、その間の静電引力、それに外から作用する熱エネルギーの問題として扱えられる訳ですね。化学者が若しエンゲルスの言葉をきいて分つたような気になっていたら、多分物理化学なんて発達しなかつたかも知れません。」

T君の発言に関連させて、エンゲルスの命題を見た場合、ここでエンゲルスが実験式における構成分子数の変化と、融点の変化を、その内部の関連を抜きにして考えていたことは明らかだと思えます。この両者が外的に対応させられている訳です。炭素の場合と比較すれば一番良く分ります。

そこで今日の我々から見て、このような欠陥をもっているということは、その時代においてすでにどのような問題を含んでいたからなのだろうか、と考えてみなくてはならないと思えます。（尤も、その当時すでにエンゲルスは炭素について知りえた筈ではないかと思うのですか。）

そこでY君の発言と関連する訳ですが、量あるいは質というカテゴリーはそれ自体として転化する筈はありませんから、実在である

水や、有機化合物を媒介として転化する筈です。所が、それでも量が質に転化するといわれる限り、量あるいは質というカテゴリーがそれ自体一個の実在とされなければならぬ訳です。つまり、中世後期の哲学者の論争テーマであった有名論と実在論との対立において、量質は「実在論」的に扱えられる訳です。

私たちが予備討論をした時、こんなことが問題になりました。エンゲルスはPr.2で認識の発展する過程を述べていますが、この内容からはどうしても、弁証法は事物の本質的な把握として、形而上学的見方を包摂したより高度の段階とされなければならない。所がエンゲルスは形式上、弁証法と形而上学を常に、パラレルに対置させつつ叙述するのです。この問題点は、パラグラフの分類を討論している間はそれ以上進みませんでした。所が、弁証法のいわゆる論理、対立物の統一を問題にした時、両者、つまり弁証法の論理学と認識論とは同一のものである、と考えるようになりました。今の所、現象↓実体↓本質と発展する認識論と、対立物の統一といわれる論理学と、概念やカテゴリーと実在との関連を規定する唯物論の命題とは、形式上当面、バラバラの形で述べより他はないのですが、（この三者を仮に、認識論、論理学、唯物論と呼んでおきたいと思えます。）認識論の立場から、論理学の問題を考えてみるとどうなります。（唯物論↓認識論↓論理学と叙述することが望ましいわけですが。）いわゆる論理学の基本法則の認識論から見て実体論の段階に当る面を見ると、その点における規定の必然性が明らかでない。従って、弁証法は実体論に固執する形而上学を克服したと称しながら、実は、現象論へと後退している訳です。

これを唯物論の立場から見ると、実体論の段階において、カテゴリーが実在化されているということになると思います。

エンゲルスは、自然弁証法において、『弁証法の諸法則が抽出されるのは自然の歴史ならびに人間社会の歴史からである。…それらの法則は、…二つの局面での…もともと一般的な法則である。要点において次の三つの法則に帰着する。量から質へ、また逆の転化の法則、対立物の浸透の法則、否定の否定の法則。…我々はここで、弁証法のハンドブックをあらわそうとしていたのではなく、弁証法的な法則は…理論的な自然研究にとっても有効である、ということをしめそうとしているにすぎない。(Nur nach zu weisen)それゆえ我々は、これらの法則相互の内的連関にまでたどり着くことはできない。(Wir können daher auf den inneren Zusammen hang jener Gesetze unter sich nicht eingehen) (M・E選集・大月版一五巻の頁五二〜三)』と述べていますが、私たちは三つの法則の相互連関という問題以前に、唯物論、認識論、弁証法の論理学という問題が、相互の関連性なく、扱えられていることに、最大の問題点を見るべきではないでしょうか。私たちの討論でも、東京での予備討論では認識論を、T君は論理学をY君は唯物論を問題にしてみました。しかし、それらが個々バラバラに問題にされている限り、私たちは袋小路から脱けだせないと思うんです。

B君の長い発言が終わった時、丁度夕食の時間となった。討論は打ち切られた。食後から消灯までは、自由な時間である。

限り、Pr. 6、7のヘーゲルに関する問題は扱えない。すると今の我々の力量からいって先へすすむのはどっちみち無理だと思うんだ」
「それだけではないでしょう」とY君が口を切った。唯物論の規定にした所で、『フォイエルバッハ論』と『神聖家族』が問題になるし、史的唯物論に関してはやはり『経済学批判』が問題になります。今までのマルクス主義哲学は、難しい方をすれば、初期の『経手稿』あたりから『ドイツイデオロギー』、中期のマルクスの経済学に関連した問題、後期のエンゲルスと、扱う文献からきたらこんな風に分れていたみたいなんです。この次には、時間的にタテの関連もみる必要がありますね。それにはB君あたりに(正確にはB君の恋人であるXさんに)そういう対照表をつくってもらうと便利ですね。所が当のB君は何か良い夢でもみているらしく、ニココリ笑ったまま眠りかけていた。

さてこれで読者ともお別れだが、帰りの汽車の中で話題に上ったクイズを紹介しておこう。それは「思想は時代の制約をうけ、時代と共に変化する。」(エンゲルス)さて、このエンゲルスの思想自体、時代の制約をうけ、時代と共に変化するとしたら、一体どうなるだろうか」というのだ。即座に解答者が六人名のりをあげた。「ラッセルの逆理だ」といった人。「『変化』は『止揚』と解すべきただ」といったアカハタ日曜版の愛読者。「唯物論における疑似カントの問題ですね」といったY君。「ルエーブルがすでに解いた」といった人。「いや黒田寛一だ」というM君。「宇野弘蔵さんの方法が適用できるんだ」というT君。以上の六人であった。さて読者はいかに解答するか。ではまた、お目にかかりましょう。

6、自由な時間 — 今後の問題 —

困ったのは今後の問題だ。エンゲルスの哲学の問題性を、唯物論、認識論、論理学の統一によって克服しようというテーマができた。所が、時間が無い。明日一日で果して第三章全部ができるか。C君は迷った。自分がせっかく、調べた所だ、レジュメも、ノートもできている。しかし、あと一日延ばして、ハイキングをつぶしたら皆から不満がでるのは明白だ。予算の都合があつて、宿泊を延長することもできない。結局、第二章はそこで打ち切りになった。T君、Y君はあきらめ切れない表情だ。B君はほっとしている。

A君がいった。「第二章では、史的唯物論を扱わない方針だったけど、実はすでにPr. 3からそれに関連しているんだ。原因、結果から、相互作用へと問題を展開させるのは、勿論ヘーゲル論理学の「本質論」をふまえているのだが、エンゲルスはこれを史的唯物論の内容において実現する考えなのだ。英語版序文も、『フォイエルバッハ論』もそうだ。そこからさらにPr. 8で述べられる『哲学の止揚』が関係する。哲学が実証科学に解消するといった時エンゲルスは、ヘーゲルの『歴史哲学』が史的唯物論に、『自然哲学』が自然弁証法に、『論理学』については良く判らないが、ともかく、各々唯物論では科学になる筈だったのだ。所がこれは、弁証法の根本規定に関連する。エンゲルスが、弁証法は、自然と社会と思维の一般法則だと何度もくりかえしているとき、そこでもやはり、『自然哲学』『歴史哲学』『論理学』がマークされている。この内容を扱わない

先 駆 第二号予告 (主内容)

階級意識と運動形態

—— 統一戦線論 (一) ——

佐久間 元

運動論なき学生運動

—— マル学同批判 ——

古賀 泉

フルンチョフの天国 (二)

対馬 忠行

労働者の前衛観

—— 日共大阪中電細胞離党事件をめぐる ——

大崎 悟

最近の闘いと展望

長崎造船社会科学研究会

安保闘争の教訓

山崎 衛

資本制生産関係における国家所有

姫岡 玲治

—— 国家資本主義考察の一瞥書 ——

〔書評〕 ドウナエフスカヤ「マルクス主義と自由」
マックス・シャハトマン「スターリンの社会主義論」
翻 二〇年代のロシア共産党左翼反対派のドキュメント

その他座談会など

一九六二年三月発行

労働者階級の自己権力と党について

芳村三郎

「前衛党」この言葉は、レーニン以来の過去何十年間の国際的共産主義運動において、不可侵な、何もかも超越した絶対的な概念であった。革命運動のすべてが「前衛党」の立場から語られ、総括されてきた。

革命運動の指導において、「前衛」としていかに正しく、また、誤っていたか、非前衛、反前衛といかに闘ってきたか、……革命の主体である労働者階級と人民大衆のすぐれた歴史的創意は、埃にまみれ、打捨てられたままであった。結局、階級斗争の歴史は、「前衛党」の勝利と栄光、裏切りと敗残の歴史でしかなかったのである。

そして、遂には、歴史に対する労働者階級の「前衛」としての絶対的な権利の名のもとに、階級の独裁は党の独裁にとって代られ、党の独裁は政治局の独裁に、そして独裁者にとって代られるという過程が進行し、若きトロツキーとローザ・ルクセンブルグの鋭い警告は、スターリニズム体制として実現してしまつたのである。

この過程は、ロシアという後進国における農民に支持されたプロ

レタリア革命が、左翼反対派の敗北と国際革命からの孤立に決定されて、真に社会主義を実現する永続革命の道からとぎされてしまつたという条件下において、自己をとりまく全社会的現実の意志を反映するものとして、ロシアの歴史的な経済的発展——労働の社会化と生産の集中——をブルジョアジーに代つて、衰退した労働者階級から独立しその階級的基盤を喪失したボルシェヴィキ党が、プロレタリアートの前衛の名において行なうという悲劇的な過程に他ならなかった。かくして、ボルシェヴィキ党は、新たな支配官僚の集団に転化し、彼らの権力の中核を形成することになつたのである。

スターリン批判とハンガリー革命は、歴史の裏舞台でひそかに演じられていたこのような十月革命の篡奪と変質の現実を、内外における矛盾の爆発として、全世界プロレタリアートの前に明らかにしたのである。それ以来、スターリン主義のプロレタリアートに対する裏切りの歴史の理論的説明、マルクス主義の革命的再生、それだ

けでなくスターリン主義を打倒してプロレタリアートの真実の階級的利益を実現せんとする運動が、全世界的に萌芽的に形成されわが国がこのような国際的な反スターリン主義闘争の先駆的な役割を果していることは周知の事実であろう。

問題は、スターリン主義に対する批判、闘争が、ここでも、再び特にわが国において、アプリアリな「前衛党」概念を保持したまま、その立場からのみ論じられ、闘われた点にある。十月革命の変質過程は、唯、孤立した後進国革命の諸階級の力関係の様々な推移にあつて、レーニン・トロツキーらのボルシェヴィキのインターナショナルな革命的精神と理論を裏切つた党指導上の誤りの結果としてのみ把握されたにすぎなかった。したがつて、裏切つた虚偽の「前衛党」に対して、真の「前衛党」を対置し、革命的理論によつて武装された真の「前衛党」を創造さえすれば、問題は一切解決するといふシエーマが形成され、その枠において、反スターリン主義の理論的実践的闘争が行われたのである。スターリン主義の裏切りに対する憤りと革命的批判精神の裏側に、真の「前衛党」さえあればという現実を超越したオプチミズムが存在したことは、極めて驚くべきことであり、それはこのような反スターリン主義精神の稀薄さと将来の陥没を暗示しているものといわなければならない。

実際、スターリン批判の一つの核心をなす十月革命の教訓の撰取と継承の問題は、唯、レーニン、トロツキーの労働農民独裁論と永続革命論の総括を軸にしたボルシェヴィキ党内外の戦略的理論問題として提出されたに過ぎなかった。その背後には、十月革命の一切

を準備し、これを細部にいたるまで支配し、決定したのは党である、党こそは、十月革命のすべてであるといふいわばスターリン党史と何らかわらない革命史観が存在したのであり、革命を数百万大衆の行為としてとらえ、その消え去つた無数の革命的創意の集積のうちから考察するというマルクス主義の根本的原則は依然として回復されなかった。

したがつて、ロシア社会民主党第二回大会での対立を契機にした初期トロツキーのレーニン組織論に対する批判の問題は、むしろトロツキーのレーニンに対する弱点として、トロツキーがスターリンに敗北せざるを得なかつた制約性として「……組織論におけるトロツキーの決定的な弱点と欠陥と誤謬……」（革命的マルクス主義とは何か）として、ほとんど顧みられることもなく切つて捨てられてしまつたのである。敗れたトロツキーの組織論を「何故、負けざるをえなかつたのか」として批判的に検討することは誤りではない。だが、そのことは、勝つたスターリンの組織論の源であるレーニンの組織論の無批判的放置、肯定を許して許しはしない。何故なら、スターリンの勝利は、党が階級に代位しただけでなく、その上位にたち支配することによつてもたらされた十月革命の篡奪者としての勝利であり、そのような勝利をもたらさざるを得なかつた歴史的諸条件を、我々は組織論的にも探究しなければならないからである。

まさしく、スターリン批判は、階級の独裁にとつて代つたスターリンの個人独裁（官僚支配としての党独裁の表徴的表現）を個人崇拜として批判せざるを得なかつた点において、また、ハンガリー革

命は、「前衛党」とその支配そのものにプロレタリア大衆が反逆し蜂起した点において、反スターリン主義運動に、そもその端初から、アプリアリな前衛的思考と立場、古典的「前衛党」概念に対する全面的な再検討をロシア革命以来のプロレタリア階級闘争の歴史的諸発展の分析のうちに、革命における党と階級の関係いかなの問題として行うことを課したのであった。

けれども先に述べたように、たかだか、前衛党のスターリン的疎外形態に対する批判はあっても、「前衛党」概念そのものの根本的検討は行われなかった。そのような問題意識は「アナキズム的傾向」というレッテルをはられて、葬り去られてしまったのである。

かくして、反スターリン主義運動は、失われた王国をとりもどさんとする運動に自己を卑劣化する傾向をもったのである。このことは革共同においても共産主義者同盟においても同様であった。

だが、安保闘争の敗北とブンドの崩壊過程は、組織論のこのような不毛と反スターリン主義運動の限界を一抛に突破する状況をつくりだしたのである。

一方では、虚偽の前衛を打倒し真の前衛の創造を呼ぶ革共全国委が、黒田組織論序説において、古典的「前衛党」概念を純粹に完成する方向をめざし、他方、それを日共と相似形にある前衛志願者の類弊として批判する吉本隆明、労働者のアナキーナ土着のエネルギーを評価しつつ、反パルタイ連合から反パルタイのパルタイをめざす谷川雁が登場し、それらの対立として問題は提出されたのである。共産主義者同盟の分派闘争は、この谷間にあって、その内実とかかわりあいなく呼号した唯一の前衛党という自己の立場に根本的に

制にみあった反体制側の官僚制の一つに転落し、自己の髓を独占支配構造によって侵蝕されてしまうからである。独占支配構造と交錯する抑圧されたプロレタリアートの階級意識をスターリニズムから自由解放するためには、本質において、官僚制を拒否する組織を創造しなければならない。そのための党組織論の構築は、古典的「前衛党」概念を徹底的に解体して、それをプロレタリアートの自己権力論の一環として再構成することによって可能となるであろう。

「組織論は、歴史的にも、論理的にも資本制的に疎外された社会の否定面をなすプロレタリアートの自己解放の理論とならなければならず、本質的には、彼らを革命的プロレタリアートとして生産し組織し革命闘争にむける前衛組織論でなければならない。」(黒田組織論序説)として、組織本質論を、前衛組織論として展開しようという問題のたてかたからは、レーニン組織論の政治技術的欠陥を克服すると称しながらも、古典的「前衛党」概念の純粹の完成にゆきつかざるを得ないのではないだろうか！ 何故なら、そもそも、組織論＝革命論(労働者階級の自己解放論)である以上、組織本質論は、労働者階級の階級への形成とその自己止揚の論、自己権力論でなければならず、組織本質論を前衛党組織論として展開することは、革命の主体的契機を党にだけ求め、プロレタリアートは革命の素材となってしまうからである。引用文のプロレタリアートの自己解放の理論が、本質的には前衛組織論でなければならぬとする立場は、トロツキーによって予言され、十月革命の篡奪過程にあって実証された。階級に代位する党を生んだレーニン組織論の純粹の完成をめざ

反逆することを遂げなしえなかった。その主要な分派、戦旗派とブル通派は、古典的「前衛党」概念の枠内で、安保闘争の小ブル急進主義の総括をめぐって錯誤をくりかえしながら、真の「前衛」革共同全国委の壁に激突し、吸収され、崩壊していったのである。

この過程は、極めて悲惨であった。それは、左翼反対派の巨頭たちが、スターリンとの闘争に破れて、一人一人、絶対不可侵の党の前に屈服してゆく過程に、論理的心理的構造において、極めて類似していたのである。そして我々にとってここからはじめて、組織論における一切の問題が提起されたといっているであらう。

すなわち、反スターリン主義の正統として絶対的地位を要求し、他をすべて異端として断罪し、自己への屈服を要求する革共同全国委は、結局は、反スターリニズムのスターリン主義にすぎないのでないか、労働者階級の自己権力のための闘争は、再び、古典的「前衛党」概念にささえられた反スターリン主義にとって代られ、篡奪されてしまうのではないかという問題である。

スターリン主義「前衛」に反スターリン主義「前衛」を対置しただけでは、現代革命について何らの組織論的説明をなしたことがない。何故なら、官僚制が支配官僚と反体制内部官僚に分裂しながらも統合せんとする運動をなす現代独占支配の構造においては、いかなる革命的理論を保持しようとも、それによって自己をプロレタリアートに代位し、プロレタリアートの自己権力のための闘いを何らかの特殊な形(例えば、反帝反スタ労働運動)にはめようとする、したがって自己のうちに本質的に官僚制への契機をもつ古典的「前衛党」概念にささえられた党組織は、必然的に独占支配の官僚

すものに他ならないのである。

かくて、現代革命の組織論は、本質論的には、労働者階級の自己権力として説明されなければならない。党組織論は、その一構成成分として、労働者階級の自己権力を形成する一契機としてとらええされることによって、そのつましい意義を明らかにされるであろう。つましやかではあるが、政治的には決定的な意義を。

我々のこの組織論への試みは、決して、直接的に追求することによって、直ちに構築されることはないであろう。それは、まず、パリ・コムミュン、ロシア革命のソヴェト、ハンガリア労働者評議会にいたるまでのプロレタリア階級闘争における具体的歴史的諸経験の分析と総括から始められることが必要であろう。

二

プロレタリア階級闘争において、労働者階級が階級支配に抗して蜂起を行い、自からの権力を樹立した歴史的経験は、一八七一年三月のパリ・コムミュンにはじまる。パリ・コムミュンにおいて、ブルジョア支配に反抗するプロレタリアートは、始めて、革命的闘争の経験を通して、歴史の主体としてそのすぐれた創意をもって、自己権力を創造したのであった。

それは、彼らがあらかじめ何らかの理論、方針を与えられて、それに従って創造したもので、決してなかった。むしろ、マルクスがプロレタリア独裁国家についての基本的分析と説明を完成する前に、しかも、マルクスの反対にもかかわらず(マルクスは、パリ蜂

起にはプランキスト的傾向があるものとして、始めは反対していた。(パリのプロレタリアートは、階級闘争の鉄火の試練の中から、自からの行為としての自己権力へ到達したのである。

労働者階級が、パリ・コンミュンにおいて、そのすぐれて自発的な創意によって、プロレタリア革命の中核を成すプロレタリア独裁の根本概念(コンミュンの四原則)を社会的現実において創造し、そのことによって、現代プロレタリア革命の起点を設定したことの意義を明らかにすることは、今日、極めて重要である。

何故ならば、「労働者階級は、それ自身の独力だけでは組合的意識しか……つくりだすことができない。」とレーニンを引用しつつ、「プロレタリアートが……組織的な革命運動へ、たちあがるためには、その自然発生性を脱却して目的意識性を獲得し、いわゆる即自的階級から向自的階級へプロレタリア自身が意識し人間変革をなしとけることが必要である。だが、『この「共産主義的な意識」はただ外部からのみもたらさうる。』(黒田組織序説)と現代革命の理論と実践のすべての源泉である労働者階級が存在するものにおける革命性、その歴史的創意性を否定することによって、革命の万能の神覚によって革命を創造せんとする運動が支配的な現在「革命的な思想の存在はすでに革命的な階級の存在を前提とする」「この階級は、すべての社会成員のうち多数者をかたちづくり、そしてそこから一つの根本的な革命の必然性についての意識すなわち共産主義的意識がでてくる。」と把握して「プロレタリア運動は、圧倒的な多数者の利益のための、圧倒的な多数者の自主的な運動であり」「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業である」ことを強調したマル

ト大衆におしつけられたのである。現代革命は、その過程そのものにおいて、自己権力の道から疎外されることによってすでに築き奪され、窒息させられてしまったのである。

労働者階級の偉大な歴史的叛逆は、一九五六年ハンガリー革命において、この自己権力の篡奪者スターリン主義官僚自身に向けられることによって、現代革命の窒息を打開するプロレタリア階級闘争の新たな歴史的時代の起点を築いたのである。まさしく、ハンガリアプロレタリアートは、自己権力の篡奪者に対して、自己権力を対置することによって、蜂起を行ったのである。けれども、ペテーフイ・サークルによって主導されたブダペスト蜂起の後に、全国的に形成された労働者評議会の革命的な意義を、ハンガリア労働者階級は自己権力として明確に把握することができなかった。それは、ゼネストを継続しながらも、革命によって崩壊した官僚支配を救済するため出現したカダール政権に対して自己を政治権力として対置し、カダールを打倒して政治権力を奪取する方向は与えられないままに、ソ連軍戦車の攻撃によって無残にも圧殺されてしまったのである。

百年にわたる現代プロレタリア運動において、三度出現し、敗れ去った労働者階級の自己権力の歴史的経験から、今日、我々が学ぶべきものは何なのであるか!

それは、「自からの階級形成の媒介者(階級闘争の指導者として反帝、反スターリン主義戦略をもつ真のプロレタリア党を創設せねばならない。)(早大新聞八百三十一号 山川和夫論文)」という唯、その一点において、総括されうるであろうか! たしかに、反スタ

クスを再びよみがえらせることは、極めて意義あるものといわなければならないからである。

パリ・コンミュンの流血の敗北の後、五十年を経て、労働者階級の自己権力は、後進国ロシア革命のうちから、まったく異った歴史的状況において、労働者階級の自己権力として出現した。労働者階級は、再び、自然発生的に、その固有な闘争形態、マツェンストライクとゼネストの中から、自己権力の萌芽としてのソヴェトを創造したのである。ソヴェトは、直接的生産者の行動団体としてのコンミュンの四原則のすべてを体現していた。

そして、労働者・兵士ソヴェトは、自己の手中にある政治的武器としてのボリシェヴィキ党の指導のもとにブルジョア権力、臨時政府を打倒して政治権力を奪取したのであるが、本来ならば、その歴史的使命を果して消滅すべき党が、後続する国際革命から切断された状況においてブルジョアの課題をになつて登場した官僚によって腐蝕されつつ自己に対立する権力に転化したことによって生じた新たな二重権力(填谷雄高)をめぐる闘いにおいて、ソヴェトは、官僚の権力(党)に屈服し、統合され、滅亡したのである。かくて、スターリン憲法は、労働者階級の自己権力としての労働者・兵士ソヴェトの墓標となったのである。

したがって、革命を篡奪し自己権力ソヴェトを打倒して成立したスターリン官僚権力の利益の貫徹を唯一の任務としたその後の国際的共産主義運動からは、労働者階級の自己権力のための闘いは、起るはずがなかった。ソヴェト形態は歴史的遺物として投げ捨てられ、ブルジョアジーとの妥協の形態、人民戦線が、プロレタリアーリン主義革命的プロレタリア党は必要であろう。しかし、反スターリン主義革命的プロレタリア党とは、そもそもいかなる党であるのか、それは、コンミュンといかなる関係があり、いかなる役割を果たすのか、ということが明らかにされない、かきり、何もいわれないのと等しいのである。

マルクスは、パリ・コンミュンの総括において、一般的な党の必要を語ることで満足するほど階級に対して無責任ではなかった。彼は、直接生産者の行動団体としてのコンミュンの四原則を明らかにすると共に、敗北から学ぶことによって、共産党宣言の修正を行うほど重要な教訓を明らかにしたのである。「とくにコンミュンには『労働者階級は、できあいの国家機構をそのままが手ににぎって自分自身の目的のためにつかうことはできない』ということを証明した。」と。

マルクスの死後、プロレタリア階級闘争が経験したロシア革命、ハンガリア革命の自己権力の歴史的経験を、我々も、また、マルクスに習って分析しなければならない。歴史は、我々の前に、マルクスに与えなかった新たな問題を提起しているのである。

それは、革命によって出現したプロレタリアートの自己権力が、ブルジョア権力との二重権力の状況を打破して、政治権力を奪取し、自分自身をプロレタリアートの唯一の直接的権力として確立するやいなやそのための政治的武器であった党も、また、権力に参与し、相互の間に、再び、新たな二重権力が生じ、自己権力は党に蔽れざるを得なかったが、プロレタリアートが、再度、勝利した党に反逆し、自己権力を対置した時、今度は、自からに政治権力を奪取する

ための武器、党がなかったために敗退した。そして、再再度、党を求めて……、というこの二重権力をめぐる自己権力と党との閉鎖したぬけ道のないサイクルをいかに打破って、自己権力の勝利と死滅、社会主義の実現にむかって進みうるのかという問題である。

勿論この問題は、革命の実現した国の政治的経済的成熟度と、世界革命の成否の問題という条件項を導入して考察しないかぎり、一片の抽象的思考の遊びに終ってしまうであろうことは明らかである。だが同時に、我々がロシア革命において、世界革命はまだ発展期にありレーニンも存命しその指導も貫徹していた一九二一年に、すでにソヴェトは有名無実になりつつあり、反対派の絶滅と党内分派闘争の禁止を契機に党の独裁への傾斜が始まった(クロンシュタットの叛乱)ことを知る時、この問題を独自に扱い説明することの意義も、また否定することはできないのである。

一九〇五年と一九一七年のロシア革命の研究のうちにこの問題の解明についてのいささかの貢献を期待することは誤りではないであろう。

三

一九一七年の革命の総稽古として、それなしには十月革命はありえなかった一九〇五年の革命は、一月二十二日の血の日曜日の虐殺をもって始った。外国資本の導入による大規模工業の勃興と産業の集中、資本主義の急速な発展は、ロシアの遅れた政治的経済的諸關係に極度の矛盾を激成し、日露戦争の敗北は厭戦の気分を充滿さ

せ、ツァーリズムは危機に瀕していた。

そして、社会民主党第二回大会で組織問題をめぐって分裂したボルシェヴィキとメンシェヴィキの国内外における閉鎖的なサークル内部による論争をよそに、一九〇三、四年以来、全ロシアをマッセンストライクの運動が、波状的に覆っていたのである。一月事件は、このマッセンストライクの頂点に立つと同時に、ツァーリズムへの一切の幻想を断った政治闘争への転化の合図でもあった。

「ペテルスブルグ事件の強大な衝動を受けて発した、一月のプロレタリアートの一般蜂起は、外面的には、絶対専制主義に対する革命的な宣戦布告であった。だが、この初めての一般的な直接行動は、かかるものとして、内面的には、遙かに強力な影響を及ぼし、恰も電撃も呼び醒ますごとく、無慮、幾百万人の間に、初めて階級的感情と階級意識を振起した。階級的感情のこの覚醒は、すぐさま次のことに現れた。それは、幾百万を以て数えられるプロレタリア大衆が、忽ちの間に、彼等が過去幾十年の間資本主義の鉄鎖の下に忍びきたったかの社会経済的存在に、最早耐えることは出来ぬ、という意識をひしひしと抱くにいたったことだ。ここに、かかる鉄鎖の自然発生的切断の一般的努力が始まったのである。」(ローサルケンブルグ、マッセンストライク)

国外にあって分裂抗争をくりかえしていた社会民主党諸分派指導部にとっても、革命が始まったことは明らかであった。今や、彼らが、その分裂せざるを得なかったそれぞれに固有の革命的理論的、組織的ヴィジョンにもとづいて、「かかる鉄鎖の自然発生的切断の一般的努力」のうちにその根拠を求め、それに明確な政治的組織的

方向を与えることが要求されたのである。

メンシェヴィキは、革命のプロレタリア的性格を強調し、プロレタリアートは、唯、ブルジョアジーのヘゲモニーのもとに、社会主義革命を日程に登せざる諸条件、政治的自由その他を獲得するために参加するという立場に立って、革命における政治的自由を確保したプロレタリアートの「広範な非党派的労働者組織」と反乱せる全民衆を包括した「広範な民主主義組織」としての「地方及び都市の革命的自治政府」を求め横暴していた。

レーニンは、このようなメンシェヴィキの方式を自然発生的に追従する日和見主義の典型として攻撃しつつ、一九〇五年六月に「社会民主党における二つの戦術」を出版し、プロレタリアートのヘゲモニーによる労働者農民の民主的独裁を対置した。ボルシェヴィキは、それに先だって、四月に第三回大会を開催し、革命的情勢に対応する基本的組織戦術を、党に指導された軍事組織による武装蜂起と臨時革命政府の樹立として、決定していた。

一九〇五年の革命に対するボルシェヴィキの基本的構想は、ペトログラード委員会軍事組織にあてたレーニンの手紙の一節によく表わされている。「……青年のもとにゆけ、今すぐ、到る処で、学生の間、ことに労働者の中に、戦闘部隊を組織せよ、即刻彼らに武装せよ、武器はナイフでも、ピストルでも、石油を含ませた放火用のボロでも、何でも手当り次第で結構だ。……一ヶ月か二ヶ月のうちにはピーターズブルグに少くとも二百か三百の戦闘部隊が出来ぬようなら、委員会は死物も同然である。差し当った作戦のために部隊の訓練を開始せよ。或る部隊はスパイの暗殺、また警察署の爆破

を企て、他の部隊は銀行を襲撃して叛乱の資金を手に入れることができよう。実践によって学べ。たとえ数千人の犠牲者が出るとしても、それによつて数百の経験ある闘士が生まれ、それが明日は数万人を指導するようになるのだ。」ここには、叛乱を技術として扱わんとする立場と共に、蜂起を、唯、旧来のブルジョア革命の特質であった街頭叛乱に準しめ、それを小数のよく訓練された軍事組織の手にゆだねてしまう傾向があることは否定できない。嵐のごとく出現したプロレタリアートの固有の闘争形態、大衆ストライキのうちにプロレタリア革命の独自の形態を考察するには、レーニンは、あまりにも大衆の自然発生的性に対する不信に貫ぬかれすぎたいたし、また現実の階級闘争のいぶきを感じ得ない遠方にすぎたのである。

革命が勃発するやいなや最も早く帰国したトロツキーは、この期間、メンシェヴィキの機関紙「ナチャロ」を舞台に、彼の永続革命論の最初の構想を展開しつつあった。トロツキーが革命の戦術的組織的展望について、いかなる見解を持っていたかは、資料的にはあまり明らかでない。彼の自伝によれば、トロツキーは「ツァーリズムに対する革命の完全な勝利は、農民の支持の下にプロレタリアートが権力を握るか、若しくは、かかる権力奪取への直接的過程を意味するだろう。」そして「……臨時革命政府は一般民衆の蜂起によつて、それ自からの機関として設立されるものである。……否、それ(臨時革命政府)は革命の過程そのものうちに出現するものであつて、その組織活動を通じて、かかる蜂起の成功を保証し、その遂行に最も力を尽すものではない。」という立場であった。

十月総罷業の最中に、トロツキーはペトログラードに到着したのであるが、彼はかかる立場から、「各一千人の労働者に対する一名の割に選出された代表の政党内組織」「ストライキを指導する代表の労働団体」の計画をもたらししたのである。

だが、ロシアにおける現実の階級闘争は、十月に入って全露鉄道従業員組合のゼネストによる国内経済生活の完全な麻痺状態をもたらした、全国的に全階層的——商店、大学、研究所、弁護士、医師までをもまきこみ進歩していた。ペトログラードは、その中枢として、政治的自由と八時間労働を要求したゼネストを極めて政治的な形態をとりながら続行していた。

そして、このゼネストの過程においてすでにメンシェヴィキによって百人に一人の代表会議が提案され、選挙がはじまっていたのである。この組織は一度確立するやいなや、メンシェヴィキの思惑をのりこえて、ゼネストの機関として、それを指導する総罷業委員会として活動し、ゼネストが一般性を帯れば、おびるほど、旧秩序の崩壊の中から、社会の新たな秩序を創造する労働者階級の自己権力としての萌芽的な性格を明らかにしたのである。

ペトログラードの労働者代表評議会は、あれや、これやの理論的方式や何人のイニシヤティブによって、造られたものではなかった。それは労働者階級が自から発見した「プロレタリア大衆の運動方法であり、革命におけるプロレタリアートの闘争の現象形態である。」(マツセンストライキ)大衆ストライキとゼネストの未曾有の発展が生んだ彼らの革命の闘争機関、蜂起の機関としての自己権力の萌芽であったのである。

プロレタリアートの自然発生性のうちに何らの革命的意義を認めず、それへの蔑視で武装され、党の意識的指導からはみだたプロレタリアートの行動を極度に警戒するボルシェヴィキは、最初レーニンも含めて「ソヴェトを疑いの目をもって党に対するライバルとみなし」それに断呼として反対したのである。そして「やっと十一月の第一週(新暦第三週)になって、レーニンはストックホルムから同志達にもっと協力の精神をもってソヴェトに接近するよう勧告したのであった。」(ドイッチャー、武装せる予言者)

一九〇五年ソヴェトに対してレーニンと彼の一党が犯したこの過失は、単なるエピソードとして扱われほとんど問題にされていない。だが、後に訂正したとはいえ革命において出現したプロレタリアートの自己権力を敵対物としてそれに対した事実こそ、革命後の党の変質過程をまつまでもなく、レーニン組織論の党が階級に代位する傾向が実現しかかった最も近い歴史の実証でなくてはならないであろうか、一九〇五年の革命は、レーニンの「何を為すべきか」の破産を示したのである。

さて、大衆の自然発生性を一切拒否するレーニンは、他方では、現実的な革命家として、巨大な歴史的要動期におけるプロレタリアートの革命的動向を敏感に反映する能力を持っていた。彼は通信の届かぬ外国にあって新聞電報を唯一の材料にしてソヴェトの分析を行い「遠方からの手紙」を送ったのであるが、一九一七年はいざ知らず、一九〇五年においてはそれはあまりにも遅すぎたのであった。革命は時を越してしまつた。ボルシェヴィキは自己権力の最初の試み、一九〇五年のソヴェトには、何の役割も果たせなかつたので

このようなソヴェトの意義を最も明確に認識したのはトロツキーであった。彼は「ストライキは数十万の労働者を工場から投げ出し、彼らを公然たる政治生活に目ざめさせた。これらの大衆の指導に着手し、彼らの陣営に規律をもたらした者は誰ぞや。警察か、多分？或は憲兵か、或は保安部か……労働者代表評議会の外、何ものでもないのである。かかる条件のもとで、代表者会議は革命の大衆の自治機関、国家権力の機関に外ならない。」(三人の革命家から重引)と一月の裁判で語っている。トロツキーが一九〇五年にペトログラードソヴェト議長として活躍したのは、ただ、彼が革命のすぐれた大衆の煽動家、組織者であったばかりでなく、すでにレーニンとの論争(我々の政治的任務)において示しているがごとく、革命の全人民の性格に関する深い洞察をなした革命家であったからでもあるのである。一九〇五年の革命においてゼネストからソヴェトが出現し蜂起に発展していった歴史の経過は、自己の政治的見通し(永続革命論)と結びついた時のトロツキーの組織論におけるレーニン批判の正しさを示したといつていいだろう。

メンシェヴィキはその最初のイニシヤによって、当然ソヴェト内における多数派を占めたが、彼らは、ブルジョア革命への参加という立場からしてそれを明確な権力機関としては把握できなかった。彼らは大衆の革命的高揚に決定されて行動したに過ぎないのである。後にメンシェヴィキは、一九〇五年の革命を行過ぎとして改悟し、ソヴェト政策を批判(トロツキー我が生涯)しはじめ、プレハノフにいたつては「武器をとるべきではなかった」と主張することによって革命家として滅びたのである。

ある。後になって発表されたその手紙の中でレーニンは次のように語っている『「ノーヴァヤ、ジーズニ」紙上、同志ラディンのこの問題のたて方は誤っている。労働者代表評議会か。または党か。その解決は、私にはこうあるべきだと思われ。労働者代表評議会と党の双方。……ソヴェトに向つて社会民主党綱領の採用及び入党を要求するがごときは(ちやうどボルシェヴィキがやったように)、私にはもつともだと思われぬ。……ソヴェトと党は、ひとしく不可欠なのである。或は私が過っているかも知れぬが、私には(私の有する不完全な、専ら『新聞』の材料によれば)ソヴェトを革命的仮政府の萌芽として、政治的に考えなければならぬように思われる。ソヴェトは能う限り速かに、全ロシア革命的政府として自から宣言するか、或は(別の同じものに帰する訳だが)革命的政府を設立しなければならぬと、私には思われる。』(労働者評議会と我々の任務)

ソヴェトも、党も。レーニンが立てたこの定式、あまりにも当然すぎるこの定式も、それに到達するには、幾百万大衆の革命的闘争の経験の集積を必要としたのである。プロレタリア大衆による多くの犠牲をはらった革命的創意の結晶である労働者評議会の圧力によって、レーニンは始めて党がすべてを決定するという立場をすて、ソヴェトも、党も、と問題を提起することができたのである。その上、この両者の内的関連における主語がソヴェトの側にあることは明らかであろう。

そしていかなる党が必要なのか、それは、ソヴェトに敵対し、これと競争しようとした一九〇五年のボルシェヴィキ党では決してな

いことだけは確かである。とにかく、ソヴェトも、党も。この前者の内の連関の解明のうちに現代革命の将来を決するすべての鍵が存したのである。一九〇五年の革命は、このように問題を提起したのであるが、その未成熟による敗北に決定されて、問題を提起したにとどまったのである。この問題を解明するには一九一七年の革命をまたなければならなかった。

四

「わが国では、一九〇五年の場合も、一九一七年の場合も、労働者代表ソヴェトは、闘争の特定の段階における自然な組織形態として運動自体のなから生長した。」(十月革命の教訓)とトロツキーが語るように、ロシアプロレタリアートは、一九一七年二月革命において自から再びソヴェトに組織したのであるが、このソヴェトを生んだ二月蜂起もまた「自然発生的」な闘いであった。

二月革命の出発点になった二月二十二日の国際婦人デーのペテルグラード婦人労働者のストライキは、最も戦闘的なボルシェヴィキ団体——全部労働者からなるヴィボルグ地区委員会の反対を押し切って行われ、それはまたたく間に波及して、その日一日で約九万の男女労働者がストライキ、デモ、集会に参加した。戦争と専制政治に痛めつけられていた民衆の圧政に対する憤怒が爆発し、彼らの平和とパンを要求するスローガンの後にはすぐに「独裁政治反対」のスローガンが続いたのである。この運動は翌日になっても衰えず、ヴィボルグ地区を中心に、日、一日とその規模と深さを増し、ペテ

らは一九〇五年の革命において、レーニンとその党を乗り越えて固有の武器ゼネストから自己権力の独自の形態ソヴェトを創造した革命の大衆であった。彼らは、革命の敗北を通じて、その政治的経験を蓄積し、反省吟味して、一切の日和見主義を拒否し、歴史的状况と革命の展望を判断するについて本能的な基準をもっていた。彼らは、レーニンの革命的敗北主義を全面的に支持したのである。しかしそれは、レーニンが、彼らの帝国主義戦争に対する本能的な革命的意識を政治的に明瞭に定式化したからであって、その逆、すなわち、レーニンの党によってそのような意識を教えこまれたからではないのである。

一九一七年の二月革命は、まさに自からを解放するような意識的な労働者大衆自身の事業であった、のである。彼らは軍服を着た農民である軍隊を獲得し、帝政を打倒した。そして、一九〇五年の経験から半自分で自己をたちどころにソヴェトに組織した。叛乱に参加したすべての労働者、守備隊は、労働者および兵士代表の一般ソヴェトに統一された。ソヴェトは、大衆の圧迫によって、その機能と役割を増大し、革命の中心のものとなったのである。

だが、問題はこの地点から生ずる。すなわちプロレタリア大衆が帝政から奪取した権力は、むざむざと自由主義的ブルジョアジーの手に落ちてしまったのである。労働者階級は、社会的矛盾の出口が革命以外になくなるや、その政治的経験の蓄積に応じて、権力と闘争し、これを打倒し、自己権力を形成することはできる。しかし、彼らは、この自己権力の闘争に明確な政治的決着をつける——自己権力を唯一の直接的政治権力として確立するためには、自己の階級

ルグラードをストライキとデモの渦にまきこんで行った。

このようにして「二月革命はそれ自身の革命的諸団体の抵抗を排除しつつ、下から開始された」(トロツキー、ロシア革命史)のであるが、それは無数の革命の大衆の瞬間に消え去る創造的イニシヤチーブの蓄積のうちに、戦争に疲れ、厭戦的になった守備隊をまきこんで、大衆の叛乱へと発展していった。この過程にあって党はいかなる役割を果たしたのであるか！

トロツキーのロシア革命史によれば、「合法的および半合法的『社会主義的』首脳部のすべては、警告を発し、運動に反対した。しかしながら、シリヤニコフ、ザルツキー、モロトフなどの中心的ボルシェヴィキ首脳部すら、驚ろくべき無能ふりとイニシアチヴの欠如を暴露した。」そして革命的労働者は「党中央部からは、全然なんらの指導的イニシアチブも感じられなかった……。ペドログラード委員会は逮捕され、中央委員会代表、同志シリヤニコフは明日に対するいかなる指示もあたえることはできなかった。」と断言している。

だがそれにもかかわらず、トロツキーは、二月革命の自然発生的性格に反対している。彼は、このような把握は非常に誤っており、でなければ無意味であるとする。そして、二月革命を指導したのは、大部分は、レーニンの党によって教育された、意識的な、鍛錬された労働者であるとこたえるのである。

革命を指導したのが意識的な労働者であることは間違いない。しかし、それは果して「レーニンの党によって教育された」からであろうか、ペテルグラードの労働者は偉大な革命を経験していた。彼

的利害を最高に政治的現実において代表する政治的武器を必要とするのである。

二月革命の現場において、このような政治的武器であるべき党、ボルシェヴィキ党は不在であるか、あるいはまったくの無能ぶりを発揮しただけであった。革命によって蘇ったブルジョア的、小ブルの政治潮流が労働者階級のこのような政治的素朴を利用して、ソヴェト執行委員会を占拠し、権力をブルジョアジーに捧げたのである。

かくして、二月革命は臨時政府とソヴェトの二重権力の状況に膠着した。革命はブルジョア民主革命として自己を完成するか、あるいは、プロレタリア革命への直接の序曲に転化し、プロレタリア独裁を実現するかの岐路に立ったのである。

革命を誰がいかなる方向に指導するのか、ここに革命とソヴェトをプロレタリア革命に主導する政治指導部の問題が鋭に提起されたのである。いわば、一九〇五年の革命では、意識的な大衆の創意が党に対してソヴェトも、と要求したのに対して、一九一七年二月には革命の大衆の階級意識の総体がソヴェトに加えて党も、と要求したのであった。

しかも「臨時政府の打倒」というスローガンをかけた四月デモ——労働者兵士大衆の自然発生的な武装デモの出現は、ペドログラードプロレタリアートの最も革命的な部分の政治的意識が、古参ボルシェヴィキを含めて一切の政治指導部をのりこえたことを示している。彼らは、この自からの政治意識を権力獲得の明確な洞察をもって日々の生きた具体的な方針の中に定式化する政治指導部を要求したのである。

「権力獲得の問題は、政党がソヴェトと——もしくは多少ともソヴェトとおなじような他の大衆団体と——決定的に結合することによってのみ解決される。革命政党がその先頭にたつとき、ソヴェトは意識的に、そして時機を失せずに権力獲得にむかって努力する。」(トロツキーロシア革命史)

だがこの革命的政党はすでに明らかのように、革命的情勢におけるブルジョアジーとプロレタリアートその他の諸階級の力関係の変動にあつて、それと交錯するプロレタリアートの闘争の中から生れた最高の階級意識を明瞭に政治的に方向づける生きた具体的な形態でしか存在しえないのである。一九一七年三、四月にあつて党のこの生きた具体的な形態を保証する大衆の階級意識を定式化する政治方針こそレーニンの「祖国防衛主義への一切の支持反対、臨時政府を打倒せよ、すべての権力をソヴェトへ！」であつたのである。

そして、一九一七年の二月革命から十月蜂起——権力奪取にいたる過程は「政党がソヴェトと決定的に結合」せんとして運動した全過程に他ならなかつた。そうであるならば、二月革命によって生じた党の進路の深刻な転換点において、準防衛主義の立場から臨時政府を条件づきで支持することによって自からの階級の歴史的課題に応え得ず他の階級の間接的な道具となつてしまつたカーメネフ、スターリンらの古参ボルシェヴィキに対するレーニン、トロツキーの熾烈な分派闘争こそ、ソヴェトと結びつかんとする党の生きた具体的な形態であると同時に、そのような運動の内容そのものであつたといわなければならないであろう。

ここにいつてだが、労働者階級に先行して、あらかじめ最高の階

級意識を先取したことをもつて、唯一の前衛として現代革命に絶対権力を要求し、その一回的に完成した(死んだ)階級意識の固定的把握を外から注入することによつて、革命が実現すると妄想している前衛志願者たちが、現代の古参ボルシェヴィキに転落することは間違いないことを指摘しておこう。彼らが来るべき激動期において、一九一七年四月のカーメネフ、スターリン以上のピエロの役割を果すことは充分考えられることである。いや、我々はすでに、これら党物神崇拜者が安保闘争において、その政治的主義的傾向を恐れて運動の随伴者になりさがり、政治法闘争において、再び、立ち遅れたことを知っているのである。

その意義を洞察し、それがもたらす階級間の力関係の変動を評価し、必要な教訓を政治的方針として提起して、全大衆に返したが故に勝利したのであつた。が、それこそ党の御からするソヴェトへの結合の運動に他ならないことはすでに明らかである。

コルニロフの反乱を粉砕した後、情勢は急速に進んだ。蜂起の機が熟したのである。レーニンとトロツキーは、反乱を激した。だがこの反乱の機は党内に大きな抵抗を呼び起し、蜂起の前夜にレーニンとトロツキーは孤立したのである。党上層部の動搖を反映して中央委員会は再びレーニンに反対した。レーニンは党下級組織やソヴェトの大衆に直接依拠し、日和見主義的妥協主義者に圧力をかけ、彼らと闘つた。そして十月十日の中央委員会は10対2をもつて反乱を支持したのである。

だが、反乱はボルシェヴィキ党によつて組織されたものではなかつた。党は反乱へのイニシアチブをとるやいなや、十月蜂起の全過

程のうちに忽然と姿を消してしまつたのである。党組織が弱く分散していたからではない。またレーニンも地下から党が反乱を組織することを要求して、具体的な方針を書き送つていたのだが、誰も顧みるものはいなく、握りつぶされてしまつたのである。

「戦術の転換が一般に党内に摩擦を引き起すとするなら、戦略転換から生ずる摩擦はいかに深刻で恐るべきものであらう！ すべて

一九一七年の革命においては、党の危機は、闘争の初端である四月評議会の時と十月蜂起の最後の段階において最も尖鋭に生じた。この二つの危機を克服したレーニンの革命的な思想と活動を賞讃するのは誤りではないが、レーニンのこの活動の背後には、二月に独自の力で帝政を打倒し、ソヴェトを組織し、四月には「臨時政府打

倒」のデモを行い、七月にはすべての権力をソヴェトに要求して武装デモを行い整然と退却し、あらゆる地方にソヴェトのオルガナイザーとプロバガンジストを送り(アナキズム十八号所載クロンスタット(1)ヴォーリンを参照、一般に七月事件は、大衆の盲目性とボルシェヴィキ戦術の優位性の例証とされているが、これを読むとまったく違った見方もあることが判る)、十月には軍事革命委員会のもとに結集してケレンスキーの移動命令を拒否することによつて事実上の大衆の蜂起を行つていたペテルグラードの革命的労働者兵士の全階級の行動があることを知らなければならない。

レーニンは、これらの革命的労働者兵士の階級の行動に依拠し、その意義を洞察し、それがもたらす階級間の力関係の変動を評価し、必要な教訓を政治的方針として提起して、全大衆に返したが故に勝利したのであつた。が、それこそ党の御からするソヴェトへの結合の運動に他ならないことはすでに明らかである。

ここに蜂起におけるソヴェトと党の役割の関連を示唆する一つのエピソードがある。それは十月十六日の中央委員会の会議で決定された党の蜂起を指導する軍事革命の中核組織が、ソヴェトの軍事革命委員会の一機構としてそれに統合されたという事実である。

ソヴェトも、党も、という問題の端初において主語はソヴェトにあつたが、権力を奪取する蜂起の瞬間においてもソヴェトと党の結合様式の主語はソヴェトであつたのである。ソヴェトが蜂起の機関として叛乱を指導し、臨時政府を打倒して、すべての権力を掌中におさめ、プロレタリアートの直接的な政治権力として自己を実現しつゝあつた過程にあつて、党は、労働者階級の権力奪取のための政治的武器としての自己の任務を果し、プロレタリアートの自己権力に統

合され、吸収される傾向を示したのである。

権力を奪取し勝利したプロレタリアートは、コンミュニョンの四原則を体現した自己権力としてのソヴェトに直接に組織され、無限の民主主義を保証されならぬの媒介なしに政治的支配階級として行動しなければならぬ。政治権力を奪取する手段としての旧い党の役割は終わったのである。だが、手段として用いられたにせよ権力奪取のためにある党は、決してそれ自身で役割が終わったからといって自然に消滅しはしない。党は意識的に廃止されなければならぬからである。

まさに若きトロツキーの「新しい制度の任務は極めて複雑なものとなるであろう。したがって、それらの任務は、経済的建設のさまざまな方法の間の競争を経由することによって、長い論争の道により、そして社会主義世界と資本主義世界との間ばかりではなく、プロレタリアートの独裁が幾千幾百の新たな問題を提起するやいなや、社会主義それ自身の内部に不可避的に生ずる多くの諸傾向の間の組織的な闘争の経路によって解決されざるをえないのである。いかなる強力な「専横的な」組織も……このような諸傾向と論争を抑圧することはできないであろう。……社会に対し独裁を行使しうるプロレタリアートは、自己自身に対するいかなる独裁も容認しないであろう。……労働者階級が自己の隊列に、極く少数の病人、投げ捨てなければ難破してしまう脚荷を有していることは疑いない。独裁の時期に現在と同様に労働者階級は、その見解から誤った理論を一掃し、その隊列を政治的な空言家や過去の追憶に生きた革命家から守らなければならないであろう……。しかし、この複雑

な任務は、プロレタリアートの上に位する少数の選良たちによって解決されることは決してないであろう。ましてや、粛清し罷免する権力を授けられた一個人によっては。」(ドイツチャー武装する予言者より重引)という立場こそ貫徹されなければならぬ。

だが、十月革命の現実はそのようには展開しなかった。遅れた封建的遺制に対する農民の革命と資本主義に反対する労働者の革命が複雑に組合わり、帝国主義列強に包囲された後進国革命の困難な諸条件において、蜂起の際にソヴェトに統合する傾向をみせた党は、逆に強化され、プロレタリア独裁におけるその役割を強調され、プロレタリアートの権力は党の権力へと転化し、革命の篡奪者となったのである。この革命後のプロレタリア独裁期における党の問題は、理論的にも歴史的にも、ほとんど分析されていないが、現代革命にとってこの問題の解明は、重要な意義をもっているのである。だが、まずその前に、革命における階級とソヴェト、党の諸関連の総括が行わねばならないであろう。

五

現代革命の組織論についていろいろと述べてきたが、最後に私自身の問題意識と現在までに到達した結論を整理して、組織論を構築する際のいくつかの観点を明らかにし、また、黒田組織論に対する私の批判の基本的な問題を提起しておきたいと思う。

(一) 現代革命の組織論を本質論として展開しようとするなら、労働者階級の自己解放の理論としての階級への形成とその自己止揚の

論——自己権力論を追求することが行わなければならない。党組織論はその一構成部分にすぎない。

(二) 労働者階級の解放は労働者階級自身の事業であるという立場、すなわちプロレタリアートは疎外された労働において人間の本質の喪失のものに他ならないが故に、最も革命的な階級であり、この階級から「一つの根本的な革命の必然性についての意識、共產主義的意識がでてくる」という立場に立って、革命を、労働者階級自身の階級への形成過程として把握しなければならない。革命は幾百万大衆の行為としてそこにおける大量の意識の変革過程として考察されなければならないのだ。したがって、労働者階級は、革命の経験において、自からの階級意識を高め、自からの行為として自己権力へ到達することができる。このことは、すでにみたように、パリ・コンミュニョン、ロシア革命、ハンガリヤ革命において実証されている。

(三) しかし、労働者階級の解放のためには、資本がその経済的支配の道具として政治的特権を利用している以上、まずもって「政治権力の獲得が主要義務」になるのである。自己権力は、労働者階級の直接的な政治権力に高まらなければならないのである。そのためにはプロレタリアートは、政治権力を奪取する武器・政治政党に自らを組織しなければならない。

(四) この政治政党はプロレタリアートの政治権力を奪取するための最高の政治指導部として、階級の掌中にある手段であり、階級の一部である。党は、総体としての労働者階級の闘争と革命によって到達した最高の階級意識の体現者であるばかりではなく、それに

明確な権力奪取にみちびく政治的定式を与えるという意味において、最高の政治的傾向を代表する。党は革命における大衆の経験に学び、政治的に普遍化することによってそれを為す。

(四) かかるものとしての党の組織の存在形式は、与えられた歴史的社会的条件において労働者階級が行う独自の階級形成に対する政治的にかわりあいの有効度によって規制される。ということとは、かくあるべしというならぬかの組織原則などはないということである。ある時は大衆的政治政党であり、また反パルタイ連合であり、意識的大衆の自立組織であり、……要するに、階級間の力関係と革命の経験に規定された階級意識の水準の交錯から出発する独自の階級形成に対する政治的な有効性が問題なのである。「生きた具体的な形態でしか存在しえない。」(第四章)ゆえんである。党はその政治的機能において評価されなければならない。

(五) したがって、現代革命において、我々が、組織論を展開する場合絶対に考慮しなければならないことは、官僚制が分裂しつつも統合せんとしている現代独占支配構造においては、いかなる組織も官僚制を内包するかぎり、独占支配構造にその軸を腐蝕されるか、あるいは支配官僚制に統合せんとする運動(革命の篡奪)に転化してしまうということである。党物神崇拜打破と古典的「前衛党」概念の徹底的な解体が、現在、特殊に意義をもつのはこの理由からである。我々は、本質において官僚制を拒否し、労働者階級の抑圧された階級意識と革命的エネルギーを解放しうる組織を、意識性が自然発生性の解放として作用しうる形態を探究しつづけなければならない。また、今日、大衆は自然発生的には革命、あるいは、政治権力

との激突を経験することが極めて困難な状況にあることからして、安保闘争において、大衆運動分野でブンドが果し、完遂しえなかつた役割の組織論的研究は重要な意義をもっているものといえる。

(四) 最後に、党は、労働者階級の権力奪取のための道具、手段であるから、革命が勝利した暁にはその役割を終える。党は無用の長物として消滅するのである。けれども党は自然には消滅しない。コンミュニョンの四原則を體現したすでに死滅しつつある過渡期国家としての自己権力と異なり、権力奪取手段の政治組織としての党には自己止揚の内的論理などは存在しない。党は意識的に廃止しなければならぬのである。そうしないかぎり党は生き続け、権力に参与することによって、死滅する傾向をもつ自己権力にとつてかわる閉鎖的な権力集団に転化するであろう。革命家は常に党に対する逆の精神を秘めて闘争に参加しなければならぬ。蜂起と権力奪取の頂点において、この逆精神は、その偉大な役割を顕現し革命を真に革命として成就するであろう。

黒田組織論序説について。すでに指摘したように、黒田組織論序説は、組織本質論を前衛党組織論として展開しようとする問題のたてかたそのものにおいて誤っている。これが第一の問題点。

次に、そこから、一方では党の革命の「手段としての意義」を強調する立場と、他方、党を革命的共産主義者の「共同体」すなわち実現さるべき将来社会の萌芽形態であり、共産主義的人間にとつては「永遠の今」としての意義をもつ」という自足的なものとみなす立場との不可避的な分裂が生じている。

勿論、黒田にあっては、この分裂は意識されていない。彼は党の過渡性を信じ、自己目的化に反対している。けれども、根底において党が、共産主義者の「共同体」「将来社会の萌芽」として「永遠の今」として把握されるなら、党はその存在において、自足的なものにならざるをえないのである。

少し考えても判ることだが、指導と被指導、上部と下部があり、中央集権に対して民主主義が存在しなければならぬ組織はいかなる意味でも「共同体」などではない。そもそも現代社会にあっては疎外をまぬがれたいかなる「共同体」も存在しうる物質的基盤は存在しないのである。党は、権力奪取のための政治組織以外の何ものでもないであり、現代の政治そのものがもつ疎外諸形態において成立しているのである。マルクスは、ドイツイデオロギーで共産主義者とは、現存社会では特定の革命政党的所屬者をあらわす語であるとして、共産主義者という語を単なるカテゴリーに転化しようと信じているフォイエルバッハを批判しているが、党を共産主義者の「共同体」として把握することによって黒田は、共産主義者を抽象的なカテゴリーに転化してしまっているのである。このことは、党に「未来社会の萌芽」をみようとする立場に、最もよく表われている。党は「各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件となる」ような将来の共同社会の萌芽形態では絶対でない。疎外を自覚し、この疎外を克服しようとする人間の集団が直に疎外からまぬがれうると思われるのは愚劣である。このことは「偉大な黒田哲学」の源泉の一つである梅本克己も明確に指摘していることである。「疎外から脱出しようとするものは、それだけですでに一切の「人間疎外」か

ら解放されているものでもない。「疎外」からの脱出過程そのものが、やはり「疎外」の状況からの不可避の制約と影響をうけ、そこにさまざまなゆがみと人間疎外の現象を生みだしているのである。」(中央公論十一月号所載、社会科学とヒューマニズム)

そして党が「将来社会の萌芽形態」であるなら、根本的な革命の必要性もなくなる。人類が共産主義社会を実現するためには、唯、共産主義の「共同体」としての「将来社会の萌芽形態である」党が全社会に自己を拡大し、社会を自己と同質化すれば、ことたりるということにもなりかねないのだ。だが、恐るべきことだ。指導と被指導、中央委員会と細胞、集中制と民主主義が存在する未来の「共同社会」とは。

黒田組織論の第三の難点は、党の自己止揚の論理を何の証明もなくしてオプチミスティックに信じている点である。彼は「プロレタリア革命におけるこの自己止揚の論理」は同時にまた「前衛党組織そのものの形態と運動の論理でもなければならぬ」とする。しかし「支配階級として組織された」プロレタリアートは、そのコンミュニョンの四原則のうち、過渡期国家としてのその自己止揚の論理の根拠を有している。だが、このことを直ちに党にまで拡大することは、許されない。政治組織としての党には、自己自身を不断に強化し、権力に同化せんとする逆の論理が存在しているのだ。

もちろん、「政治支配と国家そのものの死滅にみちびく一切の前提的条件を創造する」ならば、党は消滅する。しかし、その「一切の前提的諸条件」の中には、党の廃止が絶対的な条件として入っているのだ。「政治支配と国家そのものの死滅にみちびく一切の前提

的諸条件」を創造するのは支配階級として組織された労働者階級の総体としての行為、すなわち、自己権力そのものによって実現するのだ。党は権力を掌握した自己権力によって意識的に廃止されねばならない。革命はすべてを革新しなければ革命ではない。

黒田組織論において、組織論を人間論として確立し、レーニンの政治技術的欠陥を克服しようとした意図は判らないこともない。だが、組織本質論を前衛組織論として展開せんとしたことによって、問題は逆転した。党は、ふたたび自足的な、それ故に共産主義者にとつて絶対的な存在に転化し、「党こそはすべてである」という党物神崇拜のうちに、革命家の人間主体喪失の過程が進行しているのだ。

「前進」紙がヒステリックな呼びをあげている最近の特定個人に対するくだらない中傷はこのことをよく示している。彼らにとつては、彼らだけに許される崇高の精神においてすべてを断罪する特権を享受しているのだが、その享受のうちに、恐るべき人間主体の喪失と、腐敗が進行していることに気がつかないのである。反スターリン主義の名によるスターリン主義の復活、党物神崇拜に、私たちは、最後まで反対するであろう。

ブルジョア経済学に転落した黒田ソ連論

— 続・支離滅裂なソ連論 —

対馬 忠行

はし が き

私はかつて雑誌『真相』に『支離滅裂なソ連論（昭和三年五月号）』という小文を発表したことがある。これは黒田寛一君を総師とする革共同全国委員会系の諸君のソ連論を批評したものであった。これらの諸君は、従来これらの諸君が信奉していたトロツキーのソ連論（墮落はしたが、なお労働者国家である）を放棄したわけだが、といってイギリスのクリフや、私、あるいはラーヤ・ドウナエフスカヤ女史（トロツキーの元秘書、「マ」等の主張するソ連官僚的国家資本主義説には賛成せず、独自のソ連観、——社会主義（過渡期を含む）でもなく資本主義でもない）全く新たな範疇としての社会体制論（略して第三範疇説という）を主張したわけで、私の小文はそれを批判したものであった。ところが私の批判に対してこれらの諸君からは何等の返答がなかったが、ただ、この派の総師黒田君からは口頭で、自

分は第三範疇説には賛成せず、あれはナンセンスである、ということとをきいた。ではこの一派はどんなソ連論を主張するのか、私の待望していたところであったが、最近になって、漸く黒田君自身からその解答をえた。早大新聞（九月一八日号及び一〇月二日号）に大々的に連載された同君の『現代ソ連論の根本問題』がこれである。大得意のものらしいが、一読するに彼は第三範疇説をナンセンスであるといったにもかかわらず、黒田説もやはり第三範疇説を出でないものであった。ただ従来の第三範疇説との決定的相異は、従来のそれはスターリニスト・ロシヤにおける価値法則の全面的支配を認めたにかかわらず黒田説はその全面的支配を拒否したところにある。この点で、黒田説は、マックス・シャハトマンのソ連論（官僚的集産主義説）に非常に近くなっている。

ついで一言するに、彼はトロツキーのソ連論はもとより官僚的国家資本主義説をも拒否する。そして官僚的集産主義という新社会範疇を主張するわけであるが、彼はいう。

『スターリン主義は、ロシヤにおいても、あるいはそれが権力をにぎっている何処においても、残忍な全体主義——搾取の新しい形態である。』だが、その『搾取』は資本主義的なものではない。なぜか？ 第一、生産手段の国有は、価値法則——商品生産を一掃する。第二、『スターリン主義の下においては、労働力は確かに商品ではない』というのは、マルクスはいつている——『貨幣の資本への転化のために、かくて、貨幣所有者は、自由なる労働者を商品市場に見出さなければならぬ。二重の意味で自由である。すなわち、彼は自由な人格として、自分の労働力を商品として処置しようということ、彼は他方において、売るべき他の商品をもっていないということ、すなわち、彼の労働力の現実化のために必要なる一切の物財から、放免され、自由であるということである』（『資本論』岩波版）しかるに、『スターリン・ロシヤにおいては、そのような自由なる労働者は存在せず、そこでは労働力は商品ではない』からである。

では、どんな新社会体制かといえば、それは、かの『ポメラニヤ的な封建的社会主義者』ロードベルトウスのユートピアを想起せしめるようなものである。（ロードベルトウスのユートピアについては『哲学の貧困』へのエンゲルスの序文を見よ。）それは近代的な奴隷制度のようなものだ。彼は『スターリン主義的共産主義——その構造は神権政治的、封建的社会のあるものに極めてよく似ている』とか、『……自己の労働力が国家すなわち官僚的所有する動産であ

る近代的奴隷である。そして農民は国家農奴、すなわち農業において工業部門の近代的奴隷に相当するものである』とかいつている。（シャハトマンのソ連論は、いろいろなものがあるが、もっともまとまっているのは、例のスターリン論文を批判した、「ニュー・インターナショナル」誌一九五二年一一・二二月合併号所載の『Stalin on Socialism, Decoding Stalin's Message to the Russian Stalinist Congress』である。）

黒田君のソ連論は、もちろんシャハトマンと完全に同じではなからう。しかし、そこにおける価値法則の全面的支配を否定する第三範疇説という意味では、甚だ相似したものといえる。

では、もっと具体的にみよう。

マルクスも驚倒する珍妙な価値学説

黒田君は、かつては—すくなくとも一九五八年一〇月頃の私信によれば—『政治制度は官僚主義化、経済制度は国家資本主義が支配的。——全社会的にはチゲハグ』といった『経済的ウクラードが国家資本主義的であること』は認めていた。ただ、『ソ連国家が資本の人格化であるというようには現在では断定しかね』、そしてこれは『ソ連国家』官僚国家とは解していないこととつながって「います」という意見であった。（拙著『ソ連』三〇頁参照）

いわばこの正反対にひっくりかえったのが最近の意見らしい。すなわち、彼はもはや『ソ連国家』官僚国家（非労働者国家）たることは否定しない。その代り今度は経済制度は『国家資本主義が支

配的』というのは固く拒否するわけだ。

どうしてか？ シャハトマンと同じように、ソ連には価値法則が全面的に支配しておらぬからである。従って、反対にそれが支配しておれば、官僚的國家資本主義説を認めるようである。すなわち、彼はソ連經濟の諸矛盾を『……価値法則の全面的な導入や平均利潤率の法則の利用によって解決しようとするならば、その場合、集團としてのスターリニスト官僚は資本の完全な人格として機能し、ソ連邦の計画經濟は國家資本主義のそれに完全に變質してしまふであろう。』といっているのである。私見によれば、この点の認識は、今度の黒田論文の唯一の進歩点であるが、そうすると、同派の書記長格といわれている武井健人君などは、さっそく、官僚的國家資本主義説に改宗しなければならなくなる。なぜなら同君は『前進』(昭和三年二月二五号)において、『いわゆる帝國主義圏と「ソ連圏」との本質的同一性(価値法則の実現)』を確認しているからである。(私は武井君が黒田君の言をきいて改宗せんことを切に祈る。)

さて、前記引用のなかで黒田君は、単に、価値法則の導入といわず、『全面的な導入』といっている。これには意味がある。というのは、部分的な導入は彼も認めているからである。すなわち、分配面であつて、彼はいう。

『資本制的搾取のもつとも苛酷な形態としての出来高払賃金制に似た形態が支配的であり、集團としての官僚は他人の労働生産物の収奪をおこなっている。しかしながら、分配面において労働力の価値を前提とした「労働の量・質」分配がおこなわれていたとしても、

章第一節に至つてこの一句をもつと具体的に説明している。

『自由な労働者というのは、奴隷、農奴等のように彼ら自身が直接に生産手段の一部であるのでもなく、自営農民等におけるように生産手段が彼らに属するのでもないという二重の意味においてであつて、彼らはむしろ生産手段から自由であり、離れ、解かれていのである。』(『資本論』岩波版 第四分冊二六八頁)

すなわち、第一の自由とは、奴隷制あるいは農奴制的な人身隷屬關係(それらにおいては『もの』として『生産手段の一部』化している)から解放され、自己を労働力商品として処置しうる自由を意味する。(『自由なる人格』とは奴隷制的・農奴制の人身隷屬關係に對比しての言葉である。)第二の自由とは生産手段からの分離である。

第二の点については、ソ連労働者國家説を否定する我々の間では問題あるまいと思うので、第一の点について一言するに、いくらソ連労働者が抑圧された搾取されているにしても、奴隷または農奴制下の人身隷屬關係にあるとは考えられない。農奴制はツァーの帝政下で崩壊しはじめ、一〇月革命で掃蕩されたが、いくら十月革命後のテルミドールでも、歴史を資本主義以前までは逆転させていない。(もしそうなら『第二の補足的革命』といつてもそれは殆んど絶望的であろう。)もちろん、ソ連労働者は、その労働力の販売上普通以上に強力な官僚的統制をうけてはいる。だが、その統制はその売買そのものを解消するものではなく、むしろその上に成り立っている統制である。

ソ連邦における労働者は「自由」なる賃金労働者ではなく、労働力は商品として売買されるわけではない。』

労働力の価値を前提とした分配が行われておつても労働力は商品に非ず！ 何んのことか解る人は手をあげなさい！ だが、すくなくとも、マルクス主義者は手をあげるわけにはいかない。なぜなら、マルクス經濟學にあつては価値と商品は分離しえないものだからである。エンゲルスは『經濟學でしられている唯一の価値は、商品の価値である』といっている。(『反デュー』) もちろんマルクスも同じ。

元來、商品とは、自己消費ではなくして、社会的消費のために、そして交換、販売のためにつくられた財貨であるが、この關係が実に価値を生むものであるからである。しかるに黒田君は、商品と価値を分離し、右文章によれば、あたかも『商品の価値』(及び使用価値)以外に価値があるかのような驚くべき話だが、この『革命的共產主義』の哲學者は、価値とは商品世界特有の範疇であるというマルクス經濟學のABCをすら忘れてしまった！ (黒田君に教えるが、もし労働力は商品に非ずというなら、労働力価値による分配などは否定さるべきである。)

次に『自由なる賃金労働者ではなく』という申し条についてだが、語の完全なる意味で自由な賃金労働者などはない。恐らくこれは先きに述べた『自由なる労働者は存在せず』というシャハトマン説——黒田君はこのシャハトマン説を私からきいて知つたと思つが——の借用であらう。

シャハトマンはこの論拠を先きに引用した『資本論』第一卷(第二章第三)中の一句にとつた。しかしながら、マルクスは第七篇第二四

価値と價格の分離——ブルジョアの生産費説への移行

スターリニスト・ロシヤには、ルーブル(昭和三年一月一日以來、ルーブルの純金含有量は〇・九八七四二グラム、ルーブルの換算率は一米ドル〇九〇カペイクとなつてい)という貨幣があり、ものには價格があり、労働者賃金をとれば、月平均一〇〇ルーブル——八〇ルーブル位といわれている。

黒田説によれば、ソ連には価値法則(分配關係における『商品の価値』でない価値という奴は別として)は、支配していない。ではどうして、そこにおける貨幣や價格現象を説明するのか？ 彼はいう。

『經濟計算の手段としての「價格」(それはルーブリを単位とする)は、ブルジョア社會におけるように市場の晴雨計的變動を通じて自動的に決定される市場價格、あるいは交換を媒介として決定される価値の貨幣的表現ではなく、また生産物の生産に支出された社会的必要労働時間を直接あらわすものとされてもいない。それはスターリニスト官僚政府によって行政的に決定される公定價格である。』

このあとに後述の文章がつづくのだが、まずここで切つて一言する。というのは、たったこれだけの文句のうち、(先述の珍妙な価値學説に加えて)黒田君が、いかにマルクス經濟學に無知なるかをバクロしているからである。

右引用によれば、ソ連の『公定價格』は別にして、三つの『價格』

があることになる。第一、『……自動的に決定される市場価格』、第二、『……価値の貨幣的表現』としての価格、第三、『……社会的必要労働時間を直接あらわすもの』としてのそれである。これで見ると、第一と第二は対比させられ、第一の『……自動的に決定される市場価格』は価値法則から分離され、それに全く関係なきのとくである。ブルジョア学者はマルクスの価値論と生産価格論（費用価格プラス平均利潤）は矛盾していると大いにさわざたものだが、この生産価格についてもマルクスは、『価値法則は価格の運動を支配する。すなわち、生産に必要な労働時間の増減が生産価格を上下させるということを通じて支配する』といっているのだ。

（『資本論』岩波版）黒田君の第二の場合がもし、価値通りの価格を意味するならば、そのように表現されなければならないのだ。だが更にコッケーイなのは、第三の価格論である。ここに至って彼がマルクスの価値形態または交換価値論——貨幣論への無理解は、あきらかに発揮される。なぜなら『生産物の生産に支出された社会的必要労働時間を直接あらわす』ようになると貨幣——価格などは存在しなくなるが故である。それ自身背理である。私は、かつてエンゲルスの言葉を用いつつ書いておいた。

『商品価値とは、その生産に支出された社会的労働の対象的形態であり、この社会的労働時間がその価値の大きさを規定する。労働乃至労働時間は、価値の内在的尺度である。だが商品世界における価値表現は、労働時間ではなくて、ある他の商品で表現される。』——商品価値は他の商品の使用価値で表現される。』——ここに貨幣発生の根源がある……価値は社会的関係ではあるが、しかし物の属性論、かの『俗流的な、何一つ説明しない生産費説』（ケネー、セイ、マルサス、等々）にすべりこんだものと言わざるを得ない。

次にルーブルであるが、これが貨幣であることは何人も否定しえない。それは公定では一米ドル＝九十カペイク（ルーブルは百カペイク）となっているが、黒田君はこれをいかに説明しようとするのか？ 一言ものべていないが、労働価値法則の全面的導入がないという前提に立っているもので、もしその説明をまくことができるならば、なかなかみものである。これは私の推定だが、この場合、何ごとかを説明しようとするれば、価格論においてマルクス学説の放棄とブルジョアの生産費説への転落をみたように、何らかのブルジョア経済学の貨幣論に移行せざるを得ないであろう。私は戦前、貨幣論の勉強をすこしばかりしたことがある。それで黒田君に教えておくがいろいろある。貨幣名目説、貨幣固定説（クナップ、ペンディクセン等）あるいは貨幣数量説（リカード、フィッシャー、カッセル等）……黒田君のお好み次第というわけだ！

賃金（二〇〇—八〇ルーブリ）、貨幣、物価というようなものが全面的に存在しているのに、価値法則の全面的導入がないなどといってみても、それは無理だ。シャハトマンのようにほほかむりをすれば別だが、強いて合理化しようとするれば、マルクスの価値論、貨幣論、価格論、賃金論等を放棄し、ブルジョア経済学にその地歩を移さざるを得ない。既に一言したように黒田君は現に移し、また移しつつある。

精神錯乱者？

性として、ただ物と物との関係においてのみ発現するものであるからである。そして最後は、一般的等価形態——貨幣に至る。マルクスは、『労働貨幣』論者ジョン・グレイに、『労働時間が価値の内在的尺度であるのに、なぜそれとならんでいま一つの外部的な尺度があるのか？』（『経済学批判』四）ときとしているが、商品世界は必ず、この「いま一つの外部的な尺度」を生む。……

さてしかるに、既に価値法則からまぬがれている社会主義下の「等量労働交換」関係においては、一切の「外部的な尺度」を必要とせず、直接、労働時間そのものが尺度として立ちあらわれる。……」（『連「社会主義」の批判』六三—六五頁）

まさしく黒田流思考は、マルクスが嘲笑したグレイ、ブルードンの「労働貨幣」論の重流である。（『経済学批判』中の「貨幣の尺度」単位に関する諸学説の項を見よ。）

すこしわき道にそれた。上記の引用につづく黒田君の文章をみよう。

『しかしその場合、「価格」は官僚の恣意によって定められるものではない。たとえば、生産手段の「価格」は、生産費（労働対象・原料の費用、固定フォンドの消耗部分および賃金をくわえたものに、三—五%の計画利潤なるものを附加したものを基礎とするが、社会的必要労働時間以下に（これは「価値以下に」とよばれている）きめられる。これに対して生活消費手段のそれは社会的必要労働時間以上に（これは「価値以上に」とよばれている）決定される。』

だが、価格の基礎という生産費は一体何によって決定されるのか？ 労働価値法則の全面的導入を否定して価格現象を説明しようとして、はからずも黒田君は、ここに至って、ブルジョア経済学の価値

黒田君はいう。

『ソ連邦の現実の経済構造と、スターリニスト経済学者によるその「理論化」とは必ずしも一致していない。後者を顔面通りにうけとるならば、われわれは精神錯乱者になる以外に道はない。』

スターリンは、例の『スターリン論文』のなかで『わが国の企業は価値法則を考慮せずにはやってゆかれないし、やってゆかれる筈がない』といった。たとえソ連で作用している価値法則は、彼によれば『個人的消費の商品交換の面』以外は『規制者』としてでなく、単なる『影響力者』だとしても、そのようにいった。更に今日のフルシチョフ時代は、もっとおおっぴらで、スターリンが認めなかった生産手段の商品性をも認めるに至った。スターリニスト経済学者の「理論化」によれば、今やソ連経済は商品生産の花盛りである。（『エゴニスト』十月二—四日号所載「社会主義における商品生産の性格」等参照）

黒田君の警告は、このような「理論化」をみとめることは精神錯乱者だといわけだ。私は青年時代から酒飲みでそろそろアルコールがアタマにきたらしく、どうやら精神錯乱者の仲間に入ったらしい。というのは、このような「理論化」はソ連経済の現実をかなり反映していると認めているからである。もちろん、スターリニスト経済学者の「理論化」にはバカバカしいようなインテキもある。『社会主義の下での商品生産の必然性』などというものがそれだ。が全然架空というわけではなく、かなり現実を反映している面もあるのであって、例えば右の言葉を「スターリニスト・ロシアにおける商品生産の必然性」とおきかえるならば、まんざらでもないのである。スターリニスト経済学者は、黒田君よりは経済学に通じているらし

く、賃金、貨幣、価格等々が支配的であるのに商品生産が非支配的といつても通用しないことを心得ているのである。ただそれと社会主義を調和せしめようとするところに御用学者の悲哀があるわけである。(オストロヴィチヤノフなども商品生産と社会主義が対立したものであることを全然知らぬわけではない。彼らの初期の本にはそう書いてある。ただ御用学者のかなしき、いろいろと官僚的スコラ哲学を發明しなければならぬわけだ。)

このオストロヴィチヤノフなど、一時、ソ連邦には「変容された価値法則」が行われているといったことがある。私はこの表現自体は、——決してオストロロフの意味ではないが——なかなか面白いと思つたことがある。ある意味ではそういう表現をしてもいいと思うからである。

黒田論文をよむと、ハッキリとは書いてないが、マルクスの価値論というものは、あらゆる場合に価値通りの交換が行われると前提し、そうでなければ成立もしないかのようによつて読みとれるところがある。先きにもべた黒田流価格論の論述のところなどもこの印象が深い。ある人にこの私の印象を語つたら、その人も感じとられたといつていた。かりにそうだとしたらオドロキであつて、それでは、『資本論』第一巻の価値論と第三巻の生産価格論(費用価格・平均利潤)は矛盾しているという、周知のブルジョア学者の批評にも同ずることになる。マルクスは「相異なる諸生産部門の諸商品がそれらの価値通りに売られるという仮定は、いうまでもなく、諸商品の価値は、諸商品の価格がそれをめぐつて運動しかつ価格の不断の上昇と低落とがそこに平均化される重心であるということ」を意

本主義自体が「変容された」資本主義といつていぬこともないのである。この具体的分析についてはなお研究を進める必要があるであらうけれども、このことを心得ず、況んやマルクスの価値論とは、いつでも価値通りの交換を意味するなど幼稚なことを心得ていては「価値法則の全面的導入」を否定するのは無理からぬことではある！ 黒田派から私への攻撃に動員されたらしい早大ソ研の一女学生は「価値法則の貫徹という大ざっぱな目盛りによる単純極まりない当はめ」などと悪口をついているが「単純極まりない」のはソチラさまであらう。

確かにマルクスの価値論を理解するのはむずかしい。青年時代、私は『資本論』のこの部分が現実離れした謎のように見え、どうにも理解できず、アタマの悪さをなげいたものであつた。古典音楽をわかつたような顔してきている人々があるが、あのようなものであつた。しかし、マルクスのクーゲルマン宛の手紙の一つ——『……社会的労働の一定の割合への配分の必要は、まったく社会的生産の一定の形態によつて変えられるのではなく、ただその現れ方を変えうるだけだ』というところは自明のことである。……歴史的に異つた状態において変りうるものは、その法則が貫かれる形態だけである。そして社会的労働の連絡が個人的労働生産物の私的交換としてあらわれる社会状態においては、この労働の比例的配分が行われる形態が、まさにこの生産物の交換価値なのである。』——という有名な一句に導かれて理解の光りがさしはじめ、漸次その正当性に確信をもつようになった。ところでこの『社会的労働の連絡が個人的労働生産物の私的交換としてあらわれる』を、マルクスの他の言葉でと

味するにすぎない』といつている。(『資本論』岩波版 第八分冊三七頁)

ところでマルクスは「その価値通りの、また近似的に価値通りの、諸商品の交換は、資本主義的發展の一定の高さを必要とする生産価格での交換よりも、遙かにより低い一段階を必要とするのである」(同上頁)つまり「価値通りの、または近似的に価値通りの、諸商品の交換」は、資本主義の生産価格段階より低い段階——いわゆる単純商品生産段階である。利潤率平均化の傾向があらわれ、生産価格が形成されるような段階になると、価値法則の作用があらわれ方は、単純商品生産段階のように単純ではなく、——ブルジョア学者にマルクスの矛盾をいじめたような——複雑な、いわば偏倚した形をとる。商品価値の生産価格への転化に際しては、マルクスのように、すべての資本家が、いわば一つの巨大な企業(全体としてみたる社会の全企業)の株主としてあらわれ、自己の労働者の剰余価値でなく、所与の期間内に生産された総剰余価値または総利潤のうちから彼の資本量に比例する剰余価値、従つて利潤を取得するようになるからである。それにもかかわらず「生産価格それ自身は、労働時間によつて決定される価値なくしては説明されえぬものとして残るのである」(マル)

自由競争的資本主義の段階(生産価格)においてすらそうであるとしたならば、国家資本主義、況んや十月革命後の反革命として形成された特殊な国家資本主義——官僚制国家資本主義においては、価値法則の作用や支配は決して単純なものではなく——いわば「変容された価値法則」という表現を適当ならしめるような——偏倚した姿をとることは、予じめ想定しようところである。官僚制国家資本主義ならば、個人的労働が直接にはなく、間接に総労働の構成要素として存在することであり、直接になれば価値法則は死滅する。直接的でない限り、いかに変容され偏倚された形をとるにしても、価値法則は終局的には貫徹せざるを得ない。然るにスターニスト・ロシアには、その対外関係を別にしても、内的に、直接に総労働の構成要素とすることを妨げているものが存在している。価値法則、そしてスターリニストの自認のごとく、商品生産が花盛りというわけなのである。私は従来かかるものとして、国营企業の独立採算制(商業的原則)「労働の量と質による分配」および官僚所有をあげてきている。(この点、なお、意見があつたらいろいろ拝聴したいものだ。)

偽造するクロカン学派

黒田論文の初めには、おまけのように私への攻撃文句が書かれている。曰く「トロツキー自身が官僚独裁への変質という立場をとっていると力説する赤色帝国主義論者の文献的基礎づけは虚偽である。なぜなら、相互に連関した二つの文章の前半だけをひっこめてきて、後者をきりおとす限りにおいてのみ、そのような主張が可能となるものではないからである。たとえば、「裏切られた革命」三〇七頁の第二パラグラフと、対馬「ソ連社会主義の批判」一九六頁の後半とを対比せよ。」

トロツキーに「偽造するスターリン学派」という題の本がある。私は思わず「偽造するクロカン学派」とさげんだものである。なぜ

なら私は、そんなことをいっただけでもなく、『相互に連関した二つの文章の前半だけをひっこねいて』きたおぼえもないからである。

拙著一九六一—一九七頁を見よ。私は『トロツキーはパブロと同じように、スターリニスト支配を官僚独裁と呼ぶことに何らの異議はない』とは書いている。これはトロツキーは「官僚独裁への変質」という立場をとっていると力説するのとは大いに違うのである。なぜなら、トロツキーは「官僚は大衆組織の手から権力を奪い去ってしまった。この意味において、われわれは、官僚独裁について、またスターリンの個人独裁についてすら語れよう」といいながら、生産手段固有の保存のために、『プロレタリア独裁が、官僚独裁のうちに、歪曲されてはいるが併し疑いなしに表現を見出す』と主張しているからであり、そしてこの主張は、一九六頁の次頁に、ちゃんと紹介されているのである。二つの文句を分離などしていない。ただ、私の主張したことは、トロツキーの前半の主張からすれば、後半の主張は成り立たぬということをして「力説」しているだけである。

何のために、他人の主張を敢てねじまげてまで攻撃しなければならぬのか？ 血迷っているのか？ それとも何らかのセクト主義的利権のためか？ ここで私は敢て一言するが、わが国今日の反スタ運動内の最大の敵はセクト主義であるということ、そして、黒田君の一派は、この傾向が極めて強力であるようにみえることである。たとえば、ここにソ連論をとれば、黒田一派のソレとわれわれのソレとの間には、理論上の相違は大きいけれども、いずれも労働者国家説を否定する以上、政治的には十分協力しうる筈である。すくなくとも純トロの諸君とよりは近いのだ。然るに必要以上に対立しているのか？

このマルクス主義の『生産力理論』を理解しえざる黒田君たちは、私見を『あてはめ』主義とか、なんとか毒づき、しかも自らは、みじめにもブルジョア経済学的ソ連論の泥沼に転落し去ったのである。私は黒田君に『現代ソ連論の根本問題』なる全文を取消し、ハツタリをやめて再検討するよう切に忠告するものである。しかも今度の論文によって、同君はマルクス経済学を殆んど理解していないことを白日の下にバクロした。君は未だ若い。あらたにその本格的な研究から着手されるよう深く切望するものである。

『生産力理論の偏向』とは、何んのことかよく解らぬが、しかし考えてみれば、マルクス主義は一種の『生産力理論』ともいえるもので、私は大いにこの『偏向に傾斜』しようと思がけているものである。

『弁証法は、あたえられた社会現象を、……根本的原動力に、すなわち生産諸力の発展と階級斗争とに帰着させることを要求する』(レーニン『第一』)『手挽白は封建君主の存在する社会を生み、蒸気白は産業資本家の見出される社会を生ぜしめるであろう。』(『貧困』)『生産力の発展は、……(其産主義の)絶対的に必要な実践的前提条件である。うんぬん』(『ドイツ語』)

右の『生産力理論』が正しいとすれば、十月革命後の、西欧革命の挫折と合同反対派(トロツキー派とジノヴィエフ派のプロック)の敗北という条件下においては、あの後進的生产力段階において形成される生産関係は、ブルジョアのたるより外にありえざるものであった。ただ十月革命における生産手段固有によつて、そこに形成されるブルジョア的生產關係は、特殊な國家資本主義型をとつたというまでである。実はこれが私のソ連論の中心にある見解なのである。

るのは、実にセクト主義のためであり、私はこれが鼻もちならぬのである。セクト主義とその組織論を打破せよ、私は、革共同全国委員会の同志諸君に、何んとかこの点の打破に心をくぼるよう熟考してもらいたいものである。抱容力に欠けては大事をなすことはできぬであろう。

わき道に入ったが、この派の主張について、なお、最後に一言しよう。黒田君はいう。

『資本制生産の規定的動機は「生産のための生産」「蓄積のための蓄積」であったが、スターリニスト・ロシアにおける社会的生産のそれは「社会全体のたえず増大する物質的および文化的必要の最大限の充足」を表看板としながら実は生産力のブルジョア的IIアメリカ的水準に「追いつき追いこす」ことを課題とした生産力の物神崇拜である。』

この式の表現はその他にもみられるが、私にはこういうのは、牢獄を刑務所、女中をお手伝いさんと改称してエツに入っているとしても変らぬこととみられ、反論するのもバカらしく思われるのである。それよりも黒田派の機関紙『前進』(九月二日)の私見への一発言をとりあげよう。

『対馬忠行氏の先駆的なソ連論の業績も、かかる革命的プロレタリアートの視点を欠如しているが故に、本質的に世界革命の展望の中でソ連國家をいかに位置づけるのかという問題意識を欠如し、必然的に生産力理論の偏向に傾斜してしまうのである。』

この文句は具体的に何を意味するのか、私には解らなかつたので、同会に、その他の条項と共に質問してみたが、今日までウンも

このマルクス主義の『生産力理論』を理解しえざる黒田君たちは、私見を『あてはめ』主義とか、なんとか毒づき、しかも自らは、みじめにもブルジョア経済学的ソ連論の泥沼に転落し去ったのである。私は黒田君に『現代ソ連論の根本問題』なる全文を取消し、ハツタリをやめて再検討するよう切に忠告するものである。しかも今度の論文によって、同君はマルクス経済学を殆んど理解していないことを白日の下にバクロした。君は未だ若い。あらたにその本格的な研究から着手されるよう深く切望するものである。

なお、つけ加えて強調しておくが、スターリニスト・ロシアで価値法則が止揚されているとみることは、スターリニスト以上の超スターリニストになることだ。それは、そこにおける労働が既に、直接に社会労働となつていと謳歌することだからである。

(附記)ここに書いた批判の簡単な要旨は、黒田論文があらわれた直後、黒田君及び革共同全国委員会政治局宛申し送った。個人的にも知っていることではあり、何分の応答をえて、諸君らと討論し、批判論文の発表は、その結果に待とうかと考えたものである。然るに両者から今日まで何の応答なく、よつて「先駁」誌に投稿して世上の批判をおおぐ次第である。

官僚制考察の一メモ

姫岡玲治

安保斗争は、社会民主主義やスターリン主義の政治と組織における官僚主義の性格が、抑圧された大衆の戦斗力、自発性、創意性を解き放つ力をもはやもたないということを実裏をもってあきらかにしたことによって、歴史を画する一つの意味をもちえたのであった。プロレタリアートを受動的要素とみなし、その意識の進展に努力するのではなく、その受動性をもっぱら利用し、少数の指導者の指令から大衆がはみでないように十分に注意し、彼らには斗争の指導に關して何らの権威も認めない、というのがこの官僚主義的政治と組織の特徴であった。安保斗争は、このような官僚諸組織の政治と組織の支配を拒否するいわゆる反スターリニズム運動を、第四インター系トロッキーストが低迷していた地点をはるかにこえてたところにもですすめたのであった。彼らはいえ、スターリン主義者によってこそ生じられる現実状況を、想像のなかで自己のものとし、自己が果さねばならなかったであろうような革命的解答を仮定することで満足し、ただ警告と告発をくり返すにとどまっていたの

である。しかし、共産同と非常に政治的な学生運動の結びつきに少なからぬ影響をうけて、プロレタリアート内部での擬制前衛への、自発性的反発の明確な結晶化が部分的に開始されたこの過程は、プロレタリアート自身の意識的進展の歴史的に限定せられた表現であるといわねばならないのであるが、その自立的な共産主義グループの結成はまだ地方的・萌芽的にとどまっている。安保斗争後の全局面はいぜんとして、今日の独占状況のもとで戦斗力をにぶらせたままにある労働者階級と、その指導部を自ら名乗りながら官僚的「虚体」化にますますふかくおかさねつある政治諸組織の、互いにまじりあわぬ二層への分化を根本的に止揚せぬかのようにみえる。急進的小ブルジョアの運動と特に結びついた共産同は、その分解によって労働者階級を代位するという方向を自ら拒否したが、あらたな労働者階級の指導部を僭称する春日新党や、革共同も、自らの組織の中におさるべき勢いで新たな官僚主義の芽をはぐくんではいるのである。「インターナショナルを創立したときにも、われわれは、労働

者階級の解放は、労働者階級自身の事業でなければならぬ、という関の声をはつきりと定式化した。したがって、我々は労働者はあまりにも無教育であるから、博愛主義的な大小のブルジョアの手で上から解放されねばならないと公然と宣明する連中と協力することはできない。」(マルクス「三人のチユリフ人の」)というこのマルクスのきっぱりとした断言に、あらゆる党派的「マルクス主義者」はなんと無頓着なことか!

だが、労働者階級はたんに自らの組織をむしばんでいる労働者官僚の支配になやんでいるだけではない。

「ソ連論と官僚」(九頁)でかいたように旧社会の残存諸階層が優勢なロシアで、プロレタリアートが社会の集団的管理の問題という、とりわけ革命的な問題に直面したとき生じた異常な困難が官僚的手段にもとずく、生産手段の集中と労働の社会化の選成によって解決せられる過程は、一人の男がロシアの国内のどの人間の首をも自由に切りおとせるといふ途方もない抑圧を伴ったのであるが、かかる暴力を産後役にした官僚制国家資本主義制度は、官僚的支配を全生活面にしみわたらせたのである。漸次に支配階級に転化した労働官僚は、大衆のコントロールから自由に社会のあらゆる管理機能をその周囲に結晶させた。それにもかかわらず、生産手段が管理者から最後の日雇に至るまで現実生産において活動する一切の個人に対して、彼らの直接のコントロールの及ばない、国家所有として対立し、労働者との区別および対立において官僚に与えられる監督、

及び指揮の機能も一つの労働機能として表示されることによって、この官僚支配は、あたかも「労働の共同体」への過渡、すなわち労働者国家、の官僚的歪曲として擬制されるのである。しかし、現実の生産者の労働が支配機能ではなく、それを管理するという職能に完全に従属させられ、しかもこの下級官僚の管理職能が、官僚の位階序列の最高の権威たる共産党指導部の支配のもとに集中せられるという機構は、社会的所有の少数者による取得を意味し、彼らに社会的労働にたいする絶対的な支配力を与えるのである。あらゆる創意、判断、天分を排除することの官僚機構は、その構造そのものによって権力の全体性にむかうのである。それは、上昇期のブルジョア社会のなかにあつて、混乱をふくむことによつていくらか個人と集団とに独立的な発達を許していたもの一切の存在をおびやかす。

ところで、資本主義の生産様式を探究する典型的な場所をイギリスに求めたマルクスが「だがドイツの読者がパリサイの徒的にイギリスの工業労働者や農業労働者の状態について肩をすくめ、あるいはそれと同時に、樂觀的にドイツではことはまだ永い間そんなに悪化はしないのだといつて自ら慰めておるとすれば、私は彼にこう呼びかけなければならぬ。De te Fabula narratur! (ここで報告しているのは君のことなのだ!)」(資本論四巻)といつたとすれば、われわれは、イギリスをロシアに、ドイツを伝統的ブルジョア国家によびかえて同じようにいうことができる。「ここで報告しているのは君のことなのだ!」と。いたるところで、経済における独占集中や増大した国家勢力、機械の発達、生産の合理化、そこから生じたプロレタリアートにたいする強度の搾取、それらが労働の官

僚主義と同じほど、産業的、行政的官僚にたいして新しい重要性を与えているのである。こうして、官僚主義の特徴であるあらゆる独自の思考、創意的絶滅、盲従、愚昧、国家崇拜、墮落的な専門化が、三〇年代以降の全般的な特徴となった。

しかし、権力は、無名の下級管理者、売場監督、職長、地方公務員、俸給生活者としてつとめる医師、弁護士、技師、教師や組合書記などによっても一様に担われているのではない。官僚機構は、そのみかけのなばなしさにかかわらず、高度に集中化された資本家的支配の執行ベルトにすぎない。そこでは生産手段が一切の個人から収奪されて、国家の手によって統括される一方、従来資本所有と結合されていた再生産過程における一切の機能は、社会的諸機能に転化される過渡段階としてのすがたを明瞭にあらわす。すなわち資本主義の理論的極限としての国家資本主義である。これを直接生産者の結合生産様式に転化するためには、政治権力から疎外されたプロレタリアートの自己権力の組織化のみが必要なのである。

経営者こそが企業経営の技術的見地からみてもっとも合理的に社会を運営するとして経営者革命論をとくバーナムの議論はこういう支配の集中を隠蔽する巧妙な議論にすぎないし、所有から分離した官僚的調整に重要な意義を認め、新たな抑圧社会の到来をみたウエーニユは、少数者による社会的所有の取得がプロレタリアートの生存諸条件を統合し、その資本主義への対立の意味を仕上げることをかならずしも明確にすることができず、その革命的情熱によって我々に多くの学ぶものをのこしたものの、ペシニズムにおちいってしまふことになった。

だが、一人は達成された革命によって、一時は世界革命の拠点とみなされたソビエトロシアがその孤立、後進性と指導政党の階級からの独立のゆえに変質し、現代世界が伝統的資本主義国家群とスターリニスト国家群とに分割されつつも一つの全体として、プロレタリアートに一層強く迫る時、プロレタリアートは、一体それ固有の生長のために記録されるような累積的な経験を、いかにして発展させたか？ クレムリンとホワイトハウスの室内にいる数人の男の

さて、これらの国においては、ファシズムとの斗争において敗れたドイツ共産党のように、金融ブルジョアジーの危機によって生じた危機を救済するに無能であることが証明されたとき、スターリニズムは急速に力を失い、もはや労働者の日常意識に依存した一握りの官僚組織に転じてしまうのである。また、社会民主主義者も言葉のうえでの革命性も失い、民主社会主義者として変貌することになった。こうして、スターリニスト国においては共産党官僚とのプロレタリアートの斗争は、彼らの自己解放のための闘争と同義になり、伝統的資本主義国における労働官僚との闘争も、やはり窮極的には全社会生活にしみわたった官僚制度中の支配者、すなわち、支配的ブルジョアジーの打倒をまっしてはじめて完結せられることとなった。

さて、この国家資本主義の形成期において労働の官僚主義が、支配的・伝統的ブルジョアジーをとりのぞき、支配的官僚層に転化しようとする運動はスターリニズムとしてあらわれた。国家資本主義が「対立が消極的に止揚され」た「結合生産様式への過渡形態としてみられる」かぎり、階級は、こうした変革が搾取を廃棄するものではなく、またほんとうの解放をもたらすものでないことを予感しているときでも、ある種の反響を抱くのである。支配的ブルジョアジーが強力なところでは諸資本の漸次的集中によって一切の個人々々からの生産手段の収奪が行われた。彼らは、労働官僚の力を動員するという危険な道によってではなく、彼らが行政機関、組合機関をも併呑してしまった。ブルジョアジーとプロレタリアートの力が拮抗し、互いに一方を打倒するに十分でない時は、危機によって急進化し、狂暴化した小ブル大衆のファシズム運動が、国家機関を奪取してしまった。日本では、ブルジョア社会の発生以来、ある種の独立性をたもっていた天皇制官僚機構が異常な迅速さで社会生活の中心となった。しかし、ナチズムも天皇制も、その主要な任務は労働者階級の戦闘的分子を熾滅し、国家独占資本主義への推転を促進するということであつたので急速に伝統的、支配的ブルジョアジーと妥協してしまい、帝国主義戦争の敗北後、従来の行政機関の中に溶解をうけていたファシスト党员や天皇制官僚が掃討されたのちに、これらの伝統的ブルジョアジーが新たな官僚機構をつうじて社会の絶対的な支配力をにぎった。こうした伝統的資本主義国の国家資本主義への発展の漸次性は、かくして、スターリニズム社会とはことなつて、さまざまな旧社会の残存物をのこすことになった。す

決断が、全世界をして、放射能のたちこめる荒野と化す力を有するほど支配が集中したこの状況は、階級がたんに後退を実行したことをあらわしているのか？ マルクス主義は、今日まで、これらの質問と同様の質問について、十分明解な、革命的な解答を与えてこなかったようだ。いったい、官僚主義のもとに、解放の主体としてのプロレタリアートは窒息せしめられてしまったのであろうか？

さて、マルクスはいう。「……プロレタリアートは永劫の罰のうちに於いての永劫の罰への反逆であり、この反逆たるや、彼らの人間性と、この人間性の公然たる、決定的な否認である彼らの生活状態とのあいだの矛盾によって、必然的にひきおこされるものなのだ。」(マルクス「刑罰家説」邦訳)と。プロレタリアートの、この存在そのものに「(訳)『マルクス主義』(邦訳)と。プロレタリアートの、この存在そのものに於ける革命性のゆえに、ブルジョア階級にたいするこれらの斗争は、かれらの存在とともににはじまるのであるが、マルクスが「共産党宣言」のなかであたえていた階級の進展についての短い描写もプロレタリアートの経済的役割は、たんにプロレタリアートの数、あるいは集中化に影響をおよぼす物質的領域の変化ばかりでなく、総体的な、社会的経験をあらわすことを意味しているのである。そして、現代社会におけるプロレタリアートの社会的経験の解剖も階級がたんに後退したのではないこと、階級は、たんにブルジョアジーの転覆のみならず、なによりもまず階級の自己権力の組織化の問題、社会の集団的管理の問題という、特に革命的な問題に、一七年におけるよりもはるかに強固な基礎の上で直面していることをあきらかにせずにはおかないであろう。

階級関係の推移をもととして、二〇世紀の歴史運動を解明し、こ

の運動によってプロレタリアートが生存諸条件を統合し、その資本主義への対立の意味を仕上げる姿を明らかにすることは、プロレタリア運動と結びつこうとするわれわれインテリゲンチヤの緊急な任務なのであって、プロレタリアートをその社会的・歴史的存在から根こそぎにして、彼らに代って「自覚せる前衛」を僭称するならば、それは旧来の労働官僚組織に代るに、またもう一つの官僚組織をもつてするにすぎないことになるであろう。

さて、そこでアメリカの国家独占資本主義支配下の官僚化現象について若干のメモを次に記し、上記の理論的仮説について同志たちの検討をこい、問題の所在を探究する試みを行いたい。ただし、「唯物論的把握をただ一つ歴史的事例について展開することだけでも数年にわたるおちついた研究を必要とすべき学問上の仕事」なのであって、「たんなる言葉だけでは何んの役にもたない」ということ、大量の批判的に検討され完全にはわがものとされた歴史的材料だけが、このような課題を解決することができるのである」(エンゲルス「カールマルクス経済学批判」選集三巻二四五頁)

今世紀はじめころのアメリカにおける自立的な労働者運動の困難は、アメリカ金融資本の形成の特殊性に少なからぬ根拠を有していた。南北戦争後西部の無主地は、ヨーロッパの慢性的過剰人口を移民として吸収しつつ、急激な開拓がすすめられたが、それはプロレタリア化したはずの東部の農民やある程度の貯蓄資金を蓄積したプロレタリアートを吸収し、彼らに上昇の幻想を与えていた。また、この

西進運動は、広大な土地の商品化を投機的にすすめて、それがなければ工業証券の資本市場を構成したはずの巨額の資金を吸収した。それは貸付にたいする非常な需要のみならず流通手段の慢性的不足をも招来し、ここに証券銀行であった商業銀行業の開設のあきらかな契機があった。支店銀行の設置を制限した州法の存在もあって、ここに万余の単一銀行が誕生したが、銀行に集中せられる社会的遊休資金のかかる分散と工業証券市場の未発達とは、株式発行による資金回収を予定した大量の資本信用授与と、そこから生ずる銀行と産業企業の、強固な内的、組織的結合を未発達にしたのであった。ドイツにおいてはベルリン五大銀行を中心にした銀行業の発行業務と交互計算業務の相互規定的な関係から組織的独占体が生育し、集中せられたドイツプロレタリアートは、社会生活に重要さをかち取っていた。このプロレタリアートの集中化の現象は、また第二インタの改良主義の厳格に訓練され、位階づけられた組織と、指令的イデオロギの基礎でもあったが、ローザが労働者階級の自然発生性をとくに強調したのもかかる故にであらう。(Cliff "Rosa Luxemburg" P. 43)

反面、アメリカは、金融資本の形成をもちこたえていく証券投機的に実現することとなった。最初の有名なスタンダード石油トラストは広汎な国内市場を致富のために大いに利用しえた石油業者ロツクフェラーによって銀行の介入なしに設立されたものであったが、このトラスト証券の取引等が刺戟となって、工業証券市場はあらたな活気をしめすようになり、モルガン等の投資金融プロモーターによって合同運動が大いに推進された。この二〇世紀初めのアメリカに

おけるトラスト形成は、いわば独占的利益を目的とする株式操作に重点を有したのであった。すなわち、合同後に予想せられる独占的利益の資本家による大量の水増株の発行によって、株式への大衆的投機資金を詐欺的にも、掠奪的にも収奪することが支配的推進力となったのである。(Meade, "Trust Finance" Chap. V (一画) こうした投機の隆盛は、例えば、靴みがき少年や新聞配達少年が、あらゆる困難をのりこえて成功の高みに達するという一連のホレイシヨ・アルジャー物語のように、労働者及び下層中産階級に昇れる夢を与えた。社会の最下層、未熟練労働力を供給する移民やプエルトリコの流入等、未成熟な分子による労働者階級の稀薄化と、立身出世物語にみられるような階級からの有能な分子の脱落は、三〇年代におけるロシアという異った歴史的環境——すなわち、工業発展にともなう技術者、熟練労働者、官僚への古参労働者にたいする門戸の開放と、農村から流出する未訓練の分子による労働者階級の補充(五ヶ年計画中、労働者数は三〇〇万から八〇〇万に達した)——におけるとおなじように階級意識の進展にたいする重大な障害となったのである。

しかし、二〇年代の証券投機ブームは、いわば、資本家社会的意味においても、不合理なところまで拡張され、矛盾はいわば極点にまで成熟していた。大量の労働予備軍を供給してきた各国からの大量の移民が一七年以後制限されたため、新しい労働の大量の流入によって最下層の社会層も社会的、経済的に自然とおし上げられることがなくなった。

テラー・システムは、あらゆる種類の機械を理解し、操縦する

ことのできる熟練労働者を駆逐して、ただ一種の機械に奉仕する自動的に訓練された並の職工でかえた。「より少ない浪費、より多くの監督、より多くの職工長と、デスクにかじりつく事務員、昼食に一五分、便所へ行ってかえってくるのに三分、テラー式スピードアップ、どこでもかしこでも、リーチ・アンダー、アジャスト・ウオッシャー、スクルーダウン・ボルト、……ショープ・イン・コッターピン、人間の生命の、最後の一滴まで生産に絞り取られ、夜、労働者たちは、ぶるぶるふるえながら、灰色の雑巾みたいになって帰宅した。」(「D.S.P.」並河訳「U」)ところで、アメリカ資本主義下のかつての成功への道であった独立自営農民に対する脅威も二〇年代にはじまった。二〇年代農産物価格の下落にもかかわらず、農民は単価の下落を販売量の増大によってカバーしようとして努力したので過剰生産は慢性化した。二九年までには農業従業者一人あたりの現金収入は都市の勤労者の約三分の一となり、農場所有権はこの小作化によって失われ、抵当に入ることによって拘束されて、大半の農民は自由独立ではなくなってしまった。「アメリカにおいては、小農民たちが農民・労働者党を結成し、この党はますます急進的になって、共産主義者に近くなり、アメリカに農民と労働者の政治を創ろうという思想をもってみだされつつある。」というスターリン主義者の幻想はかかる基礎の上に生れた。コミンテルンの代表者ジョン・ペッパーは、まだ若くて弱いアメリカ共産党をして、アメリカ資本主義を速やかに顛覆するため上院議員ラフォレットの周囲に農民・労働者連合党を創るという馬鹿げた恥ずべき冒険に引き入れたのであったが、農民のかかる理想化はたちまちにして破産してしま

つた。(トロックキー「レーニン死後の第」プロレタリアートの数的にも有勢なこの国では、農民は一個の独立した政治的役割を演ずるべくには、あまりに無定形、動搖的であり、彼らが独立の「反資本主義的」農民党を創立することの不可能性も、一九世紀以来のナロードニキ党の悲劇的な運命によってつとにせめられていた。「労働者農民の二階級党」の構想も畢竟かかる無益な試みに、労働者階級を隷属させることにはかならなかつた。

さて、こうした社会的関係の矛盾を覆いかくしていたのが、空前の投機ブームであつた。二〇年代はたしかに大規模な固定資本と住宅の新設、更新の激増がアメリカ経済の活況を維持していたのであつたが、しかし、住宅建設は二八年ごろには飽和状態に達していた。アメリカにおいては、ドイツのように資本市場が銀行を中心にして組織化されるということにはならず、投資銀行業のモルガン、クー・ロープや、石油業者のロックフェラーのごとく数個の中心に資金の集積が分散し、ここに財閥として、非常に高度に集中化された支配が形成せられ、このもとで実現せられる巨額の独占利潤も独占部門の拡大再生産を促したが、しかし、独占利潤の取得のためには、これは一定限度に制限されねばならず、しかも二〇年代には財閥は独占力を利用することによって、新技術の発展による固定資本の大規模な更新には、むしろ消極的であつた。その結果みかけの繁栄にもかかわらず遊休生産能力が存在した。ブルッキングス研究所の推計数字によれば遊休生産設備は二九年でさえ二〇%に達した。現実資本建設の目的で発行された新株式と抵当証券の総額は五〇億ドル以下であつたが、投資を求めつつあつた資金の量は約一五〇億ドル存

かつたが、このプロレタリアートの立ちおくれをぬつて経済生活にたいする国家の支配は増大の方向にむかつた。ところでプロレタリアートは、より合理的な産業再組織、危機と失業の排除のうちに、こうした変革が搾取を廃棄するものでなく、またほんとうの解放をもたらすものではないことを予感しつつも、それ自体のうちにある反響をいだし、ここに資本主義の危機は決定的に救われたのであつた。

ところで、このニューデイルの成功は、プロレタリアートの生存諸条件とその日常的な意識に重大な変化をおよぼした。

国家の機関たる中央官僚組織は経済生活の調整において重要な役割を演じはじめた。広範囲にわたる国家資金撤布のための諸機関が相次いで設立せられたのはじめ、赤字支出を補う公債累積、通貨準備の基礎をはるかにこえる莫大な金流入は官僚の複雑なる金融的・財政的調整の手段を発達させた。

しかし、これらは資本所有者を国家機関の単なる寄生者におとしましたのではなかつたのである。三二年六月末、一九、四八七百万ドルであつた公債現在高は、四〇年六月末には二三、四八一百万ドルにして四二、九六八百万ドルになつたが、二〇年代に証券市場で乱舞した遊休貨幣資金は、かくして、国家を通して、巨大独占体により社会的に利用されることとなつた。ニューデイル期につぐ戦時期では、次のような事実さえみられた。すなわち、三九年〜四五年における新投資は二六〇億ドルであつたが、その約七〇%は国家投資がしめるにいたつた。そして、戦時国工場七五%は最大百社

在した。(ノリス「アメリカの資本」新証券発行はまた合同運動をもその対象としたが、企業合同にはいりうるような企業は多くはすでに結合され終つていたので結合すべきものが不足していた。したがって合同運動も多かれ少かれ投機的であつた。株式操作によって入手された資金の多くは生産資本を増加せず、ただ証券の価格をつり上げただけであつた。株価についてみれば、ウォールストリートジャーナルの指数は二六年四月の一六三から二九年一〇月の三八一にまで高まり、実際の利廻り採算とは無関係のところまで高められた。この結果投機利得は莫大な量にのぼり、財閥はますます支配を強化していった。ところで、株式投機も、再生産過程にもとずかないところでは拡張されただけに、株式相場の基礎をなす「予想され、前以つて計算された収入」(資本論「向坂」がえられないということになると株式市場は崩落する。一〇月二四日にはじまったガラはわずか二ヶ月のうちに株価を平均四二%がた急落せしめた。

ガラによつて、現実的な、また資金としての過剰資本の存在は顕在化した。巨大独占体はこの過剰資本の一部を生産制限によつて遊休させこれによる独占価格の設定をつうじて利益をえようとした。大量の失業状態が生れた。しかし、工場からの外国人労働者の意識的駆逐が行われ、移民帰還が行われた。階級意識は、ふたたび労働者自身の競争によつてくもられ、危機にたいするプロレタリアート自身の反応は、烈しさと強さにおいて、危機そのものよりはるかに遅れたのであつた。ルーズヴェルトが、選挙演説のさいフーパーを赤字財政のゆえに論難し、財政の均衡を公約していたように、ニューデイルは最初から明確にたてられたプログラムではな

に工場一年の賃貸料一ドルで賃貸され、戦後それは巨大独占企業におどろくべき価格で払下げられ、独占体の支配力をました。例えば、四〇年から四五年までのあいだに製鋼能力は一七%増大し、投資は約二五億ドルに達したが、それはスティール等に例外的に安価に払下げられ、同社の太平洋岸における生産能力は一七・三%から三九%に増加した、等。国家は、またNIRAの公正競争規約にもとづくカルテルの支持、巨大独占体にたいする差別税制、加速償却政策などによつて、支配的株主の力を強化した。

こうした国家官僚の直接、間接の援助によつて配当を自みてとする一般株主にたいして、支配権を握る大株主は会社自身の立場から一定の配当政策を遂行し、利潤を必ずしも全部配当にあてることなく、会社自身の財産に留保するのであるが、これは彼らに他人の所有にたいする、したがつてまた他人の労働にたいする一定の限界内での絶対的な支配力を与えるのである。

ところで、この支配の執行は、職能的経営者をつうじて行われるマネジメントといわれる膨大な管理機構、その内部における決定権の委任、これに伴う日毎にはげしくなる専門化、これらは産業組織における管理技術者層の役割を自だつものとし、経営者が絶対的権力を握るといふバーナムの経営者社会をほうふつとさせさせるが、この管理機構はその官僚化にもかかわらず、なお支配の構造からは独立しえていないのである。一九二九年かの有名なインデアナ・スタンダード石油会社における支配者ロックフェラーと経営者スティーアートの内争はその事実をしめす好例である。当時、同社は、議決権の一四・九%を保有して最大株主であつたJ・D・ロックフェ

ラーを首班とする支配団の下に運営されていたが、彼は取締役会長ステュアートを拒絶し、全取締役の支持のもとに、被僱人株主一万六千人の助力を求め、五〇％配当を言明し必死の防戦を試みたが、ロックフェラーはその巨大な富と社会的勢力と法律的知能を動員して全議決権株の五九％を獲得し、かくして争鬪劇は終結した。このように、巨大独占体の支配権はまだかの八大財閥に集中せしめられていたのである。この支配的株主と経営者の関係が、ロシアにおける共産党と経営者の関係に似たものがあることは、きわめて興味がある。

この支配的資本の利害のもとで個々の運営を委ねられた経営者層管理者層の官僚化は、工業における技術の革新と緊密に関連している。そして、大量生産技術の採用とともに労働者にとって上へ昇れる流動性実現のチャネルを実現していた職長のよってたつていた「技術的名人性」は機械にとって代られ、同時に生産面における大量生産方式は膨大な人事管理局を生み、人事管理権もかれの手からもぎとられ、組合と会社との労働協約がかつては彼が定めた雇用条件によって代る。かくして、労働者階級の官僚へののこされた門戸は高等教育を受けて技術者、あるいは下級経営者になるか「労働組合」をつうじて労働組合の位階序列を進むか、という以外にないのである。しかし、アメリカにおいては大学教育の経費は高く、普通のプロレタリアにはますます手がとどかないものとなっている。ミルスは新しい中産階級にとっては、社会的地位にたいする保険という意味では、教育がかつての親譲りの財産にとって代っており、ホワイ

トカラーのピラミッド型の社会では、教育が収入と栄達の源泉になつてゐる」と指摘しているが、生産手段が一切の個人に對立するよるな資本主義の高度の段階では当然の現象であり、ロシアにおいてもそれは官僚の地位をめぐる競争者の数を制限する重要な手段となつてゐるのである。しかも、作業の多くが、機械化に伴つてルーティン・ワーク化してくること、そして命ずるものと命ぜられるものがはつきりしてくることからプロレタリアートの労働は単調となり、その内容をますます失ふことになるので、彼らはますます仕事を手段と考えるようになり、生活の本当の意味は労働以外に求められ、ここから個人の力量による社会的経済的昇進に代つて、組合という組織をつうじての集団的な保障の確保、すなわち賃上げがプロレタリアートの日常意識において最大の関心事となる。しかし、映画「波止場」でなお記憶に新しいニューヨーク港湾労働組合におけるボス支配や、有名なトラック輸送組合のベックホフアの巨額の組合資金横領事件に現象しているように新しい形式の機会達成に満足すべきものがあればあるほど一般組合員は万事を指導者に任せつ放しになり、搾取社会の特徴である指導者と担い手のあいだにある厳密な区別がこの運動の内部に設定されるのである。

そして労働官僚組織は、他の行政官僚機構、産業管理機構とともに大ブルジョア階級の支配のもとにのみこまれてしまふ。かくして、労働官僚主義として、プロレタリア階級と支配的ブルジョア階級とにたいする自治的な未来を企てようとしたスタリニズムは、急速にその力を失なつてしまふのである。かくしてスタリニズム運動から脱落したブラウダーが次のようにいうのも不思議ではない。「ア

メリカは……低度の社会主義的イデオロギーと、高度の経済技術、特に生産の社会化とが混じた、生きたパラドックスなのである。

イデオロギーの領域から、世界の二つの巨人が年ごとにお互いに類似して行く傾向にある現実の領域にすむとき、資本主義の体系と社会主義の体系の鋭い対照は、ますますばんやりとしてしまふ」(Soci. ism in America, "International Communism" p. 90)

しかし、こうした現象は、たんに階級の後退を意味するのか？

しかし、生産の歴史はまた階級の歴史なのだ。生産の増大は個人の非人格化を強化し、任務の交換可能性を有利にすることによって、プロレタリアートをもつと多様な生産様式になれさせ、搾取と抑圧を廃止することによつてのみかちとられるような普遍性に敏感させる。「近代工業は機械・化学処置、その他の方法によつて、生産の技術的基礎とともに、労働者の機能および労働過程の社会的結合をたえず変革する。かくしてそれはまた、社会的分業をたえず変革し、一生産部門から他の生産部門へ多量の資本および労働者を間断なく移動させる。したがつて大工業の本性は、労働の転移、機能の流動、労働者の全面的な可動性を条件づける。……労働の転変がいまや圧倒的自然法則として——いたるところで障害にぶつかる——自然法則の盲目的、破壊作用をもつて——のみ行われるとすれば、大工業は自己の破局そのものによつて……一社会的細目機能の単なる担い手たる部分個人に置換えるに、その者にとっては種々の社会的諸機能が相交換する活動様式であるような全体的に発展せ

る、個人を以てすることを一の死活問題たらしめる(マルクス「資本論」)

しかも対極における直接物質的生産にたざさわらない種々の官僚階級の増大は、もし社会が、共同の生産手段をもつて労働し、個人的労働力を、意識して一の社会的労働力として支出する「自由な人間の協力体」に再組織された場合、現代の技術は、彼らにたいして、ささく、人間の諸能力の調和ある発展を可能ならしめるに十分な閑暇を与え、したがつて資本主義のこの最後の段階でつくりだされた墮落的な専門化を、ある程度まで消滅させることができることをしめしているのだといえよう。

そして石鹼会社の社長が空軍長官になつたり、大学教授が大使になつたりすることも、管理機能の専門化が絶対的なものではなく、経営者支配こそが企業経営の技術的見地からみてもつとも合理的に社会を運営するとか、社会の全成員あるいはすくなくともその大多数が自分で社会生活全体の統合に参加することはできないとかいうブルジョアのデマゴギーを事実をもつて反ばくしているのである。

さて、技術的教養がひろく行きわたり肉体的労働が最高の価値をもち、また思惟活動を労働によつて自然と接触させることによつてそれに本来の目標をあたえるのは人間性が公然と否認された生活状態につきおとされていくプロレタリアート自身の事業でなければならぬのであるが、官僚制社会におけるこの壮大な戦いの端緒をわれわれはハンガリア革命にみたのであった。そこにおいては、一人の

レーニンもなくトロツキもなく、プロレタリアートは官僚の抑圧に對抗して團結して闘つたのであった。このハンガリア革命の考察は、我々にとってまた別の重要な研究テーマをなすのであるが、官僚主義の存在とはあいれない新しい關係を闘争の中に設立しようとしたこの革命の経験が、今や戦いに敗れて戦場から去るうとしていたハンガリアプロレタリアートの内部にわすれえないものとしてこのこされた一つのエピソードを記して、かの革命の死者にたいする敬意を払おう。労働者の自己権力の組織形態の萌芽であった労働者評議会が革命中に行つた最初の措置は党細胞の解消であつたが、敗退しつづつあつた労働者たちは、工場内に「どのような党組織もゆるさない」という政府の確約をえようとつとめた。しかし、かのカダール氏は「工場内の党組織を廃止しよう」というのは明らかに反革命を目的としている」と言明した。「赤い」チュベルでは労働者の反対を無視して元の経営者が二人も返り咲いて、労働者の間には失望の気分がみなぎり、度重なる「反革命」呼ばわりをうけた彼らはお互いに皮肉まじりに「男爵」とか「伯爵」と呼びあつてゐた。共産党は、時に義勇軍の援助のもとに工場に党細胞を組織しようとした。ところで十二月末のハンガリア通信社の報道によると、当時ハンガリーの黨員は総数十万人、これにたいし人口は千万人弱であつた。黨員数が少なかつたのはブタペストの労働者地域でチュベル製鉄工場では僅か五百人、ブタペスト全市で、二万一千人であつた。労働者の黨員は解雇しないという申し入れをやつても黨員になるものは少なかつた。党細胞の勢力の回復は「家族の生活費をかせがねばならないし、また翌日働くためには警察に叩き起されぬ

落ちて眠る必要がある」労働者に力づくでおしつけられたものであつた。こうして、労働官僚組織との闘いは、階級社会の転覆そのものによつてはじめて完結されるということが事実をもつてしめされたのである。

【付記】

この「官僚制考察の一メモ」は、「ソ連論と官僚」(『論争』)とともに、次のような研究プランのための、部分的な覽書にすぎない。(1)労働者階級の革命性と革命組織についての、十月前における諸家の理論(マルクス、レーニン、ロザ、トロツキ)の検討。

(2)十月革命の敗北とロシア官僚制国家資本主義の形成。

(3)伝統的資本主義国家における国家独占資本主義の形成。

(4)現代世界における政治、経済、社会生活、及び共産主義革命。

(5)ハンガリア革命の教訓。

(6)現代における革命組織。

この「一メモ」は、(3)の部分的なレジュメにあたる。本稿では、閉鎖的なドグマ化された哲学を踏み絵にして、従来の労働官僚組織に代えるに他の新しい官僚組織を「創造する」ために「闘つて」いる「革マル」主義者への反駁が念頭にあつたので、官僚組織と闘う労働者階級の存在そのものにおける革命性を特に強調している。したがつて、私にとつて積極的な現代革命の組織論は、なお考究を要すべきものとして残されていることを付記して、「解党主義者」「アナキスト」などといったことばだけの批判はあらかじめおこ

革命運動と労働組合官僚 (一)

——警職法闘争の教訓——

山崎 衛

「総評」(九月十五日付機関紙)は「神武以来の大行動」「天下の耳目を吸収」などとセンセショナルな見出しをつけて、九月九日から四日間にはわたり開かれた。炭労第三十一回臨時大会の「政策転換闘争」を大々的に評価している。日本労働運動の危機的様相は、まさにこの「言葉」に象徴されているように、三池・高松・杵島の敗北から何一つ学ぶことなく、労働者を生産点で敵と対決させるのではなくて街頭に引きだし、市民に呼びかけたり、政府に懇願することによって、合理化の嵐から逃がれようとしている。こんなことでは、来年九月までに十一万人に上る首切りを予定し、合理化を遂行しつづつある資本の異状な決意を打破することができないだろうことは火を見るより明らかである。

「九月末から十月にかけての全国行進は沿道の各県評に受け入れ態勢整備を号令したが、これまた『松川、失業反対、平和大行進』などで市民の感激がうすれ、旅館のお世話だけでせいっぱい」とすげない返事。『労働運動が旅館あつせん業に転落したとはイカン干

万」と関係者一同いきまきながら、もりあげにチエをしぼっている」(十月三日号「エコノミスト」)と、この季節はずれの大行進にいまや商業紙からもヤユされるような状態こそ、「日本の労働組合主義」の具体化であろうか。

このムードを利用して「名声」を博そうとしている社会党江田書記長は、炭労大会において「石炭政策転換闘争は、社会党が臨時国会にむけて組織する予算獲得闘争の一環として行うものである」といみじくもみずからの企画をバクロし、骨の髄までくされはた議会主義者としての姿を現わした。これが、現代はやりの「構造改革」路線であろうか。

これらに対してもっとも激しく闘わなければならない自称「前衛」日本共産党は、十年一日のごとく、あいま変らず「二つの敵」なかならずアメリカ帝国主義のバクロと「社共の統一戦線」を繰り返す以外には何らの方針もちあわせていない。戦後一貫してプロレタリア運動を裏切り続けてきたこの党は、安保闘争の中ではや「党

員倍加」と「ハタ楯人」という同性生殖作用以外、全くの無能であることを広範にバカロされた。

安保闘争の敗北、池田内閣の出現、そして高度成長政策の前に跪いた「日本の労働組合主義」の定着は、日本労働運動の危機的状況を、我々の眼にまざまざとみせつけている。

この秋にあたり、この危機を誰が、如何にして打破するかというところは、我々反スタ左翼にとって重大なる課題であろう。

戦後労働運動史の解明は「六全協」を契機にして多くの筆者、グループによってなされてきた。しかしながら、真に世界革命の観点から日本革命を遂行する立場に立つものは一つもない。それ故に、反スタ左翼陣営においても、安保闘争の総括の中から、このことについて本格的な解明が急務となってきた。

戦後日本プロレタリアートは血にいろどられた幾つかの偉大な闘争を経験した。なかんずく、二・一スト、四九年の大敗北、破防法闘争、新潟闘争、警職法闘争、および安保、三池闘争は、汲めども儘きない、豊富な経験を与えるものだ。我々は国際労働運動の教訓を学ぶとともに、既存の評価にこだわらず、新たな立場からこれらを解明することが急務であると考える。このような重大な仕事は、当然同志的協力と相互の交流によってのみ解明されるものであろう。

私はいまここに、当時もつとも偉大な闘いであり、「勝利した」闘いだといわれた警職法闘争の問題を総括することにした。しかし警職法闘争などはくらべものにならない安保闘争の終った今日、警職法闘争の総括を自己完結的に総括してみても全く無意味である

彼等は小選挙区制の実施、防衛二法、教育三法の改正を始め、憲法改正を前面にたてながら労働者階級にたいする攻撃を強め、国内体制の強化を計る反面、日ソ国交回復、国連加盟の実現、重光渡米（安保改定打診）などを通じ、帝国主義的国威の高揚を自論んだ。かくして、帝国主義者の野心的プログラムの第一歩はふみだされ、まもなくこの政策のいっそう強力な推進に極端となった鳩山は退陣し、岸内閣が誕生した。この岸内閣の登場と日米共同声明（五七・六）にもとづく「日米新時代」は彼らのプログラムの強力な推進以外の何ものでもなかった。

一方、当時の労働者階級の状況をそれなりに反映していた社会党と共産党は、七月には日共が六全協で一応の統一を回復し、十月には左右の社会党が合同した。このように日本資本主義の新しい発展段階を反映した「保守」「革新」の体制が一応整ったのである。

五五年以来の日本資本主義の熱狂的ブームは労働運動の分野においても新しい階級対立を生みださずにはおかなかった。国鉄・通信・石炭・鉄鋼・電力・造船・電機・化学などの重要産業において、これまでとは比較にならない膨大な資金がつきこまれて「合理化〇カ年計画」が作成され、設備更新が大々的に行われた。生産性向上運動と、それにもとづく近代的労務管理政策がもちこまれ、公労協では、職務給への切換えが行われてきた。

このような状況の中で、これまで戦術左翼ではあったが、民族的視点しかもちえなかつた高野総評事務局局長は、大田・岩井ラインにとつて変られた。大田・岩井は明らかに右からの批判者であり、アベック闘争ではあったものの、民間六単産の統一賃金闘争の一定の

う。したがって、警職法闘争の総括をここで試みるのは、あくまで安保闘争の教訓を本格的に解明するための前提として、その前に闘われた警職法闘争の総括を新たな角度から明らかにする必要があるという理由からである。

警職法改正案上提の背景

一九五五年は日本の政治経済に一時期を画する年であった。戦争によって荒廃した日本資本主義は、二・一ストの政治的危機を切抜け、四七年にはじまる傾斜生産方式、ドッチラインにたすけられ、朝鮮戦争ブームにいたる猛烈な資本蓄積の強行によって帝国主義の経済的基礎を回復強化した。朝鮮ブームによって巨額の利潤を獲得し、外貨を蓄積した独占体は、財政投融资や日銀信用に支持されながら五二―三年にかけて大規模な設備投資にのりだし、外国技術の導入をおしすすめ、五三年には工業総生産は戦前を六〇%上回るまでになった。かくて五四年下期から始まった世界資本主義経済の新たな昂揚の中で、日本資本主義は「神武景気」といわれる空前のブームを経験した。

このような日本資本主義経済の異状強化拡大は、国内における政治的社会的諸勢力の再編成をもたらし、五四年十二月、それまで六年間政権の座にあった吉田内閣は崩壊し、第一次鳩山内閣が成立した。この内閣の手によってブルジョアジーはこれまで長年の宿願であった保守合同を成しとげ、内外にたいする支配体制の強化を高らかに宣言した。

成功をバッキに産業別統一闘争を主張し、高野の「地域人民闘争」の現代版にしかすぎない「ぐるみ闘争」や「平和経済プラン」を打ち破って勝利した。

五六年春、これまでバラバラであった官公労と民間主要単産の殆んどが一斉に賃金要求をだし、統一闘争に突入して、今日いわれているような意味での「春闘」が始めて闘われた。

四九年の大敗北以後、五二年の「ニワトリからアヒルへ」の転換はあったが、まだ本格的な大衝突は起らなかった。ところが、五六・七年と続く好景気の中で、積極的な賃金闘争がくりかえされ、なかでも五七年の春には、それが爆発的盛り上りをみせて三月の春闘第三波から七月の新潟闘争まで、文字通り血みどろの死闘がくりかえされた。すなわち、春闘第三波において国鉄労働者は四九年の大敗北以来始めて、東海道、東北を中心にストライキを敢行し、炭労七二時間ストとあわせてスケジュール闘争の棒を打破した。続く三月二三日の全国一斉打倒ストによってそれは頂点に達した。当局が年度末業績手当を給料袋にまでつめておきながらその支給を中止したことに憤慨した労働者は、下部から続々とスト・サボに突入し列車、電車はいたるところで運転を中止して大混乱におちいった。これにあわてた当局は直ちに支給を声明したが、国労がこれ程の規模をもって全国的にストライキを行ったのは、戦後においてもこれが最初であった。

下部労働者の盛り上りに色をなしたブルジョアジーは、この年二月に成立した岸内閣の手によって、血にうえた復讐を行った。五月、六月、七月にかけて処分反対闘争がくりかえされ、なかでも国鉄労

働者の最左翼の推進力になっていた新潟地本の二名に解雇が発令された時には、ついに歴史的な大斗争へと発展した。一週間にわたってマヒ状態が続き、関東、関西、西部地評が闘争支援を決定、まさに局地的な激突が、全国的な闘争に発展させなければならなかった。その時、逆に国鉄中闘は中止指令を発した。新潟労働者は正面で当局および官憲と闘っている時に、背後から味方であるべき中闘の手によって、手足をしばられ敵になぐられほうだいなぐられるという悲惨な状況を味わいながら鉾を納めさせられた。

したがって国労や総評民同の犯罪的裏切りはいうまでもないが、このときに最もバックアップしなければならぬはずの日共は、この間（九月十六日）なんらの方針もださず、中止指令がでた翌日の十七日付「アカハタ」主張でやつと問題をとりあげた。「問題は労働者階級の前衛、わが党がこの力量をいかに成長させ、自覚させ、結束させ、発揮させるかにかかっている」と、わけのわかったようなわからぬようなものをのせて平然としていた。事実上労働部長の鈴木市蔵を始め幹部会はこの闘いを評価できず、「はね上り」と考え、いかに「収拾」するかということのみに窮々としていたのであった。そのことは翌年の日共全国活動者会議や七回大会で徹底的にバクロされた。

新潟闘争の敗北以後、国鉄は屈辱的な藤林幹旋案を呑み、総評は「長期低姿勢」三十六計逃げるにしかず」とばかり総退却を開始した。かくして、数年間にわたって蓄積された労働者の力は「最初の衝突」でまたもや敗北を喫し、労働運動の転換は尻りつばみで終わってしまったのであった。

世界的にも仏・ド・ゴールの進出と仏プロレタリアートの敗北、米英によるレバノン、ヨルダンへの進駐と中近東の緊迫、東西両陣営による核実験の再開、台湾海峡をめぐる緊迫した諸情勢を背景としながら、警職法闘争は両階級のしびきを削る闘いへ急速に発展していったのである。

警職法闘争と「奇妙な勝利」

以上の点からわかるように、警職法闘争は、日本の政治過程と労働運動に大きな影響を与え、この闘争から無限の教訓を引きださせるようなものだった。たしかに、支配階級のねらっていた政治的プログラムには重大な打撃を与え、彼らをして一時迂回戦術をとらざるをえなくさせたように、その限りにおいては警職法闘争は勝利を獲ちえたことは事実である。しかしその内容を深く分析してみると、きわめて「奇妙な勝利」であり、最後には、岸、鈴木会談によって審議未了になったところで、あれ程盛り上ったはずの闘いがたちまち尻りつばみになって、岸内閣の危機をすくったばかりか、「国会正常化」のもとに会期延長を認め、議会主義と民主主義のムードに充満されてしまうようなものだった。この「奇妙な勝利」の内容についてこそ、安保闘争を経過し、池田内閣の高度成長政策が実施され、労働運動の右傾化が進んでいる今日、あらためて、革命的視点より分析しなおさなければならぬものであるはずだ。

国鉄労組を打ち取ったブルジョアジーは、その年の秋、鉄道を零回答で押し切り、戦後の日本民主化に大きな役割を果たしてきた日教組を庄殺する目的で全面的に攻撃をかけてきた。

上部の敗北の空気にあって、五七年暮から五八年春、夏、秋にかけて、日本労働運動を支えて、情勢を有利に切り開くべく闘いを進めたのは、日教組に結集した教育労働者であった。愛媛闘争によって火を吹いた闘いは、東京・和歌山・高知の闘いへと引きつがれ、労働運動を混乱から立ち直らせる機会を迎えながらも、これを生産点を中心とした全国の労働者の闘いへと発展させる指導がいずれからも行われず、闘いは個々分散的に押しつぶされてしまった。かくして、世界でも稀にみる教育労働者の英雄的闘いであったにもかかわらず、指導権が平垣派から条件闘争を主張する宮之原派に移ることによって、さしもの勤評闘争も「収拾」の方向へとむかってしまったのである。

折しも五七年下期より始まった景気後退の中で、五八年は合理化攻勢も一層激しく、王子、小西六、鐘紡、日産、日飛、石原、共同製本などで争議がくりかえされ、階級的対立は増々激化していった。

まさにかかる時、「警察官職務執行法改正案」は、突如として、しかし、あらかじめブルジョアジーの緻密なプログラムの一貫として提出された。国鉄、日教組をたたきつぶした敵は、長期低姿勢で低迷を続けている労働者階級に追撃を加え、一挙に労働運動を庄殺して国内の支配体制を強化するために、戦前の治安警察法の再現を思わせる内容をもつ攻撃をかけてきた。さらにこの支配体制の強化の上に来年にひかえている安保条約改定をスムーズに行ない、帝園

当時の総括について、代表的な例を二つあげることができる。

その一つは、「理論戦線」（社学同理論機関誌）二号にのった「偉大な闘争と奇妙な勝利」（森茂）や「共産主義」（共産同理論機関誌）一号の「春闘における革命的労働者の任務」（坂田静則）あるいは「港地区党報」四九号の「第四回地区党会議の成果を守ろう」の中の「警職法闘争の教訓」の項（私自身この時の地区委員長であった）などに代表的に現れているところの、当時の全学連や共産同あるいは日共内左翼の立場である。これらは、警職法闘争を偉大な闘争であったと評価しつつも、なぜ警職法を粉砕するだけではなく、法案をだした当の岸内閣そのものの打倒にまで闘争が進みえなかったかという問題を提示した。そして当時の前衛の指導方針の誤まりを徹底的にバクロし、かかる激動期における指導方針の決定的役割について掘り下げていったのである。

これと全く対照的なもう一つの立場は、日共中央の立場であった。彼らは殆んど無条件的に警職法闘争の勝利をたたえ、ただ一般的に「歴史的な大闘争の成果と限界」を説明してみせるだけであった。したがって、闘争の限界を産んだ弱点として「アメリカにたいする闘争目標が不十分なこと」、「社共の共闘体制が十分でなかったこと」、「労働組合にたいする党の影響力が弱いこと」などをあげ、そこから「党の政策は基本的に正しかった」にもかかわらず「政策を具体化することが弱かった」、「組織活動の弱さ」、「党員の不足」などに問題を解消し、自己の指導方針の誤りをまったく棚上げにしてしまう見解にすぎなかった。

この両者を比較するならば、どちらが前衛的な立場として正しい

かということはいきわめて明瞭である。このことは安保闘争の中でさらに鮮明な形で現われたし、最後まで日和見主義者と革命的な潮流とで相い争われた問題であったことは、まだ記憶に新しいところである。したがって私自身、今日においても基本的に前者の立場をとり、その上に立って総括を試みるつもりである。それにもかかわらず、なぜ安保闘争の中できわめて重要な役割を果たした共産党がその最後まで、全体を結集する「総括」をなしえずに、みじめな分解を上げなければならなかったかということに大きな問題があると考えられよう。もちろん共産党の崩壊を安保闘争の総括のおこないえなかったことだけに見ることは正しくないが、みずから中心的に闘った共産党がいまだに明確な「政治総括」を明らかにしえないことは、日本革命運動にとつてもきわめて不幸な事態だといわざるをえない。こうした点に立ってもう一度警職法闘争の総括を再検討してみた場合、そこには当時、きわめて一面的な評価と大きな弱点をばらんでいることを認めざるをえないであろう。

ここでは問題を整理するために、相互に関係はあるが、二つの側面から検討をおこないたいと思う。一つはいうまでもなく、あの流動局面における既成前衛党の指導方針の内容について、もう一つはこれときわめて関係は深い、あのような局面におけるプロレタリアートの客観的な運動過程そのものと前衛との関係について。

「革命の時期には、幾百万幾千万の人々が、普通の、ねむったような生活の一年間にまなぶよりも多くのことがらを、一週間のうちにまなぶものである。なぜなら、全人民の生活が急激に転換するさいには、人民のどの階級がどういう目標を追求しているか、どのよう

な力をもっているか、またどのような手段によって行動するのが、とくにはつきりとわかるからである。」(レーニン「革命の教訓」一九一七年九月)

いまここにレーニンの言葉を引用したのはけっして警職法闘争が革命の時期の闘争であったというつもりからではない。我々の関心は、大なり小なり階級闘争の激動期において、これに似たようなことが起こるといふ意味においてである。したがって、かかる時期にあつては革命党の指導方針が徹底的に試されるし、前衛の指導方針が決定的な役割を果たすことになる。もしも「四月テーゼ」をめぐる論争の時、「古参ポリシエヴィキ」の立場が勝利したならば、ロシア革命はまた別の道をあゆんだことは火を見るより明らかである

闘争の展開と日共の方針

十月八日、政府は驚ろくほどのすばやきで、警察官職務執行法「改正」案を臨時国会に提出した。新聞がこの重要法案についてはじめて報導したのは、十月四日、国民にとっては全く寝耳に水のニュースだった!

「最近これほど極秘裏にことがはこばれた問題はない。自民党内部ですら、この改正案を提出されるまで知らないものがいた。社会党や言論機関も完全にだしぬかれた。機密を要する外交問題とか、ないしは小さい問題ならそれでもよいだろうが、国民の自由や人権についての法案が、こんなに極秘裏に準備されるというのは国民は政府与党の意図を疑わないではいられない」(毎日社説、一

〇、一八、)「政府はどうしてこんなに矢つき早やに、ドカンドカんと火花を打上げるのであるか。どうしてそんなに急ぐ事情があるのだろうか」(矢内原忠雄「政治と教育」朝日一〇、二三)

「じつさい、勤務評定問題をはじめとして、保守政党はいわば、最も「改革」ずきの政党となつて、占領政策是正というスローガンのもとに、憲法「改正」を最終目標として、平地に波瀾をまきおこしながら猪突猛進しつつある。おそらく何か「急ぐ事情」があるにちがいない」(「世界」十二月号日高六郎)

当時の事情を彼らはこのように述べているが恐らく多くの国民も、このような印象を誰もがいだいたであろう。しかも、かつて天皇制のもとでもっとも苦しんだ「戦前派の老闘士」をして、治安警察法の再現だ!と叫ばせ、いち早くこの内容のバクノのために彼らが立ち上ったことをみれば、この内容が如何に恐るべきものであつたかはいまさら多言を要すまい。

これにたいする労働者階級の反応も、予想以上に早く、破防法では二ヶ月かかった準備がわずか二週間で整い、勤評闘争では理解しえなかつた広汎な層が反対運動に参加した。

九日に大阪地評常任幹事会は抗議ストを決議、東京地評は十日「警職法粉砕」「岸内閣打倒」「ゼネ・スト」で闘うことを宣言し、非常事態を発した。なかでもこの闘争の決定的推進力になつたのは、破防法闘争でもストライキで闘い、戦後たえず日本労働運動の中心になつてきた炭労が、十日にゼネストを決定したことである。低姿勢で困迷していた労働者階級に対して、それは計りしれない勇氣

を与えた。全国各地で抗議ストの決議が決められてゆくなかで、

十日総評常幹は臨時大会を開催することを決め、十一日開かれた四三単産書記長会議において警職法粉砕のためゼネストで闘うことを決定した。その後中立労連も総評と統一行動を取ることを決定した。全労・新産別・総同盟もそれぞれ反対闘争を決定した。全学連はいち早く国会にたいする大衆行動を組織した。そして十八、十九日の社会党中央委員会は岸内閣打倒の闘争宣言を発した。

このような事態の推移の中で、自称「前衛」の日共が、徹頭徹尾プロレタリア運動の妨害者、裏切者としての役割を果しておおせたことは、いかに強調してもいい過ぎではないのである。

警職法改正案の上提と同時に、各労働組合は「警職法粉砕」「岸内閣打倒」「ゼネストで闘え」などの要求を掲げて闘争を開始していった。労働者大衆の圧力によって社会党ですら十一月四日にいたるまでは、これらの要求の下に活動していたほどであった。

ところが、日共だけは、最後まで「岸内閣打倒」を掲げることに反対し、やつと二十二日付「アカハタ」主張で「岸内閣の反動政策を暴露し、岸内閣を打倒し、平和・独立・民主・繁栄に向いよう道をしめさなければならぬ」と、おすおすと前進をはじめたのである。二十四日の総合スローガンで始めて「戦争、売国、反動の元凶、岸内閣打倒のために闘おう」と何の解釈もなく掲げたのである。十日と十五日に日共の全都地区委員長会議が開かれた時、私は当時港地区委員長資格で出席し、再三に亘り「岸内閣打倒」を打ちだすべきであると主張したところ、幹部会員であり都委員長であった春日正一は、「岸内閣打倒をだすと運動の中がせまくなる。今必要なら

ことは警職法のバクロだ」「岸内閣打倒はもつと皆なものになつてからだすべきだ」とこれを否定した。それならば前衛党の役割は一体なにか。この方針の与えた犯罪的役割はその後十一・五以降の政府危機の中で一層鮮明になったが、それについては後に触れることにしよう。

ただそれだけではなかった。日共は、なるほど警職法のバクロには力を入れたがいかにしてこれを粉砕するかという方針は明確にしていなかった。十五日の「アカハタ」主張にあるように、「社共両党の共闘こそ其の悪法粉砕の道」と題して「統一、なによりも統一、これこそ警職法と岸内閣の反動的な野望を粉砕できる唯一の道である。」(傍点引用者)と結んだ。十三日に結成された警職法反対国民会議が、日共や全学連などを排除し、右への統一を行ったことについて我々は激しい憤りを感じる。このような事態を打破しなければならぬと考える。しかし、創価学会ではないのだから、共産党を加えれば警職法が粉砕できるものもあるまい。現実には排除されてしまったものを、ただお題目をと覚えてただけで統一しようものでもなかった。この時にもつとも重要であったことは、いかにして粉砕するかという政治目標と行動方針を明らかにし、労働者階級に直接訴えることであろう。現実の運動を展開してゆく中で社会党のセクトを打ち破り、統一を闘いとならなければならなかった。労組ではすでに岸打倒、ゼネストで闘えといっているのに「前衛党」はゼネスト方針一つ訴えようとはしなかったのである。そして、二十四日総評臨時大会が開かれ、闘争体制の確立に向って最後の仕上げが行われた時期になって、やっと「ゼネストを『支持する』」(呼び

十一・五前後

十一・五ゼネストを前に情勢は緊迫してきた。新潟闘争後長期低姿勢にあった労共機労と共に列車ダイヤを停める闘いに進み、炭労の二十四時間ストを始め二十八日をはるかに越える規模をもった闘いが、爆発することが確実になった。労働運動は再び「息をふまかえてくる」し、中間層は政府を離れてしまおう。七日の臨時国会の終るまでに改正案は通りそうにもない。岸内閣は次第に窮地に陥入るとともに、四日政府は自民党だけの一方的な会期延長を決めた。ところが、十一・五ゼネストはこのような自民党の暴挙にたいして一網のいきどおりを爆発させることとなり、破防法闘争を上まわる歴史的な大闘争がここに展開されていったのであった。

長い間低姿勢論の下にあった労働者階級はいまや闘うことによつて自信をとりもどした。中間層や与論は自民党の暴力にたいし、一斉に非難をあげた。自民党は五、六、七日の会期々間中殆んどどうつ手を失った。岸は七日、鈴木社会党委員長に会談を申し入れたが拒否され、同日、内閣記者団との会見で、「警職法は絶対に強行しない」、「今国会成立にこだわらない」と宣明することを余儀なくされた。いまや問題の焦点は警職法そのものより、「岸内閣を守るかどうかに移った」。五日を起点にして政府危機が生れた。力関係は変った。いまこそ労働者階級は「岸内閣打倒」へむかって追撃を開始する時である。かくして、まさに、五、六、七日の三日間は警職法斗争の最大の山場となつたのであった。

かけるのではなく)態度を表明した。このことの責任が追及されると「組合で決定したゼネスト方針を空決議に終らせないために党としては拠点を設定していち早く工作に当った」といって問題の焦点をずらしてしまつたのであった。

さらに最初の激突が行われる二十八日の直前になって、「岸政府と自民党は、警職法改正を煙幕にしながら、着々と安保条約定交渉をすすめていることを見落してはならない」(二十三日付アカハタ主張)「国民の諸闘争を警職法改正反対一本にしほり、国民の闘争を一時的カンパニア運動に終らせようとする傾向とたたかわなければならぬ。」(二十五日付アカハタ主張)とのべた。労働者階級が、あの忌むべき警職法粉砕のために立ち上り、血のにじむ最初の激突を行おうとしている。まさにその直前に背後から、「警職法反対一本にしほるな」といって戦力を分散させようとしたこと、これこそ階級的裏切りでなくてはなうか。

続いて四〇〇万労働者がとにかく全国的な統一行動を行い、衆院での緊迫した状況を迎え、五日のゼネストへむかって進んでいる時、日共中央はまたしても三十日付アカハタ主張で「安保条約撤廃は当面の斗争の重要な環」とし、「国際平和行動デーの十一月一日に行われる基地へむけての行進は大きな意義をもっている」として労働者階級の闘争を、アメリカ帝国主義にたいする独立のための闘争にすり代えようと画策した。これが、日共のお得意のやり方だというものである。

こういう時こそ、最初に引用したレーニンの言葉をもう一度思い起さねばならぬ。刻一刻をあらそう重要な時であり、革命党の指導力の決定的役割がうんぬんされる時である。事實は、総評も社会党も日共もまったくの無能であり、裏切り行為、闘争放棄すらやつてのけたのだった。

総評は六日、七日の国会動員を議員がいけないということを理由にして中止してしまつた。さらに六日開かれた緊急幹事会では、このような情勢の変化を見抜けず、ただ「会期延長」という「新しい事態」だけに見惑わされて、当面のスローガンの中心を「警職法改正反対、ただちに国会を解散して民意を問え」というところにするかえ、なんと、次の闘争の日時設定を二十六日のゼネストとばかり引き延ばしてしまい、それまでは十五日に集会を開くという、実際上は何もしない方針を決めてしまつたのであった。

日共の方針はこれに輪をかけたような間抜けさかげんだつた。十一・五を目前にひかえた三日、中央委員会は「国会の会期延長に反対し、議会の解散を要求し、岸内閣打倒の声をひびかせましよう」というふゆけたスローガンを掲げたのである。絶対にごまかされてはならない。議会の解散を要求し、岸内閣打倒の声をひびかせろのだ！労働者階級が自己の最大の武器を使つて警職法を粉砕し、岸打倒へむかつて激突しようとしている時、完全に議会主義的なスローガンまさしく、選挙党のスローガンを真先に「前衛党が打だしたのだ。このようなわけだから、当然五日以後に現われた階級間の変化がわからず、「延長はみとめない。国会をすぐ解散せよ」という要求を前面にだしたのである。しかも総評が明白に闘争を放棄してしまつ

た時に、これにたいする批判をおこなうこともなく、八日付「アカハタ」主張で「すべての民主勢力の団結こそ勝利の保証である」などと発表した。そこでは十一・五闘争の意義と今後の展望については殆んどふれられず、始めから終りまで社共を中心とした団結論だけがあったのであり、「警職法改正反対や安保条約改定をめぐる闘争において、どうしても我が国民が勝利しなければならぬが、その保証は、まったくすべての愛国民主勢力の結集にかかっている」とだけ結論されていた。さらに驚くべきことには、同日付「アカハタ」二面一杯に「きたるべき選挙闘争のために」と題した翌年四、五月に行われる自治体と参院選の方針を発表したのである。警職法を粉砕し「岸を打倒する闘争によって全体の情勢を変えてゆくというのではなく、それとは全く切り離された形で、全党に選挙準備を呼びかけるといふ、全くの議会主義政党的転落を如実にそれは示すものであった。この間、わずかに全学連が七日に国会へデモをかけただけであった。

かくて、せつかくむかえた政府危機も、指導部から何らの追撃方針がだされぬまま、八日の変則国会へと移行してしまい、全体として十二日に開かれる社会党の臨時大会待ちという状態になっていく。

自民党は何よりも社会党の歩みよりに期待をかけ、社会党大会前日に開かれた経団連理事会は「国会正常化のために政府は譲歩せよ」といふ見解を発表、一斉に社会党を「国会正常化」のペースにまきこむ策動が開始されていったのである。

社会党大会は、その時までいかなる大衆行動もないという状態の中で、小ブル的動搖を現わし、当初の「議員総辞職」の掛声もど

ター以後、この明確な政治目標が逆に背後におしやられ、「会期延長反対」「国会解散」という目標が前面に押し込まれてきている。しかも、このことが政治指導部より打ち込まれるや、中間層はもとより労働者階級の中にさえ、岸の暴挙にたいする怒りを基礎にして、このスローガンがうまうま入りこんでしまったのであった。すなわち、ここにおいて完全に政治目標はすりかえられてしまった。このことは、労働者階級が実力行使を背景にして中間層をひきつけつつ、敵を打倒してゆく方向から、議会主義と選挙によって敵と闘うという小ブル運動に転化させられたことを意味している。ここにこそ自民党や政府による「国会を正常化」の罠にまんまとはまりこんでゆくすきが生れたのだ。新聞や「与論」も一斉にこの方向に沿って論陣をはった。

当時、我々はたしかに議会主義の傾向について批判したばかりか、「オイコラ警官反対」では限界があったことを指摘した。しかし闘いが昂揚し新しい局面を切り開いたその時逆に「革命的闘争」の方向が「民主主義一般を擁護する闘争」へとすりかえられたこともつ内容の深刻さについて、果してどれ程深く検討したであろうか。同時に、何故労働者階級の中でさえ、指導部の間違った方針にたいし、これを乗りこえる力量が発揮されなかったのかという点の意識の内容や日本労働運動の現状についての十分な分析にしておこなわれることがなかったであろう。

そのために、安保闘争の時期に一層鮮明な形で現れた五・一九以後の新しい情勢の中で、一面的な判断しかできなかった弱さが現われたのであったし、方針の混乱をまねく原因ともなって長く尾を引

えやら、右派に押しまくられて逆に、「事態收拾のため自民党との話し合いの権利」を中執に一任してしまった。これによって十四日より自社幹部会談が始まり、二十二日に岸・鈴木会談によって警職法の審議終了と引きかえに、岸政府をすくったばかりか国会の会期延長を認めてしまった。

自社の話し合いが始まる前後を期し、敵はもつとも闘った国鉄・日教組・全農林・全学連などにたいする攻撃をかけ、大量の処分と官憲の手による弾圧を行った。この間、十五日の集会や二十二日の集会、デモが行われたが、全体として運動の波は急速にひいていった。岸・鈴木会談にたいして多くの憤激の声はあったが、ついに行動には組織されることがなかった。ちょうど、この日、一二七日にわたって流血の大闘争を続けた王子闘争に斡旋案が示され、ここでも闘いが終わった。

闘いの教訓は何か

我々が、これまでの総括において決定的に欠けていると考える点は次の二つのことである。

十一・五を境にして新しい情勢が切り開かれたことはすでに触れたが、このような労働者階級の昂揚にもかかわらず、これを境に政治目標の内容は逆に大巾に後退したこと、これを見落してはならないであろう。それまでは「警職法粉砕」「岸内閣打倒」「ゼネストで」ということで少なくとも労働者階級としてはきわめて正当な政治目標のもとに進んできた。ところが、十一・四の岸によるクーデ

いたのである。このことの分析については、いまここでおこなうよりも、それがもつとも明確な形で現れた安保闘争の総括の中で行った方が、一層明らかになると思われるので次の機会にゆずるとして、ただここでは、この重要な点について、当時明らかにされることが始んどなかったという点だけを指摘しておこう。

第二には、次のようなことが指摘されねばならない。

「指導的団体がなかったら、大衆のエネルギーは、ピストン筒につめられない蒸気のように消散してしまう。だが、それにもかかわらず、ものを動かす原動力となるのは、ピストンでもピストン筒でもなくて、蒸気なのである。」(トロツキー、ロシア革命史序文)

いかなる闘争を分析する際にも、その闘争の過程にくみこまれてゆくプロレタリアート全体の客観的政治過程を分析することなくしては、真の総括はありえないにちがいない。激動期における指導部の指導方針のもつ役割は決定的に重要性をもつとしても、プロレタリアート全体の動向と切り離してそれを論ずるならば、主観主義的にならざるをえないのである。もちろんこのことは、労働組合の上部の決議だけを検討したり、まして、現在の日共や社会民主主義者特有の思考方法であるところのプロレタリアートの後れた部分を拡大してみせることによって、自己の日和見性を合理化することとは全く無縁である。

二十八日の統一行動には四百万の労働者が参加し、五日の統一行動には組織された労働者の殆んどを含む四百五十万の労働者が参加したといわれている。だが、この内容をもつと厳密に分析するならば、それはあくまでなんらかの形で参加であり、全体としてみる

ならば、そこには激しい程度の差のあることを認めなければならぬであろう。この内容の分析なしに、ただ数だけで有頂点になるなどは全くのナンセンスに等しい。

十一・五ゼネストを、あのように政治的に盛り上げたのはいうまでもなく、国鉄労働者の三時間にわたる運輸部門を中心とした職場大会であった。これが軸になって炭労、全鉱、全金、化同、全港湾（九州のみ）などの二十四時間ストが結合し、これらの地域では特に激しい闘争になった。例えば、福岡、熊本地域では、門司、鳥栖、東小倉、吉塚、折尾、熊本などの各駅において全員参加の職場大会が実施され、列車は三時間にわたり、一本も動かなかった。一方炭労七十八支部、九万五千人が二十四時間ストに入り、これらの各駅へ仕事着で支援にでかけ、警官や公安官の介入を阻止して、国鉄労働者との交流を計った。また、東京南部の工業地帯、全国金属労組の拠点地域である大田区では、東京計器、山武計器、日本起重機、渡辺製鋼、日本教具、大和機器、大谷重工、土谷製作、蒲田鋳造などが二十四時間スト、北辰電機、日本自動車では十二時間ストを行い、品川や東京駅の国鉄へ支援に行った。

これらとやらんで、全通では全通労組結成以来始めて、東京の拠点にえらばれた貯金局、保険局、三田台の三支部三千名の労働者が、時間中二時間の完全職場放棄を行った。この他、全国でも百カ所が職場大会を行ったばかりか、さらにスト権はいよいよおよばず団交権すら奪われている国家公務員関係の労働者が一部を除いて午前中の職場大会を行った。特にその中心になった全農林にたいする敵の攻撃は激しかったが、これをはねのけ、誰一人として庁内に入らず闘

を正確に判断するには余りにも資料が不充分なので速断することはできないであろう。

このような事実をあげたのは、決して十一・五闘争の偉大な役割を否定する意図からではない。それどころか、このような状況にもかかわらず、十一・五闘争によって切り開かれた新しい局面において、なおさらこれらの労働者をより一層結集し、敵に追撃をかけたかった既成指導部の無能さを追及されるべきなのであり、反対に、これらの事実から後遅れた面をとらえて闘いを收拾させる理由にするのは本末転倒といわねばならないのだ。

したがって、我々が以上の事実と言及するのはあのような偉大な昂揚にもかかわらず、岸・鈴木会談の裏切りによって急速に闘いが終熄させられてしまったその背景をなしているものをエグリだし、そこにメスを入れることなくしては、今後においても幾回となく指導部の裏切りを許す結果となるだろうからである。このことは警職法闘争を数倍上廻った安保闘争において、同じように幾回となくくりかえされた裏切りを完全に乗り越えられなかったことの中にも現れている。

労働運動における官僚支配をいかに打破するか

既成指導部の裏切りの中から、これに代る真の前衛政党を結成しなければならぬことを痛感したことによって、この直後に共産主義者同盟が結成された。（もちろん、同盟の結成の契機はもっと深いところがあり、日共やスターリニズムの超克の中から考えられな

い成功させた。日教組の闘いについてはいうまでもないであろう。

このように官公労および先きにあげた民間労組は、文字通り警職法闘争を歴史的な大闘争とする推進力となったが、全労系の全セン、海員、自動車、電力はもとより、総評、中立系の合化、鉄鋼、私鉄、造船、電機の大経営では、残念ながら余り闘いが行われなかった。

例えば、電機労連では最低十五分以内の時間内職場大会が指令されはしたものの、日立、三菱、日電、などを始めとする大経営では実際には、右翼幹部のためにいかなる行動もおこなわれなかったのである。実に、四五〇万労働者の統一行動という内容にはこのようなものがそこに含まれていることを忘れてはならない。

また、八幡製鉄では十一月十日前後にスト権を確立し、第五次統一行動に参加することを決めたものの、第五次の統一行動はすでに闘いが終わった後だったのでおこなわれなかった。五日には、全支部で休憩時間内一時間の抗議集会をひらくことになってはいたが、実際どの程度までやられたかつまびらかでない。

鶴鉄ではスト権を確立してはいたが、五日は休憩時間の抗議集会で終わった。私鉄では始発から六時までという無効な闘いしか行われなかったし、近鉄など幾つかの主要私鉄では、これすらも行われなかったのである。その他多くのところで、一時間の時限ストや時間内くいとみの職場集会という形態が多かった。

敵にたいする「圧力」という意味で「ゼネスト」と呼号することはありうるとしても、このような闘いが秘密な意味で「ゼネスト」といえないことはいうまでもなからう。ましてや全労系の職場でどれだけ本心に抗議集会、ストがやられたかは疑問であるし、これら

ければならないが、その直接の契機に警職法闘争があったことも事実である。（詳細は「日本における反スターリン主義運動と共産主義者同盟——その組織論的総括——」（佐久間元を参照のこと。）このことは全く正しいし、日和見主義者の方針にたいし、革命的方針を対置することも全く必要である。しかし同盟ができたからといってそのことがそく、労働者階級を掌握し、革命的指導方針のもとに結集できるということは別である。

このことは安保闘争の過程で身にしみて感じたはずである。この意味においては、前述したことは以然として未解決であり、我々がどうしても明らかにしなければならぬ課題ともなっている。

このことから、日共のように自己の指導上の誤りを隠蔽するため「大経営に巨大な党が建設されなければならない」ということだけを教訓として学ぶのでは余りにも不毛であろう。もちろん「大経営に、それを指導するだけの巨大な党を建設すること」は前衛政党の大きな課題ではあるし、その限りにおいて誤りではない。しかし、それでは当時でさえ百数十名からの党員がいるという鋼管川鉄で何故、労働組合さえ把握できないかという事実の解明には役立たないし、さらに、神戸造船を始め、当時でさえ巨大な党が建設されているいくつかの経営において、何故警職法闘争の時に闘えなかったのかという疑問に答えることはできない。尤も「経営労働者の半数以上が党員でなかったから」といいたいのならまた話は別である。いづれにしても、日共のばあい、中央の指導方針の決定的誤謬ということを抜きにして、細胞や個々の労働者の指導をうんぬんすることはできないのであるが、このような発想法は「新しい前衛」をめざ

したはずの共産主義者同盟のなかにも、分派闘争の局面で生れてきた。

それはこれまでの共産主義者同盟が、学生運動を中心とした「運動主義者」に転落していた誤まりから、「プロレタリア党を如何なる内容でどう建設してゆくべきか」ということが抜け落ちていたこと、その指摘であり、それ事体としては全く正しかった。ところがそのことから直線的に「革命的戦旗派」に結集し、後に革共全国委に吸収された諸君のように「政治的経済的危機がこようと、プロレタリアートの中に強大な党が建設されていなければ革命は敗北するのだ」(「戦旗」、青山論文参照)と、単純にいける時、そこには階級闘争の生き生きとした、ダイナミックな把握がぬけおち、不毛な理論が展開されていく。そのことから「安保も三池も、始めから敗ける闘いであり、このことはわかりきっていることだ」(「問題はここから如何に革命的分子をつかみだすかが必要なのだ」ということになって、すべての闘いが、党を増やすために「利用する」、闘いとしが写らなくなってしまう。この典型が今日の日共の姿であることは広く知られているところであるはずだ。

大衆闘争の爆発的昂揚が開始されるばあい、かならずしも前衛の直接的指導によってそうなるとは限りは限らない。日々刻々、搾取され、抑圧されているプロレタリアートは、「何かの契機」によって爆発的昂揚を生み出す場合が多い。一九〇五年「血の日曜日」十二年のレナ金鉱の発砲、一九一七年二月革命において、最初の昂揚はプロレタリアートの自然発生的斗争として生みだされている。もちろん、その背景となるプロレタリアートの不満ならびにたえざる

前衛の宣伝、煽動を抜きにしてそれは考えられないが、この昂揚の契機が、前衛の直接的指導によってもたらされたとみるのは、明らかに歴史の偽造に過ぎない。

二月革命の最初の時期に、多くの有能な指導者が海外に、あるいは獄中にあつた時、メンシェヴィキと何ら変らない「古参ボリシェヴィキ」によって構成されていた指導部は全く無能であり、適切な指導を行えなかつた。かかる時期にこの革命を勝利に導いていった原動力は、いままでもなくプロレタリアートそのものであつた。

一九一七年の革命が、一九〇五年の第一次革命の本舞台であつたように、第一次革命の敗北の教訓は単にボリシェヴィキが学んだだけでなく、無数のプロレタリアートの血となり肉となつてうけつがれたのである。このような経験によつてはじめて、二月においてプロレタリアートの中からた無数の英雄の手によつて勝利が保障されたのである。しかし、このような「勝利」を真にプロレタリア社会主義革命の勝利へと指導するためには、レーニンと彼に指導されたボリシェヴィキ党が必要であつたことはいままでもない。

破防法——警職法——安保というようなブルジョアジーの政治攻勢の中で、これに敏感な学生やインテリゲンチヤの進歩的部分が、先ずこのことによる危機感を反映し、さらに中小企業労働者や官公労働者が、比較的早く起ち上つたが、民間大経営労働者の腰は最後まで重かつた。それにもかかわらず、日本革命の展望を考えた場合、鉄道・通信・電力などの動脈を握っている労働者と大経営労働者の最後の決起なくては不可能であることは明かである。

安保斗争の際、全学連の五・一三国会構内集会方針をめぐる、共

産主義者同盟内の対立は、単に「構内集会」を主張するものが「左派」で、このような時期にこのような方針をだすことに疑問をもつものが「右派」だという単純なものではなかつた。当時、非常に卑俗な形で論争が行われたが「韓国型」か、「否」かということの背景には、実に日本革命のイメージにたいする理論上の問題がひそんでいたであろう。情勢の変化で五・一三は取りやめられ、次々の闘争に追われて、今もって当時者の間でこのことが解明されてはいないが、これがその後の共産主義者同盟の分派闘争の混乱となつて現われたことは否定しがたい。(これらの点については安保闘争の総括の中で具体的に明らかにする)

かかる観点から我々が日本革命の展望を考えた場合、いかなる契機と、いかなる形で大経営労働者が民同の棒を乗りこえて、自己の戦闘性を最大限に発揮する闘いに起ち上るかの解明は、我々の重要な課題とならう。

マルクスの生きていた時代やレーニンの活躍したロシアと、今日の日本を始めとした高度に発達した資本主義国とは決定的に違う。

労働組合の活動一つとっても、流血の暴力が加えられていたツァーリの圧政下では、二月革命までは極めてわずかの労働組合しかなかつた。

「ロゾフスキーによると、この時期の初めにロシアには真の労働組合は三つしかなく、一五〇〇名の組合員があつたにすぎない。ところが組織労働者の数は、一九一七年六月には一四七万五四二九人にふえ、一九一八年一月には二五三万二千人に、一九一九年一月には三六三万八千人に、そして一九二〇年四月には五三二万六千人に

ふえた。」(「世界労働組合運動史」下巻、フォスター)

このような過程は戦後の日本の労働組合が急速に結成されていたことと似たような状況を思わせる。もちろん、それまで全く中核となるべき部分があつたことや「占領軍」を「解放軍」とたたえた日本と、レーニンに指導されたボリシェヴィキ党があつたロシアと根本的に違うことはいままでもない。

このような状況にたいして、戦後十六年、とにかく主要な経営の殆んどを労働組合に組織し、十年の歴史をもつ総評や悪質右翼社会民主主義者の支配する全労が存在する日本とはかなり大きな違いがある。しかも労働力販売機関になり下つている全労はいままでもなく、ますます官僚機構が強められつつある総評において、革命的指導方針が打出されるだろうなどということはありえない。

実際の爆発的闘争は、言葉をかえていえば、資本家の支配機構である職制や官僚的組合支配をどう打破って、真の前衛の指導のもとに新しい指導部を作つてそのもとに闘いを組むかということにもなる。革命闘争は、まさに官僚支配打倒の闘争と並行するものである。例えば、工場委員会などを新しく作り、そのもとで既成の官僚指導部をばして新しい指導部を形成したり、全労内では新しい労働組合を作つて対置することさえ検討しなければならぬだろう。

もちろん、上述のことは、政治的経済的危機の時や爆発的昂揚の際を意味していて、普段はどんな反動的な労働組合内でも、労働者階級の多数を獲得するために努力しなければならぬことはいままでもないことであるが。

ところで、それではどういう時に、職制や強固な社民官僚を完全

にとぼして新しい指導部のもとに闘いが進められるか、そのような契機は何によって作りだされるかということである。

「革命的情勢なしには、革命は不可能であり、しかも、どんな革命的情勢でも革命をもたらすとはかぎらないことは、マルクス主義者たちにとって疑う余地がない。一般的にいって、革命的情勢の徴候とは、どんなものであろうか？ つぎの三つの主要な徴候をあげれば、たしかにまちがいはないだろう。(一)支配階級にとっては、いままでどりの形で、その支配を維持することが不可能なこと。『上層』のあれこれの危機、支配階級の政策の危機が、割れ目をつくりだし、そこから、被抑圧階級の不満と激昂がやぶれでること。革命が到来するには、通常、『下層』がこれまでどりに生活することを『のぞまない』だけではたりない。さらに、『上層』が、これまでどりに生活していくことが『できない』ことが必要である。(二)被抑圧階級の欠乏と困窮が普通以上に激化すること。(三)右の諸原因によっているが、大衆の活動性がいちじるしくたかまること。大衆は『平和』の時代にはおとなしく略奪されるままになっているが、あらしの時代には、危機の環境全体によっても、また『上層』そのものによっても、自主的な歴史的行動に引きいられる。

個々のグループや党の意志ばかりでなく、個々の階級の意志とも無関係な、これらの客観的な変化がなければ、革命は——通例——不可能である。これらの客観的な変化の総体が、革命情勢と呼ばれるものである。(レーニン、「第二インターナショナルの崩壊」)

たしかにこのような情勢が訪れるならば、新しい前衛政党的主体的活動によって、既成の指導体制を打破つてゆくことは容易である。

もちろん、このような革命情勢(特に客観的な革命情勢)の可能性を生む時期として、従来、ある種の戦争や恐慌の場合が考えられてきたが、現代国家独占資本主義下では、そのままいいか、もつと何か変化が考えられないものかどうか、ということが当然問題になる。これは現代ソ連論とあわせ、私も含め全体で研究し明確にすることが、現代革命の展望を明らかにする上で必要であろう。

ともあれ問題はこのような革命的情勢がまだできてないが、破防法——警職法——安保闘争というような政治的昂揚の中で、職制や強固な社民支配を打破り、大経営労働者をも、本当に闘いにまきこみ、彼らの指導権をも打破ることが不可能なのかどうかということである。破防法闘争ではこの闘いを裏切った総評議長であり、炭労委員長であった武藤を追放した。警職法闘争の中で金正総同盟会長(国家公安委員)を更迭させた。これらは、一定の意義をもちながらもまだ端的なことであり、警職法闘争の過程だけでは余りにも短かい期間のことなので、この内容について充分検討することはできない。しかし、安保闘争ではかなり長期にわたる闘いが続き、幾度かの激しい闘いもくりかえされたわけである。この闘いの総括の中で、我々は「このような契機がなかったかどうか」また「どうすればそのようなことができるのか」ということについて検討を試みよう。(従来おこなわれた警職法闘争の教訓の一面性を克服し、警職法闘争を自己完結的に総括するのではなくして、二・一ゼネストとは別の意味から戦後もつとも歴史的な大闘争であった安保——三池——闘争をこのような角度によって総括し、プロレタリアートの血となり肉となるようにしていかなければならないであろう。この論文の第二部において、この課題への接近を試みるつもりである。)

解説

「世界労働組合綱領草案」について

十二月四日から十六日までモスクワにおいて、第五回世界労働組合大会が開かれる。この大会において特に重要なことは、「現在の段階において労働者の利益と権利をまもるための『労働組合行動綱領』(草案)」が提出されることである。従来からの例でみればこの「綱領」が可決されることは殆んど間違いないことであろう。

この「綱領」は十月に開催され決定されるであろうソ連共産党二十二回大会に提出される「新綱領」とならんで、今後全世界の労働組合運動に大きな影響を与えよう。

日本ではすでに第三回、第四回大会出席者を中心して日本準備会が作られ、十月二日の第三回総会で細井宗一(国労)を始め三十五名

に上る日本代表団が決まり、十二日に結団式がおこなわれて活発な宣伝活動が続けられている。この活動のセンターになっている「世界労働日本出版協会」では、はじめ二万部印刷したところ、直ちに品不足となり、一万部の増刷をおこなったことを報道している。したがって「左翼」のなかでかなり広範に読まれていることに注目しなければならぬのである。

一九四五年二月六日、ドイツのV2号ロケット爆弾がまだロンドンの市街に落下していたなかで、戦前の分裂に終始符を打ち、はじめての世界労働組合会議がもたれた。この会議では、三八の全国労働中央組織と一五の国際組織によって任命された、一六四名の交渉

権限をもつ代議員ならびに四〇名のオブザーバーが、五つの大陸の五〇〇〇万人の労働組合員を代表して一堂に会し、①連合国の戦力増強。②講和条約にたいする労働組合の態度。③世界労働組合連盟の基礎。④戦後ただちにとりあげるべき労働組合の諸要求。戦後の復興についての諸問題、の原案が万場一致採択された。

そして四五名からなる「世界労働組合会議委員会」が選出されたが、この委員会によって九月二五日パリにおいて、第二回世界労働組合会議が開催され、十月三日、世界労働の目的と手段および組織についてきだめた世界労働規約が採択された。世界労働組合会議は第一回世界労働組合大会にきりかえられた。大会はひきつづき世界労働の指導諸機関を選出し、文字通り米、英、ソを含む世界の主要労働組合が初めて一つに結集された(但し米はCIOのみ参加しAFLは参加しなかった)

このようにしてせつかく統一された組織も戦後のきびしい情勢を反映して長続きはしなかった。特にマーシャル・プランを支持する米英など西欧の労組によって分裂が開始された。

すなわち、一九四九年一月、第十一回執行局会議において、CIO代表ケアリーとイギリスTUC代表テウソンによって、マーシャル・プランの支持決議が破れると同時に、世界労連の活動停止が提案され、これが受け入れられないとみるや、かれらはオランダN.V代表クーパー、ベルギーにも執行局会議より退席してしまつた。ここに労働組合の国際的統一は破綻され、公然たる分裂工作の第一歩がふみ出された。以後、世界の労働戦線は、世界労連と国際自由労連、および国際キリスト教労連に分裂し、さらにいくつかの中立系労組に分裂している。

(註) 五六年末の世界労連の資料によると世界の労働組合に組織されている労働者一億六千万人

(内訳) 世界労連 八八〇〇万人

国際自由労連 五四〇〇万人

キリスト労連 二〇〇万人

他は中立労組

現在は一億八千万の労働者が組織されており、そのうち、世界労連は一億百万人といわれている。

第二回世界労働組合大会は、一九四九年六

月で第四回世界労働組合大会が開かれ、日本からも、細井宗一団長を始め十八名が参加した。

今年の大会で産別崩壊以後始めて、全建労と全日自労が世界労連に加盟を申し込み、安保・三池闘争の中でますます国際連帯が重要になってきている時、第五回世界労働組合大会は色々な意味で大きな影響を与えるであろう。特に「労働組合行動綱領」は今後の世界の労働組合活動の指針となることは必至なので、十分検討しなければならない。

この内容は、「労働者階級の正義の大業、平和と民族独立と民主主義と社会主義の大業の勝利を、労働者階級の統一闘争によって勝ちとる」という決意をこめた、世界の労働者階級の力強い声がこの大会の自由な民主的な演壇から表明されるであろう」という呼びかけから始まり、次の議題を討議することになっている。

——世界労連の活動、および平和擁護、帝國主義反対、平和共存、全面完全軍縮、労働者の経済的社会的諸要求実現のための労働組合の当面の諸任務。

——植民地主義の絶滅をめざす諸国民の闘

月二十九日から七月九日までイタリーのミラノで開かれ、主としてこの分裂にたいする対策と一般方針が決められている。当時、加盟組織であった日本の全労連代表は、マッカーサー司令部の禁止によって渡航できなかった。

第三回世界労働組合大会は、一九五三年十月十日から二十一日までウィーンで開かれ、日本からも中村満夫(当時国鉄労組新潟地本委員長)ら十八名が始めて参加し、「あらゆるところで統一を」のスローガンのもとに、「統一の思想と統一行動のよびかけ」が日本の労働組合活動にも大きな影響を与えた。

丁度それより少し前、九月十四日より二十五日までILOのアジア地域会議が東京で開かれ、世界労連代表として出席していたウォーデイスによって、日本労働組合運動の弱点が指摘されたが、この中で「民労連(全労の前身)の指導者を非難するだけでは統一はすまない」とのべ「行動の統一」の重要性が説かれた。

それまで「産別系左翼」では統一というところを、すぐ「組織統一」というように理解していた点が多かったが、いわゆる「ウォーデイス旋風」という言葉に表現されたように、

争いの中で、労働組合の活動と連帯の発展。

- 一、世界の労働者階級はすべての進歩的諸勢力とともに、人類の当面する諸問題を解決することができる。
- 二、戦争は不可避ではない、それは避けることができる。平和をまもりぬき強化することは可能である。
- 三、植民地主義は完全に絶滅されなければならない。
- 四、新しい世界の建設者社会主義國の労働者
- 五、資本主義的搾取に反対し、労働者の社会的経済的要求をめざす闘争における労働組合の任務
- 六、労働組合の権利および民主的自由の擁護と拡大
- 七、積極的統一と国際連帯こそ労働者階級の勝利を保障する

という項目から成り立っている。

この内容について一口にいうならば、全体につらぬかれているものは明らかに、スターリニストによる情勢分析と方針である。これはこんど決められるソ連共産党新綱領の方針

彼の示唆は、第三回世界労働組合大会の決定とあわせて、日本労働組合運動に大きな影響を与え、これ以後、「統一行動」にたいする真剣な検討が行なわれてきた。

しかし実際にはアカハタ五四年一月一日の「平和と民主主義と生活を守る國民の大統一行動」ということの中に典型的に見出されるように、今迄の極左冒険主義の裏がえしとしての極端な右翼日和見となって現われたのである。この中で今迄の極左冒険主義の誤りを指摘したことはその限りでは正しいとしても、逆に「敵は有勢、味方は劣勢」というように情勢を固定化してとらえ、闘いがうまくいかない理由を敵がなお有勢であることの立証とし、したがって味方の統一の重要性をのべるというやり方のためにその後無内容な「統一と団結」論が流行して、日和見主義者の逃場になってゆくのである。このように色々な意味で波紋を起こしながらも、とにかく日本の労働者を国際場裡へ引出し、交流を深めさせていったことはそれなりに大きな意義があつたといえよう。

「すべての力を統一に」の旗じるしのもとに五七年十月四日から十五日までライプツッ

を、労働組合活動に適用したものであることは明らかだ。したがって、これに対する全面的な批判をおこなわなければならないが、それは次の機会にゆずるとして、いまここで次の点だけにふれておかなければならないであろう。

今日のソ連共産党を始めスターリニスト党が「革命」を忘れてしまったように、労働組合政策にたいしても、その中でプロレタリアートを戦闘的に鍛えて「賃金奴隷制度」を廃止する方向にもってゆくのではなく、すべてを改良の枠の中だけに留めてしまおうとするのである。

「社会主義諸國の全面的な急速な計画的な進歩は、資本主義体制の無政府的なむらのある発展と経済的不安定にくらべて、ますますきわだった対照をなしている。独占資本によって完全に支配され、くりかえされる経済恐慌と慢性的な失業によってほろくずされ、民族解放運動と強力な労働者階級の闘争によってゆすぶられるなかで、資本主義体制の基礎とその勢力圏は急速に縮小し、崩壊しつつある。こうして資本主義体制は、その全般的危機がいっそう悪化した

新しい段階に入りこんでいる」(草案)

このように情勢を分析しながら、(われわれは、ソ連などを社会主義と認めたいし、このような一面的な情勢分析にも異議があるが)、その結論として、「全世界の労働者の統一は、反動と帝国主義と戦争の勢力をうち負かし、平和をまもり、民主主義、諸国民の民族独立、人類のための社会進歩をめざす闘争において新たな勝利をかちとることを可能にするであろう」と結んでいる。

もちろん、労働組合のもつ役割と、これを指導する前衛政党とは区別しなければならぬが、それでは次のような「テーゼ」をどう理解したらよいのか。

ロシア・プロレタリアートの革命的パトスに支えながら、一九二一年七月一二日、コミンテルン第三回大会は「赤色労働組合インターナショナル(プロフィンテルン)に関するテーゼ」を採択した。

「労働組合は、たんに意識的に共産主義的労働者だけでなく、その日常生活の教訓を学ぶにつれてだいに共産主義に近づいてゆくにすぎない、プロレタリアートの中間階層やさらには最もおくれた階層をもふ

くめて、一定の産業における全労働者を包含することを目的とした大衆的プロレタリア組織である。権力の掌握をめざすプロレタリアの闘争に先だつ時期における、まさにその闘争の時期における、また権力掌握以後の時期における労働組合の役割は多くの点において相異っている。」「コミンテルン・ドキュメント」(1)デグラス編、荒知寒村訳、論争社、二五四頁)

「テーゼ」は、こう述べることによって、労働組合と前衛を区別しながらも、①権力の掌握をめざすプロレタリアの闘争に先だつ時期。②まさにその闘争(権力獲得の)の時期。③権力掌握以後の時期。の三つの局面を明らかにしつつ、権力獲得と労働組合のもつ特殊な役割について否定しなかった。

さらに「行動綱領」(2)では、
「労働組合戦術の基礎は、資本に反対する、革命の大衆とその組織との直接行動である。労働者のあらゆる業績は、大衆による直接行動および大衆による革命的圧力の行使に直接的に比例する。直接行動は、雇用者および国家にたいする、労働者の直接的圧力の行使のあらゆる形態をふくんでい

る。すなわちそれは、ボイコット、ストライキ、街頭行動、デモ、工場占拠、工場からの商品発送にたいする力による抵抗、武装暴動および労働者階級を社会主義をめざすたかいたのために統一するよう計画された、その革命的行動をふくんでいる。それ故に、直接行動を、社会主義革命およびプロレタリアートの独裁をめざす闘争のために労働大衆を訓練し準備させる手段とすることは、革命的労働組合の任務である。」

「コミンテルン・ドキュメント」(2)五六頁)
これが当時のレーニンとレーニンに指導されたボルシェヴィキ党の労働組合にたいする考え方だった。今日のスターリニスト共産党と、何と大きな違いがあることだろう。

プロフィンテルンの活動の評価については、今日やと資料も少しづつ明らかにされて来たので、いずれ明確にしなければならぬであろうし、当時の状況と今日の違いを抜きにして機械的にあてはめることには賛成できないが、悪しき代名詞のようにされて来た、俗にいう「赤色労働組合主義」とレーニン、トロツキー、ジノビエフ、ロゾウスキーらによって指導された初期の「赤色労働組合イン

ターナショナル」の革命的精神とを混同することは絶対に許されない。

われわれはスターリニストによって抜きざられ、「改良主義」に転落した世界労働組合運動に、新しい革命的息吹をよみ返さなければならぬであろう。

最後に、われわれは、マルクスと共に次の言葉をもう一度叫ばずにはいられない。

「賃金制度にふくまれている一般の隷属状態からまったくはなれて、労働者階級はこれらの日々の闘争の究極の効果を誇大してはならない。彼らのわすれてならないことは、彼らがただもろもろの結果とたかたかっているだけでこれらの結果の原因とたは下向運動を阻止しているだけで、運動の方向をかえているのではないということ、彼らが姑息療法しているだけで、病気を根治しているのではないということ、である。だから彼らは、資本のあくことなき蚕食または市場の変動からたえず発生するこれらのさげがたいゲリラ戦に没頭してしまつてはならない。彼らは、現在の制度が、彼らにいつきい貧窮をおしつけると同時に、

社会の経済的改造に必要な物質的諸条件ならびに社会的諸形態をもうみだしている、ということを理解しなければならぬ。彼らは、「公正な一日分の労働にたいして公正な一日分の賃金」という保守的なスローガンのかわりに、彼らの旗印のうえに、「賃金制度の廃止」という革命的なスローガンををかきしるべきである」(「賃金、価格および利潤」(Y))

フルシチョフの天国 (二)

——ソ連共産党新綱領草案の批判——

対馬忠行

目次

- 一、第二革命綱領対フルシチョフ綱領
- 二、「全人民の國家」及び「國民の黨」説の幻想と欺瞞(以上本号)
- 三、「労働の量と質による分配」という階級分化のスローガンの下に共産主義への移行は可能であるか?
- 四、消費生活の部分的「無料」化は価値法則の止揚を意味せず
- 五、ソ連の新段階—フルシチョフ綱領の現実的意味
- 六、フルシチョフ綱領の「第三段階」説と現代革命運動論の批判

一、第二革命綱領対フルシチョフ綱領

かつてマックス・シャハトマンは、例の「スターリン論文」(「ソ連邦における社会主義の経済的諸問題」)を批評した「Stalin on Socialism」という長論文のなかで、次のようなことをいったことがある。—財産国有化に立脚した権力は、官僚に歴史上かつて見られなかった搾取と抑圧の権力をあたえる。これに対し、人民は「共産主義の最高段階」という「天国」をあたえられる。それはスターリン主義の宗教、すなわち人民のアヘンである。それは教会における天国と同じ役割をしている。現世の「庶民の悲惨」をがまんすれば、未来がそれに報いてくれるからである。』(「ニュー・インク」一九五二年一月三十日号)

私は、先頃発表されたソ連共産党の新綱領(草案)をよんで——これをよむことは私にとって非常な忍耐を要するほど、おそろしくタイクツなものであった——が、はからずも、このシャハトマンの一言を思いだしたのである。

我々は、スターリニスト・ロシアを、当初の十月革命の目標から大きくはずれた、官僚制国家資本主義国だと思っている。これについては、拙著『ソ連「社会主義」の批判』及びトニー・クリフ『ロシア—官僚制国家資本主義論』などに書いてあるので、ここにくりかえす必要はなからう。(*)

(*) ラーヤ・ドウナエフスカヤ女史 [Raya Dunayevskaya] のきわめて興味ある著作「マルクス主義と自由」[Marxism and Freedom] (三八四頁、一九五八年、ニューヨーク)の中のソ連論もほぼ同じような国家資本主義説に立っている。ついでながら女史は、トロツキーの秘書であったのであるが、第二次大戦の初め頃、トロツキーのソ連論(労働者国家擁護論)に反対してトロツキーから離れた。秘書といっても堂々たる理論家であって、著書によれば、ヘーゲル哲学やマルクスの「資本論」にあるいはレーニン文献によく精通しており、マルクス「経・哲手稿」(一部)やレーニンの哲学ノート(一部)の最初の英訳者でもある。また、社会主義と価値法則の関係につき、はじめて公然とマルクス主義の修正を試みたスターリン派の歴史的な文書(「経済学教課上の諸問題」一九四三年)を、「マルクス経済学の新修正」なる一文を附して、いち早く「アメリカン・エコノミック・レビュー」(一九四四年九月号)に英訳紹介したの

も女史である。私の一友人は女史の著作に感銘し、是非日本に紹介したいといっており、いずれ邦訳出版されることになるであらう。

クリフは、『もし、スターリンに清算されたものすべてが、本当に「ファシスト」や「反逆者」であったならば、彼らは十月革命と内乱との全期間をつうじて党及び國家の指導部の少くとも十分の九をしめていたのだから、どうして社会主義革命を指導する気になつたのが完全な神秘になつてしまうであらう。規模そのものによつて、「粛清」は、そのベテンの性格を自ら証明したのである。』と書いている。(クリフ、)十月と内乱期の党及び國家の指導部の『少くとも十分の九』の粛清、単にこれだけとつても、十月革命がすぐく育ってきたと考えることは、——もちろん新綱領はこの見地に立っているが、——おめでたいのを通りこして政治的白痴に近いと私には考えられることである。

かく考える我々は、問題は、共産主義第二段階の、未来の甘い夢をえがいてみせることでなく、ソ連邦がスターリン段階でたどつた基本的歪曲を根本的に是正すること、すなわち、いうところの『第二の桶足的革命』を実行することが、先ず先決問題だと思ふものである。では、先ずどんなことをやればいいのか? 私は昭和三十一年に出版した『クレムリンの神話』という小著の序文で次のような要求項目をならべておいた。

一、スターリンによる一切の『粛清裁判』の再審と隠蔽されたレ

「ニン文書（『レーニンの遺書』等）及びトロツキー派、ブハーリン派等の反対派文獻刊行の自由。（トロツキーは、一九三八年『第四インターナショナルの綱領』の中で『テルミドールの官僚によつて演出された一切の政治的裁判を、完全な公開、公然の論争、誠実をもつて再審せよ』と要求している。実にそのことの如何がまず試金石である。このことが行われるならば、他は開いている門をかけるむよに容易になつてくる。）」

二、不平等主義及び出来高賃金制（ノルマ制度）の廃止と『労働証書』制への移行の準備。（マルクスによれば、社会主義社会とは共産主義社会構成の『労働証書』段階である。）」

三、西欧の生活水準以下の生活水準向上のために、生産財と消費財の極端な不均衡を是正すること。『労働証書』制は、個人的消費を個性の充分な発展が要求する消費範囲まで拡大することを前提としており、そうでない社会主義は無意義である。（資本主義的再生産に対する社会主義的再生産のもつ大きな差異は、不変資本〔C〕可変資本〔V〕、剰余価値〔M〕といった価値的形態が失われるということと共に、最も重要なことは資本主義が『社会の生産諸力がそれに照応した人民の消費の増大なしに増大する、これらの生産諸力を勤労者大衆のために利用することなしに増大する』に対し、社会主義は『人民大衆のプロレタリア的な状態』が排棄され『社会の生産諸力がそれに照応した人民の消費の増大とともに増大する、これらの生産諸力を勤労大衆のために利用しつつ増大する』ということである。ただし、労賃制度（『労働力の商品化』の撤廃、『労働証書』制への転換によつてである。ここに資本主義的蓄積と社会主義的蓄積の根本的相違がある。）

積の根本的相違がある。）

四、コミュニオン型国家（プロレタリア独裁）の重要原則として、マルクス・エンゲルス・レーニンの強調せる、一切の官吏俸給の労働者化の実施。（レーニンは、これは国家問題について最も重要な点だと強調している。）」

五、選挙の名に偽しない現行ソヴィエト選挙制の改正。

六、軍隊階級制の廃止（元帥とか大将とかの将官階級制は階級社会の所産である。）」

七、一切の侵略領土の即時返還（国境の設定は、エンゲルスの、言語と共感をもつとする『自然的境界』によるべきこと、レーニン『自決に関する討論の決算』第一章及び第三章参照。）」

八、トムスキー派『粛清』以後のソ連労働組合は『産報』組織でありその名に偽しない。従つてこれを一九二〇年のいわゆる『十人政綱』の線にそつて改革すること。

九、国内旅券制、転・退職制限令等、一切の反動的立法を即時廃止すること。

一〇、コミンフォルムを解体し、真にマルクス・レーニンの共産インターナショナルを再建すること。（各国共産党をソ連外交政策の道具化することをやめねばならぬ。また、各国共産党は従来隷属的態度をすて、社会主義的国際連帯の下で、自主的・批判的精神を回復せねばならぬ。）」

私は昭和三年に、第二革命政綱のために、右のように書いておいたわけであるが、これは、一層詳細にし、また更に要求項目を附

加することができるであろう。例えば、現在の『ソ連圏』を（このうちの侵略領土を除き、*）スターリン方式から革命的インターナショナルイズムにつらぬかれていくレーニンの連邦制方式に切りかえることなどもその一つであろう。

レーニンの起草したコミンテルン第二回大会の『民族及び植民地問題テーゼ』（第七条）は主張している。

『連邦制は、いろいろな民族の勤労者が完全な統一にいたる過渡的な形態である。すでに連邦制は、他のソヴィエト共和国（過去ではハンガリア共和国、フィンランド共和国、ラトヴィア共和国、現在ではアゼルバイジャン共和国、ウクライナ共和国）に対するロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国の諸関係でも、またロシア社会主義連邦共和国では、これまで国家として存立したこともなければ、自治制をもつたこともない諸民族（たとえば、一九一九年と一九二〇年に創設されたロシア社会主義連邦ソヴィエト共和国内のバシキール自治共和国とタタール自治共和国）との関係でも、目的にかなつたものであることが、既に実施によつてあきらかにされている』

スターリンはこのレーニン・テーゼに反対した。彼の意見は『旧ロシアの一部を構成していた諸民族』には連邦制（『フェデラツィヤ』）でよいが、『旧ロシアの一部を構成していなかった諸民族』、たとえば『将来のソヴィエト・ドイツ、ソヴィエト・ポーランド、ソヴィエト・ハンガリー、ソヴィエト・フィンランド』とは、同盟（『コンフェデラツィヤ』）（バートラム・ウルフがいつているように、スターリンはコンの場合を、名目上の独立諸国家の提携またはゆるやかな同盟と解した。）の関係形態をとるべきであるというのである。

レーニンはこのスターリンの意見をしりぞけ、コミンテルン第二回大会はレーニン案を可決した。これは一九二〇年のことだが、スターリン案はいかにも後年の一国社会主義論者にふさわしい。レーニンの意見は、その革命的インターナショナルイズムにふさわしく、彼の意見でなら、例えば今日の『ソ連圏』は、単一のソヴィエト連邦を形成することになるのだ。そしてレーニンは、かかる連邦制の下で、『すべての民族のプロレタリアートが共通の計画に従つて規制する単一の全一の世界経済』を主張したわけだ。何とスターリン方式と違ふことか！（ウルフ『ソ連の六つの鍵』時事通信社版一九六一年八月頁、参考書院刊『民族問題』第三分冊参照）

*）もちろん、従属国の解体を含む。例えば今日の『世界危機』の焦点をなすところの東独（ドイツ民主共和国）のごときはその性質の最も強いもの一つである。重要産業をソヴィエト持株会社（Soviet Share-holding Company）が支配し、三〇万のソ連軍が常駐し、モスクワの完全なるカライイ政権が支配する。独立国家とは名ばかりで実際はドイツ人のいうソ連地区（オスト・ツォーネ）にすぎない。西独への大量逃亡は、かかる帝国主義的支配とそのカライイ政権、及びその失敗に対するレジスタンスの一つとみるべきである。連邦制は、もちろん、民族自決権をみとめた上のものでなくてはならない。

ところで、私は前記の一〇項目を書くと同時にいったものである。『もしこの改革綱領が実行し始められるならば、然りその時こそ、

我々の「ソ連」官僚独裁制国家資本主義論は過去に開いた時代後れのものとなる。そうしてその代りに、ロシアを社会主義への過渡期——しかもその最終段階として、「社会主義への直接的移行期」乃至「社会主義の初期」と規定するのが正しくなってくるだろう。つまり私の意見では、右のような要求項目を満足せしめる『第二の補足的革命』が実行されても、未だ社会主義社会の確立などとはいえない。社会主義への過渡期（プロレタリア独裁期）の終り頃、あるいは社会主義社会の初め頃位に規定すべきだというのだ。

ところが、もちろんスターリニストは、これと正反対の意見に立つ。スターリン自身によれば、早くも一九二六年に『社会主義は既にソ連邦において九〇パーセント実現され』、それから一〇年たった一九三六年には『我がソヴェト社会は、もはや根本において社会主義を実現し、社会主義制度を創設した。すなわち、マルクス主義者の間で、共産主義の第一段階もしくは最低の段階と別称されるものを実現するに至った。つまり、我が国には、もはや根本において、共産主義の第一段階、すなわち社会主義が実現されているのである。』(スター)のみならず、かつてのスターリン製党史は書いた。

『……憲法(一九三六年の)は、ソ連邦が新しい発展段階、すなわち、社会主義社会建設の完成と、「各人はその能力に応じ、各人はその必要に応じて」という共産主義の原則が社会生活の指導の原則であるべき共産主義社会への漸次的移行の段階に入ったという世界的事実を確証したのである。』(全連理共産党小史)

この『漸次的移行段階』説なるものは、これまでスターリニストから、しばしば聞かされ、なやまされたものである。終戦直後、私

期位のところだ。ところが、そうした革命をも経ずに、どうして、社会主義どころでなく共産主義がくるというのだろうか？

なるほどソ連の生産財工業や軍需工業の発展は大きなものがあつたであろう。しかし、その生産性はそんなに高いものではなく、第二次ソ連産業視察団の一般の見解によれば『ソ連の生産性は、農業、工業、商業を通じてそれほど高いものではなく、軍需工場と建材工場、炭鉱を除けば、一人あたりの生産性は日本よりも低い』、また、『生活水準は日本の三分の二かそれよりやや高い程度とみればいい』といわれている。(*)

(*) 第二次ソ連産業視察団(日本交通公社、日本海貿易共催、日本経済新聞社後援)は、本年六月二三日から約三週間にわたつてソ連邦内の製鉄所、発電所、重電機工場、自動車工場、セニ工場など約三〇事業所と二つのコルホーズを視察した。これに同行した日本経済新聞工業部長山崎武敏「ソ連産業みたまま」(日本経済新聞、七月二七日〜八月一〇日連載)参照。なお、この視察記事は、それぞれエキスパートのみたものだけあつて、ソ連経済の現状を知らんとするものには非常に参考になる。

いずれにしても、軍需・生産財工業の発展に對比して生活水準の低さは天下周知の事実である。ガガーリンの宇宙飛行のあと、モスクワでは『おとうさんは宇宙、おかあさんは買い物行列』という笑話が市民の間に伝つたという。(東京朝日新聞、八月二五日)ソ連の新聞記者がガガーリン少佐の娘にインタビューしたら『おとうさんは宇宙』といっ

の「労農派」との協力時代、さすが親ソ派の向坂逸郎氏もこの説にはくびをひねっていた記憶もある。ところが今度のフルシチョフ綱領によると、これは嘘であつたらしい。フルシチョフ綱領はいう。

『今後一〇年間(一九六一年〜一九七〇年)に、ソ連邦は共産主義の物質的・技術的基礎をつくりあげながら、人口一人あたりの生産高で、もともと強大で豊かな資本主義国アメリカ合衆国を上まわるだろう。……そのつぎの一〇年間(一九七一年〜一九八〇年)には、共産主義の物質的・技術的基礎が創設され、すべての国民に、ありあまるほどの物質的・精神的財貨が保障されるであろう。ソヴェト社会は、必要に応じてあたえられる分配の原則が実現されるすぐ近くまで到達し、単一の全人民的所有への漸進的移行が行われるであろう。このようにしてソ連邦では基本的には、共産主義社会が建設されるであろう。共産主義社会の完全な建設が終了するのは、それにつぐ時期である。』(新編綱領の邦訳は、すべて日共の「世」)

これで見ると『漸次的移行段階』説なるものは、ひきのばされ、やうと今年(一九六一年)かららしい。今後二〇年間が、共産主義第二段階への『漸次的移行』期で、この二〇年間の後半、一九七一年〜一九八〇年に共産主義の『すぐ近くまで到達し』、その後、すなわち一九八一年から共産主義第二段階に入ることになる。

だいぶひきのばされたが、それでも今後二〇年後には、ソ連には共産主義の最高時代がくることはくる。我々の認識によれば、既に述べたような『第二の補足的革命』なしには、ソヴェト連邦は社会主義社会(共産主義第一段階)たりえない。いや、やうたとして、その直後は、せいぜい過渡期の最終段階乃至社会主義社会の初

たという記事をもじつたものだけということであるが、この笑話は、市民の支配者へのひそかなレジスタンスをあらわしているだけでなく、よく今日のソ連邦の現状について鋭いものがある。すなわち、生産財工業、特に軍需工業の圧倒的発展に對比する生活水準の低位を鋭く諷刺したものだからである。この現状で、どうして今年二〇年間、特にその後半期に『各人には能力に応じて、各人には必要に応じて』という共産主義第二段階の『すぐ近くまで』到達することができるのだろうか？ だが従来、ソ連の生産財工業の飛躍的發展をみておれば、それが可能なようにみえる。だが、しばらく待て、我々はその飛躍的發展の原因を考えてみなければならぬのだ。私はかつて述べておいた。

『ソ連国営企業における剰余価値(取引税+利潤)と賃金総額(可変資本)(*)を比較すると剰余価値率は一〇〇パーセントを越す高率であるとみられる。ユーゴーのチトーは、かつてソ連を「労働大衆の犠牲の上にきずかれた官僚独裁の国家資本主義」といったが、実にこの強度の搾取(農民を含めて)のこの低度の生活水準、低賃金こそソ連重工業が飛躍的發展をした秘密の基礎なのである。『計画』といえども無から有はつくりだせず、固有的「計画性」はこの場合副次的役割をしているにすぎない。スターリニストの宣伝は、この場合、「資本主義的経済体制」に対する「社会主義的経済体制」の優位ということと説明するのであるがそれは神話にすぎない。主たる基礎は、強制労働者及び農民に対する強度の搾取、一般労働者の低賃金にある。第四インターナショナルのトロッキストは、生産力固有下の「計画経済」によって、官僚独裁下にもかかわらず、生産力

を發展せしめたのであるが、併しただ、その官僚独裁がより一層の發展を阻害しているのだ、という風に説いている。しかし実情はむしろ正反対である。鉄の官僚独裁下の低生活水準、低賃金こそその飛躍的発展の基礎なのである。』(拙著『ソ連「社会主義」の』(批判)一〇一—一〇二頁)

(*) ソ連の賃金総額には、純粹に労働者や勤務員だけでなく、経営者なども含まれるのだから剰余価値率はより高いとみていい。

こういうわけであるから、あと二〇年で『各人は能力に応じて、各人は必要に応じて』(ついでながらこのスローガンは言葉としては、サン・シモン主義者の信条、特にルイ・ブランの『各人はその能力に応じて生産し、その必要に応じて各人に与えられる』からでていると思われる。)が実現されるなどといわれてみても、我々は簡単に信ずるわけにはいかない。

前掲、山崎氏の視察記事によれば、今日のソ連労働者一人あたり平均月収は、工場、八〇—一〇〇ルーブル位、農村、五〇—六〇ルーブル位とみられ、これが国民の八〇パーセントを占めている。そして氏の記事によれば、『生涯共せきしない』と食っていけないのが国民の七、八割を占める労働者の実体である。高級官僚、高級将校の家庭では千ルーブルから三千ルーブル程度の収入がある。共せきどころかミンクのオーバーの売り場の最大の顧客は彼らの夫人たちである。ソ連人の最高賃金と最低賃金(ホテルの女中には四〇ルーブルの低額所得者もいる)の間の開きは資本主義國並みに大

きくなっている。ソ連にも賃金面から、持てる階級と持たざる階級が生れつつあることは疑う余地がない事実である。』と(ついでながら一月、デノミネーションを行った。従来は、公定で「ルーブル」九〇円であったが、現在は「ルーブル」四〇〇円である。しかし「ルーブル」の実勢レートは従来は「ルーブル」二五円位とみられ、今日は、山崎氏の判断では、一)とところで、現在、妻君に「ルーブル」一三〇—二〇〇円位とみられている。二)とところで、現在、妻君にミンクのオーバーを買ってやれる連中はともかく、『生涯共せきをしない』と食っていけない人間どもには、もう二〇年たつたら、お前ら必要に応じてタダでものをやるぞ、といわれても夢のような話で信じられないのではなからうか? それでこそ『おとうさんは宇宙、おかあさんは買い物行列』という痛烈きわまる笑話がとびだすわけだが、フルシチョフやニコヤンといった諸公は、二〇年をまたず、恐らく今でも『必要に応じて』あたえられているのではな

いか! 約東ならどんな約束でもできる。問題は、——例えばソ連の支配者たるスターリニスト官僚が——従来いかなることをやり、また、今日いかなることをやっているか、をみることである。我々はその上で彼等の約束を判断しなければならぬ。かくして、我々は、問題は、依然として未来の甘い夢(共産主義第二段階の実現)をえがくことではなしに、先ず、いうことろの『第二の補足的革命』を實行することであることを知る。特に、ここにおいては、官僚独裁から真のプロレタリア独裁、すなわちコンミュニオン型國家(前掲拙著第)の回復、従来の資本主義的蓄積方式から社会主義的蓄積方式への転換が決定的問題である。

もとより、スターリニスト官僚が、かかる自己革命をやりうることはない。私も彼らがやれるものとして要求項目をかかげているわ

けではない。だが、もしやれるというならやってみよ! 例えばマルクスは、パリ・コンミュニオンを分析し、『コンミュニオンの議員をはじめとして、上下を通じ、公務は、労働者並みの賃金によって執行されねばならなかった。國家の高級官吏のあらゆる既得利権と交際費とは、かかる高位高官もろとも姿をけした』と述べ、レーニン

『まさにこの点に、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義への、抑圧者の民主主義から被抑圧者の民主主義への、一定の階級を抑圧するための「特殊権力」としての國家から、人民の多数者——労働者と農民——の「一般的権力」による抑圧者の抑圧への転換が最も明瞭にあらわれている』と書いた。乞う、できるものなら、たったこの一事だけでもやってみよ。しかし、『歴史上、特権をもった階級が現状のまま自発的に革命的圧力なしにその高位の地位を放棄した事例は一つもない。』ドイッチャーのような見方は、きわめてアまく、スターリニスト官僚もその例外ではありえない。由来、支配者は人民に対してムチとアメを用意する。そして時に応じて両者の分量を加減する。新経営者層、労働貴族層を直接支柱とするフルシチョフ独裁は、人民の進歩にもかんがみ、スターリン独裁時代よりも、ややアメの分量を多くせねばならぬ! そこで教会における天国と同じ役割をするものとして『共産主義』という『天国』があらえられる。月給は安くとも働け、働け、女房にミンクのオーバーが買える支配者をうらやむな、もう二〇年後には、諸君にも『天国』が近づいている! 時やよし、天にはアメリカをだしぬく人間衛星船がまわっている!

では、私もそろそろ天国をのぞいてみることにしよう。

二、『全人民の國家』及び『國民の黨』説の幻想と欺瞞

政治と經濟の両面からのぞいてみたいが先ず政治面から入ろう。が、この『天国』のぞきには、あらかじめその前に、我々は一つのメガネをたずさえる必要がある。そもそもマルクス主義では、共産主義第二段階で國家や政黨はどうなるものと考えているのか? いうまでもない、そんなものは、もうない世の中と考える。否! 元來、マルクス主義は、『過渡期の國家』、すなわちプロレタリア獨裁國家自体すら、『もはや本來の意味における國家でないもの』、『いわゆる『半國家』と考えているのであるが、それは第二段階を待たないで、既に第一段階(社会主義)で本質的には死滅するものと考えている。なぜなら社会主義社会とは無階級社会であるからである。これについてはマルクス・エンゲルス・レーニンから無數の引用をすることができ、ここでは一つ、一九一八年七月十日發布のロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法(ソ連には、一九一八年、一九二四年、一九三六年の三つの憲法がある)の第九条を引こう。

『現在の過渡期に役立つよう作成された憲法たるロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法の基本目的は、ブルジョアジーの完全な抑圧、人間による人間の搾取の廢止、および階級分裂も國家權力ももはや存在しなくなるような社会主義の実現を保障するべく、強力な全ロシア・ソヴェト權力の形態における、都市と農村のプロレタリアートと貧農との獨裁を樹立することである。』(『國家資本主義論』(一)二頁より引用)

ちゃんと「階級分裂も国家権力もはや存在しなくなるような社会主義の実現」といつている。但し、社会主義では、マルクスの用語に従えば、今日の国家的機能に類似したある社会的機能は未だ残る。レーニンが「死滅しつつある国家は、死滅の一定の段階においては、これを非政治的國家とよぶる」(「家と革命」(註四第第三節)と述べ、かかるものとして「ブルジョアジーなきブルジョア國家」あるいは「半ブルジョア國家」が残存するといっている。そしてこれもなくなるのは共産主義第二段階である。(これは後述)

政党的にはどうか？ 社会主義において、既に本質的には國家も死滅するとみる位だから、政黨などといった政治的存在も共産主義第二段階をまたず、第一段階(社会主義)でなくなるべきではないか？ 社会主義社会に共産黨などというものがあるのは、そもそもおかしくないのか？ 然り、これについては既にコミンテルン第二回大会の「プロレタリア革命における共産黨の役割に関するテーゼ」(エフ起稿)が解答をあたえている。

「プロレタリア政黨の必要は、階級の完全な消滅とともに初めて消失する。この共産主義の究極的勝利に向かう路上では、現在のプロレタリア組織の基礎的三形態(黨、ソヴェト、生産者組合)の歴史的重要性が変化し、そして労働者組織の単一型(「シングル・タイプ」)が徐々に結晶することが可能である。だが、共産主義が戦いとるべき目標でなくなり、そして全労働者階級が共産主義者となった時、共産黨は初めて完全に労働者階級のなかに解消するであろう。」「コミンテルンドキュメント」第一巻論争版「八頁。ここで「共産主義」とは第一、第二段階を含めた総称として用いられている。また「生産者組合」とは労働者組合(注)。

組合という基本的三組織形態の歴史的重要性が変化し、「労働者組織の単一型」が徐々に結晶化して行く、と述べていることに、強く注意をせられんことを望む。さて、國家はどうなるか？ フルシチョフ綱領にきこう。

「社会主義革命によって生まれたプロレタリアート独裁はソ連における社会主義の勝利を保障して、全世界史的役割を果たした。と同時に、プロレタリアート独裁そのものが、社会主義の建設の過程で変化をとげた。搾取者階級が根絶されたために、搾取者階級の反抗を抑圧するというプロレタリアート独裁の一機能は消滅した。そして、経済的・組織的・文化的・教育的という社会主義國家の主な機能が全面的に発展した。社会主義國家は新段階に入った。社会主義社會に働く人々の全人民的組織への國家の成長転化の過程が始まりました。プロレタリア民主主義は、全人民的社會主義的民主主義にますます転化してきた。

労働者階級は、自己の権力を永久化することを目的としていない史上唯一の階級である。プロレタリアート独裁は、共産主義の第一段階である社会主義の完全かつ最後の勝利と、共産主義の全面的な建設への社會の移行とを保障して、その歴史的使命をはたし、国内発展の任務という観点からみれば、ソ連では欠くことのできないものではなくった。プロレタリアート独裁の國家として生れた國家が、全人民の國家、全人民の利益と意志を表現する機関に変わった。労働者階級は、ソヴェト社會の最も先進的な組織された勢力である以上、共産主義の全面的建設期においても、指導的役割を果たすのである。労働者階級が社會の指導者としてのその機能をはたし

社会主義とは無階級社會である。従って、既にそこではプロレタリア政黨の必要がなくなることが認められているわけだ。かつてあるアメリカ人記者との会見で、スターリンは「階級が存在せず、階級の障壁が消滅しつつある以上、……互いに抗争するいような政黨を出現させる温床はありえない。いくつかの階級がないところには、いくつかの黨はありえない。なぜなら、黨は階級の部分だからである」といつた。トロッキーはこれを批評したが、その際「彼の論法にしたがえば、ソ連邦には、さまざまな黨がありえないばかりでなく、一つの黨さえ存在しないことになる。なぜなら、階級のないところには、一般に政治の余地はないからである」といつている。(「被切れた革命」論争)まことに然り、「階級が存在せず」という所に「階級の部分」たる黨が存在するというのは非論理も甚だしい。「黨は階級の部分」乃至「階級の前衛」だとするならば、既に階級そのものがない社会主義社會に解消されるべき筈のものでなければならぬ。

かくして、スターリニストのいうごとく、ソ連邦に社会主義が確立し、今後二〇年を経て共産主義に到達するほどであるならば、そもそも「ソ連邦共産黨」などというものが存在し、新綱領などというものが提出されること自体が、おかしな話なのであるが、まあそれはしばらくおいて先きに進もう。(念のため、ここでいつておくと、右のごとき状態では、ソヴェトというプロレタリア獨裁の政治組織も存在しえない。また、語の本来の意味における労働組合も性質をかえるであろうが、いずれにせよ私は、読者が、前掲コミンテルン・テーゼが無階級社會への路上では、黨、ソヴェト、生産者

終わるのは、共産主義が建設されて、階級が消滅するときである。黨は、労働者階級の獨裁が國家の死滅以前に、必要ではなくなると見なしている。全人民の組織としての國家は、共産主義が完全に勝利するまで残るであろう……」(第二節)

要約するならば、「社会主義の建設の過程」で、國家は、プロレタリア獨裁としての國家から「全人民の組織としての國家」へと変化し、更にこの「全人民の國家」なるものは、共産主義の完全な勝利までは残るが、共産主義の完全な勝利に至ってそれも消えうせるだろう、という主張のようにみえる。後年のスターリンとちがって一見マルクス主義的にみえる。だが、果してそうであろうか？ 実はマルクス・レーニンの主張と似て非なるものである。

第一、「労働者階級が社會の指導者としてのその機能をはたし終わるのは、共産主義が建設されて、階級が消滅するときである」。また、「共産主義は、社會の諸階級と諸階級層への分裂に終止符をうつ」とも書いてある。——これで見ると、階級は共産主義(第二段階)建設までではなくならないらしい。だが、社会主義は、既に無階級社會だというのがマルクス主義の主張ではなかったか？ と同時に、「共産主義が建設されて階級が消滅する」というのに、すなわち、それ以前の社会主義段階には、階級があるというのに、どうしてプロレタリア獨裁が死滅するといふのか？ 未だ無階級社會になつていないというのに、なぜ、プロレタリア獨裁が消滅するのか？ 第二、いや、しかし、綱領は、プロレタリア獨裁そのものの消滅ではないらしく、「搾取者階級が根絶されたために、搾取者階級の

反抗を抑圧するというプロレタリアート独裁の一機能は消滅した」とある。単に「一機能」の消滅であり、そしてこの「一機能」を欠いた「全人民の国家」とやらが共産主義社会までつづく。「党は、労働者階級の独裁が国家の死滅以前に、必要ではなくならない」というが、それはただ右のような意味においてであるらしい。

たしかにレーニンは、国家の完全死滅は共産主義第二段階においてであるといった。「国家は、もはや資本家なく、階級なく、(階級なく)従ってまた、いかなる階級をも制圧できなくなるという限りにおいて死滅して行く。しかし、国家はまだ完全には死滅していない。なぜなら、実際上の不平等を神聖化する「ブルジョアの権利」が依然として保有されているからである。国家が完全に死滅するためには、完全なる共産主義が必要である。」(「革命」)

だが、この社会主義社会にも残存する「国家」とは、一体いかなるものか？今やこれを理解することが決定的に重要になってきた。

一九世紀の七〇年代、エンゲルスは、バクーニン派との一論争文(「威力原理」について)のなかでいった。

「何故に、反威力主義者たちは、政治的威力に対し、国家に対して反対の声をあげることをもって満足しないのか？ すべての社会主義者は、国家、およびそれとともに政治的威力が、未来の社会革命の結果として消滅するだろうという点においては意見を同じくしている。換言すれば、公的諸機能 (public Functions) が、その政治的性質をうしなつて、社会的利益を監督する単なる管理的諸機能へ転化するであろうという点において、みな一致しているのである。」

しかるに反威力主義者たちは、政治的国家 (political State) が一撃のもとに廃止せられ、それを生みだした社会的関係が廃止せらるる以前に廃止せられんことを要求している。彼らは社会革命の最初の行動によってすべての威力が廃止されることを要求している。」(文中の威力は Authority の訳語、強権とか權威とか訳している人もある。)

レーニンは「国家と革命」において、右を引用しつついっている。「この議論のうちには、国家死滅の際の政治と経済との相互関係のテーマとの関連において考察するべき諸問題がとりあげられている。公的諸機能が、政治的なものから単なる管理的なものへ転化する問題や、「政治的国家」の問題が、それである。特に誤解をまねく恐れのある、この最後の用語(政治的)は、国家死滅の過程を指示している。すなわち、死滅しつつある国家は、死滅の一定の段階においては、これを非政治的国家 (non-political State) とよぶるのである。」

マルクス・エンゲルス・レーニンによれば、社会がプロレタリア独裁期 (過渡期) から社会主義 (共産第一段階) へ推進すれば、——それは階級なき社会の実現であるから——一切の「政治的国家」(そして、これが語の本来の意味における国家である)は死滅する。だからこそ、先きに引用しておいたように、一九一八年のソヴィエト憲法は「……国家権力もはや存在しなくなるような社会主義の実現」といっているのである。そして社会主義的社会に、なお残存する「国家」とは、——本来の意味での国家、すなわち「政治的国家」では決してない、——レーニンの用語によれば、「非政治的国家」としての「国家」であるにすぎない。(エンゲルスによれば、プロ

レタリア独裁の国家自体が、既に「本来の意味における国家」ではないのだが、これはしかし、なお「政治的国家」の範疇に属する。)

マルクスは「ゴータ綱領批判」で、「共産主義社会(第一及び第二)において、国家制度はいかなる変革をうけるか？ 換言すれば、共産主義社会においては、今日の国家機能に類似するいかなる社会的機能が残るか？ この問題は科学的にのみ答えられるべきであつて「人民」という言葉と「国家」という言葉を干渉むすび合せてみたところで、ノミの一跳びほども解決に近ずきうるものではない」といっている。社会主義社会に、なお残存するものは、この今日の国家機能に類似する、ある種の社会的機能である。それは、どんなものか？ 先きの引用でエンゲルスは、「公的諸機能が、その政治的性質を失つて、社会的利益を監督する単なる管理的諸機能へ転化するであろう」といっているが、実にその存在である。国家は一定のパブリックな諸機能をもっているが、それから政治的性質が消え失せてしまい、単に、社会的利益を監督する単なる管理諸機能に転化したもの存在である。そこには、エンゲルスの用語をかりれば、Authority は存在する。だが、political Authority は、もう存在しない。(本質的には国家ではないのに、レーニンが敢えて誤解されやすい「国家」という言葉を使ったのは、おそらく、この一定の Authority が残存するためであろうかと考えられる。)

ところで、この「政治的国家」でない「国家」を、レーニンは、「ブルジョアジーなきブルジョア国家」あるいは「半ブルジョア国家」ともよんだ。

「……その第一段階における共産主義のもとにあつては、「ブル

ジョアの権利の狭隘な視野」が保存されるという興味ある現象がおこる。消費財の分配に関するブルジョアの権利は、もちろん、また不可避的にブルジョア国家をも予想する。何んとなれば、権利なるものは、権利的規範の遵奉を強制しうる機関なしには、無であるからである。そこで、共産主義のもとにおいては、一定の期間の間(第一段階)ブルジョアの権利が残存するばかりでなく、さらに、ブルジョアジーなきブルジョア国家さえも残存することになる。』(「国家と革命」)

プロレタリア独裁、すなわちプロレタリア国家の消滅後に、共産主義の第一段階で、たとえブルジョアジーはいないにしても「ブルジョア国家」が生れるのか？ 奇妙ではないか？ とんでもない！ あらためていうまでもなく、この場合の「国家」とは、本質的な意味の国家、すなわち、「政治的国家」としての国家ではない、いわゆる「非政治的国家」としての「国家」を意味しているからである。そうでなければ、右のような非難をうけてもしかたがないだろう。しかし、なぜ「ブルジョアの」などというのか？

周知のように、社会主義とは共産主義の第一段階であり、生産手段の協同体的所有 (ゲノッセンシャフト) にヘス・アイゲンツームと、労働に應ずる分配の行わるる社会である。

この「労働に應ずる分配」とは、一見、平等的らしいが、実際は未だ完全なものでなく、それはブルジョアの制限を内蔵しているものである。マルクスは「ゴータ綱領批判」で、この説明をした際、「ここではなお依然として平等の権利——ブルジョアの権利が原則となつている」とか、「この平等の権利なるものは、やはりブルジ

『ブルジョア的の制限をおびている』とかいつている。レーニンが「ブルジョア的なきブルジョア国家さえも残存する」といつたのは、おそらく、このマルクスの記述に従つてのことである。(ここで詳述はできない。よろしく『ゴータ綱領批判』につかれたし、後に述べられるように、スターリニストはマルクスの「労働に應ずる分配」をすつかり変造してしまつたが、これを正解するためには、先ずマルクス価値論の理解が絶対的に必要である。拙著『ソ連「社会主義」の批判』第一章及び第二章がその理解を助けんことを望む。なお、『裏切られた革命』第三章中におけるトロツキーの『ブルジョア的なきブルジョア国家』の理解は完全に間違つてゐることを一言しておく。)

ともあれ、私は何度も強調する。レーニンが「……国家が完全に死滅するためには、完全なる共産主義が必要である」といつた際の『国家』は決して本来の意味の国家たる『政治的国家』ではないことを。繰返すようだが、それは、本質的には、もはや国家ではないところの、『非政治的国家』としての『国家』にすぎないことを。

それだから、フルシチョフ綱領の『党は、労働者階級の独裁が国家の死滅以前に、必要ではなくなる」と見なしている』とは、人民をきわめて功妙なトリックにひっかけようとするものである。断然、それは同時に死滅する、といわれなければならぬ。一九一八年のレーニン憲法のように、『国家権力もはや存在しなくなるような社会主義』といわれなければならぬ。ところが綱領は、『人民』という言葉と『国家』という言葉とを千度もむすび合せて、『プロレタリア独裁から『全人民の国家』とやらへの転化を述べたてる。』

いたければ、その際は、社会主義社会に残存する『国家』は、『全人民国家』などというインチキではなく、先きに述べたつたような、もう本質的に国家でない『非政治国家』にすぎないことが絶対に明記されなければならぬ。彼らにそれができようか？千度も否！

フルシチョフ発明の『全人民国家』説なる新説は、幻想とまやかし以外の所産ではない。我々は『全人民国家』説のお談義に、レーニン起草のロシア共産党綱領(一九一九年)の一節——『ブルジョア民主主義がその国家の階級性を陰蔽したのとは反対に、ソヴェエト権力は、社会が諸階級に分裂してゐる間は、従つてまた、あらゆる国家権力が完全に消滅するまでは、いかなる国家も不可避的に階級性をおびざるを得ないことを、公然と承認する』を、鋭く対置せねばならない。また、『全人民国家』のあまつたらしい幻想に、レーニンの『ブルジョア的なきブルジョア国家』なる、からい想定を鋭く対置させねばならない。マルクス主義者は、右のレーニン党綱領のテーゼをシッカリとアタマに入れ、『全人民国家』などという人民を欺瞞し、ねむりこませるような、改良主義者風の言葉を口にしなければならぬのだ。

次に『プロレタリア民主主義は、全人民的社会主義的民主主義にますます転化してきた』という発言も、おかしいものである。

レーニンはいふ。『発展の弁証法は、こうである。——絶対主義からブルジョア民主主義へ、ブルジョア民主主義からプロレタリア民主主義へ、プロレタリア民主主義からどんな民主主義でもないものへ』と。そしてさらに彼は『國家論ノート』に書く。

I……資本主義社会においては、本来の意味における国家。——

スターリニスト諸君、エンゲルスにきこうではないか。『階級対立のうちに運動してきた従来の社会は、国家を必要とした。すなわち、その時々の特権階級が、自己の外的生産諸条件を維持するため、すなわち、特に被搾階級を、現在の生産様式によつてあたえられた抑圧諸条件(奴隸制、農奴制、賃金労働制)のうちに、暴力的に抑制するための組織を必要としたのである。国家は、全社会的公的な代表者であり、ひとつの眼にみえる団体への、全社会的集約であつたが、しかし国家が、こうしたものであつたのは、それが、その時代々々に、みずから全社会を代表した階級の国家、すなわち古代においては奴隸所有市民の、中世においては封建貴族の、現代においてはブルジョア的の、国家であつた限りにおいてのみである。最後に、国家は、事実上全社会的代表者となることにより、自己みずから無用のものたらしめる。』(『反デュー』)

スターリニストの、『プロレタリア独裁の国家として生れた国家が、全人民の国家、全人民の利益と意志を表現する機関に変わった』という宣言と、『国家は、事実上全社会的代表者となることにより、自己みずから無用のものたらしめる』というエンゲルスとの、何んと鋭い対照であることか、『全人民の国家』などは無い。その時は国家は無用だ！

再びいふ『党は、労働者階級の独裁が国家の死滅以前に、必要ではなくなる」と見なしている』とは、プロレタリア独裁に対する功妙なトリックである。それはレーニンの『国家が完全に死滅するためには、完全なる共産主義が必要である』という言葉——言葉だけ——のかけにかくれるものだからである。どうしても右のようにい

民主主義はただ例外的で、だから決して完全ではない。II……過渡期(プロレタリアートの独裁)においては過渡的タイプの国家(本来の意味での国家ではない)。——ほとんど完全な民主主義、ただブルジョア的の反抗の抑圧によつてのみ制限せられる。III……共産主義社会(第二段階)・国家の死滅——真に完全なる民主主義、それは習慣となりつつあり、それ故に、死滅しつゝある。完全なる民主主義は、どんな民主主義でもないものに等しい。これはパラドックスではなく真理だ！——習慣となりつつあるところの、それ故に死滅しつゝあるところの、完全なる民主主義は、次の原則に席をゆずる。『各人は能力に應じて、各人には必要に應じて』。(『国家論』鈴木幸治郎訳本四〇頁、四六頁参照)

プロレタリア民主主義(レーニンの用語によれば、『貧乏人のための、人口の十分の九のための民主主義、金持ちの反抗の力による抑圧』)は、『どんな民主主義でもないもの』II『真に完全なる民主主義』へ移行するだけである。(ついでながらデモクラシーとは、マルクスもいつているように、もともと、人民支配(『フォルクスヘルンシャフト』)を意味する言葉である。)

だが、フルシチョフ・テーゼと我々が奇妙に一致するところがあつたという点である。最高独裁官は、どうやら『独裁』がおき

いらしい！

しかしこの『全人民国家』なる幻想の発明には若干の現実的根拠がある。今後の二十年間の準備期間において共産第二段階の社会に入るというのに、いつまでもプロレタリア独裁が、——これは周知のようにプロレタリア革命から共産第一段階までの過渡期的存在物であり、マルクス自身、ワイデマイヤー宛手紙で、『この独裁自身あらゆる階級の止揚と階級なき社会への過渡をなすにすぎない』と書いてある——がなばっている、また、その必要があるようにいうことは、スターリニストがマルクス主義の仮面をかぶるためには工合がわるい。かつてスターリンは、第一八回党大会報告で、『一国社会主義』の国際情勢（資本主義的外閉）に藉口してプロレタリア独裁国家の解体を否定したのだが、第二次大戦後、『ソ連圏』も拡大された今日、スターリンそのままでは『マルクス主義』のハクがはげる危険がある。だからシブシブながらプロレタリア独裁は『国内発展の任務という観点からみれば、ソ連では欠くことのできないものではなくった』といわざるを得なくなった。スターリンも、かつて一九二七年には『社会主義社会は階級なき社会、国家なき社会である』といった。だが自己の官僚独裁を樹立するや、今度は、外部の『資本主義的環境』の存在をいだし、『階級対立の止揚＝国家死滅』というマルクス主義的命題を、そのままソ連邦に適用できないとした。この命題は、ただ、社会主義国を、研究の便宜上、国際情勢から抽象し遊離して研究した場合か、社会主義が、すべての国々、または大多数の個々において勝利し、資本主義的環境の代りに、社会主義的環境が存在するに至るような場合でなければ適用できない

能に類似する社会的な機能は、社会の発展にしたがつて、その形態をかえ、一層完成されながら、共産主義のもとでも維持される。しかし、その機能の性格とそれを実現する方法は、社会主義のもとでのそれとは違ったものとなるだろう。現在、国家的機関である企画と会計の機関、経済と文化の発展を指導する機関は、政治的性格を失ない、社会的自治の機関となるだろう。共産主義社会とは、働く人々の高度に組織された共同体となるであろう。一般に認められた、共産主義的共同生活の第一の規範が形成され、その順守はすべての人間の内的欲求、習性となるだろう。

歴史的発展は不可避的に国家の死滅をもたらす。国家が完全に死滅するためには、内的条件——発達した共産主義社会の建設——ばかりでなく、外的条件——国際的な舞台での——資本主義と共産主義の間の諸矛盾の、共産主義に有利な最終的な解決——がつくりだされる必要がある。

あわて者には、ちよつとたぶらかされそうな文句がならんでいる。だが、キツネは、いくらばけてもやはりシツポがでる。

第一、『社会主義的国家体制の発展は、国家体制を……社会的な共産主義的自治へと、次第にかえてゆくだろう』というが、プロレタリア国家をそう呼称する場合は別として、『社会主義的国家体制』などはない。社会主義では国家は本質的には死滅するものだからである。また、『ソヴェエト、労働組合、協同組合およびその他の労働者の大衆組織を結合する社会的な共産主義的自治』というが、既に引用しておいたコミンテルン第二回大会テーゼがいうように、プロレタリアの基礎的諸組織を統一する『労働者組織の単一な型』

いとし、独裁官的地位によいれた彼は『古典的マルクス主義者』（特にエンゲルス）は、ソ連のごとき『一国社会主義』の経験をもたずとし、従って、国家死滅に関するマルクス主義的命題の修正を要求するに至ったのである。しかし、この修正説には何等の根拠がないこと、私が拙著（二九）に述べておいた通りであるが、今度のフルシチョフ綱領は一応は『国内発展の任務という観点からみれば、……』というに至った。進歩であるか？ 否、その代りに、マルクスの皮肉な口調をかりれば『人民』という言葉と『国家』という言葉とを千度もむすび合せるに至ったのだ。スターリンの修正説はすこし修正しないと工合がわるいが、といって、プロレタリア独裁の死滅、すなわち国家（政治的国家）の死滅というわけにはいかぬ。なぜなら、国内政治権力の死滅の宣言は、スターリニスト官僚を自爆に導くものだからである。それでは彼らのもてる一切の特権、一切の権力を失わざるを得ないからだ。そこで案出されたのが、この『全人民国家』説なる、あまつたらしい幻想と欺瞞なのである。それは依然たる官僚独裁の仮装にすぎない。彼らはこの仮装にヤツキである。

どんなにマルクス主義的仮装にヤツキであることか？ 綱領中から、少々長いが、面白い文句をおめにかけてよう。

『社会主義的国家体制の発展は、国家体制を、ソヴェエト、労働組合、協同組合およびその他の勤労者の大衆組織を結合する社会的な共産主義的自治へと、次第にかえてゆくだろう。この過程は、社会の全員を社会的事業の管理に積極的に参加させる民主主義の一層の発展を意味するだろう。経済と文化の管理という、いまの国家機能は、既に無階級社会（共産第二段階だけでなく第一階段も然り。）へと向こう路上において徐々に結晶化される。遠い共産第二段階を待つてのことではない。しかもここでは、かんじんな、党がぬけている！

第二、『いまの国家機能に類似する社会的な機能』と、一見マルクスかららしい文句を使っているが、それはマルクスとは決定的に相違し、フルシチョフ綱領においては、それは未だ『政治的性格』をもっている。共産主義の下で、はじめて『現在、国家的機関である……機関は、政治的性格を失ない、社会的自治の機関となるだろう』というからである。見よ、ここに大きなシツポがでている！ なせなら、既に述べてきたように『政治的性格』を失うのは、既に社会主義の下においてであるからである。フルシチョフ綱領とは異なり、マルクス・エンゲルス・レーニンにおいては、社会主義下に残存する『国家』は、ただ『非政治的国家』にすぎぬものであった。どうやらフルシチョフによれば、社会は『非政治的国家』の段階を経ずに、『政治的国家』の段階からいきなり共産第二段階に突入するらしい！ ロケットの発達で目がくらんだのか？ スターリニスト諸公、どうか『死滅しつつある国家は、死滅の一定の段階においては、これを非政治的国家とよぶる』というレーニンを味読されることを。

第三、右引用によれば、共産主義社会が建設されても『国際的舞台での資本主義と共産主義の間の諸矛盾』が、共産主義の方に『有利な最終的解決』がない場合には、『国家の完全な死滅』は不可能だという。トロツキーは世界革命の勝利なしに社会主義の建設はあ

りえないという。私は、ロシアの場合は不可能だったが、併しありうる場合も想定しようと考える。但し、その場合でも、建設された社会主義は、きわめて不完全なものであろうとは思っている。そしてこの場合、国家問題と関連させるとき、私はかつて次のような意味のことを書いた。——元来、『一国社会主義』は、多かれ少なかれ不具的たらざるをえない。……それだから、『一国社会主義』の場合、なるほど、対外関係的には、(そこには一国社会主義国対ブルジョア国家として変形せる階級対立が存続するわけであるから)国家的残存を肯定しうる。だが、国内的には、プロレタリア独裁としての国家権力は死滅しておらねばならぬ。そこには、いわゆる『ブルジョア』なきブルジョア国家として以外、もはや人民が『国家』というような重圧をもたないものでなければならぬ。国内に社会主義社会が実現されている以上、自国民に対してそれは原則上無用であり死滅せねばならぬ。そこでは階級対立が既になくなっていて、階級対立のあるところ、プロレタリア独裁は存在意義をもち、ないところ、それは存在意義をもたぬ、と。だが、問題が共産第二段階となると、たとえ不完全としても、世界革命の勝利なくしてありえないだろう。『必要に応じて』というようなとてもなく高度な社会は、『人類発展の現段階においては、まさにその本質において世界的であるところの生産力』(キロー)を基礎とせずしてはありえないことだ。『二国共産主義』論は一九三九年以来のスターリンの誇大妄想である。フルシチョフ綱領はこの妄想を完全にうけついでいる。

似てしこうして非なり、という言葉があるが、まことに言なるかは、プロレタリア独裁の一つの政治的形態である。従って『政治的國家』の死滅は同時に、かかるものとしてのソヴェエトの死滅であるのは自明のことである。それはプロレタリア独裁の死滅と共に死滅せねばならぬ。政治的なものの死滅は、ソヴェエト(それは本来的に政治的な性格をおびるものである)を死滅せしめる。エンゲルスは、プロレタリア独裁の政治形態としてのコミニューンやゲマインヴェーゼンを『暫時的な制度』としているのだ。だからこそ、既に引用した、共産党の役割に関するコミンテルン・テーゼが、既に無階級社会への途上において、ソヴェエトが、党や労働組合と共にその歴史的重要性を変化させ、『労働者組織の単一な型』が徐々に結晶化して行くこと述べているのである。この『労働者組織の単一な型』とはどんなものか、それはただ今後の大衆の実践がきめることであって、今から具体図をえがくことは術学にすぎよう。しかし、政治的なものの死滅と共に政治的なソヴェエトも死滅し、他の何物かに変化しなければならぬことは明らかであろう。

ではスターリニスト・ロシアではどうか？
我々の見解によれば、今はソヴェエトの変化乃至死滅を語るべき時ではなく、却ってソヴェエトの復活と再確立を語るべき時である。なぜならば、スターリニスト・ロシアは『ソヴェエトなきソヴェエト連邦』であるからである。全権力をソヴェエトへ！——これが十月革命に際してのボルシェヴィキのスローガンであった。だが、スターリニスト・ロシアにおいては、『公式には、ソ連において、主権が存在する機関は最高ソヴェエト会議(一九三七年まではソヴェエト大会)を頂点とするソヴェエトである。多年の間、これら

な、言なるかな、である。次ぎにソヴェエトの問題に移る。
エンゲルスは『ゴータ綱領草案の批判』(一八七五年三月)に述べている。

『パリ・コミニューンは、……もはや本来の意味での国家ではなかった。『人民国家』については、我々は、もうあきあきするほど、無政府主義者からきんざん聞かされている。だが既にブルードンを批判したマルクスの著作及びその後の『共産党宣言』は次のごとく明言している。社会主義的秩序の導入とともに国家は自から解体し且つ消滅すると。かくて今や国家は、闘争において、革命において、敵対者を強圧するために用いられるところの一つの暫時的な制度にすぎないものであるから、自由人民国家などというのは、純粹なタワゴトである。プロレタリアートが国家をなお用うるとすれば、プロレタリアートはそれを自由のために用いるのではなく、敵を鎮圧するために用いるのである。そして自由をうんぬんする時になれば、国家は既に国家として存在することをやめるのである。だから我々は、一般に国家という代りに、古い立派なドイツ語の(ちようどフランス語の「コミニューン」に相当する)共同体(ゲマインヴェーゼン)という言葉の使用を提議すべきである。』

ソヴェエトは、——すくなくともその成熟段階においては、——ここに、コミニューンあるいはゲマインヴェーゼンというのと同じである。すなわち、レーニンは『ソヴェエトはプロレタリア独裁のロシア的形態である』(『背教者』)といったが、要するにプロレタリア独裁の一つの政治形態である。革命以前の一つの闘争組織にとどまっていたソヴェエトは別としても、国家組織としてのソヴェエト

の機関がゴム印であらわされる以外にはほとんど存在しない機関であり、真の権力は他にあったことは、数多く指摘されたところである。『(クリフ)ロシア官版』と同時に、ソヴェエト代議員の『選挙』などといっても、それは『選挙』の名にあたいしないインチキなものであることは天下周知の事実である。この悪名高い『翼賛選挙』は、かつてトロツキーがいったように、『ソヴェエト人民は、ただ中央や地方の指導者たちが、党の旗の下に彼らにつきつける候補者の中から、彼らの「代表」を選ぶ権利をあたえられているにすぎない』ものである。(『翼賛選挙』二五五頁)

ソヴェエトはスターリン時代以降、死せる存在であり、いかに官僚独裁の『イチジクの葉』にすぎなくなっているか、ということについては、既に拙著の第四章及びクリフの著書第二章などに書いてあることだから、ここに詳述する必要はなからう。二〇年代末以降のスターリン的テルミドールによって、権力は労働者階級から官僚の手に移ってしまった。特に三〇年代の大粛清(反革命的クーデター)を通じて官僚独裁制が確立されたのである。

だから中心問題は、ソヴェエトの変化や死滅ではなくて、その復活である。だがもし、人あってソ連社会主義完成説(二〇年後の共産主義移行説を含めて)をとるなら、ソヴェエトの死滅が義務的となる。それはその成熟段階においては、プロレタリア独裁の政治形態であるからである。独裁が死滅せるのにその政治形態があるわけではない。完成説乃至移行説に立つフルシチョフ綱領には当然そう期待してもよきさうに思われる。

だが待った！ フルシチョフ綱領はいうのである。

『「ハル」ハハ』の組織、国民の団結のあらわれとなったソヴィエトの役割は、共産主義建設の過程（一九六―一九）で高められる。ソヴィエトは、国家機関と社会団体の性格をそのなかに結合するとともに、その活動に大衆を広範かつ直接的に参加させて、ますます社会団体として活動するようになっていく。

ソヴィエトの死滅でなくして、その役割は『高められる』である！ 但し、『包括的な人民の組織、国民の団結のあらわれとなったソヴィエト』としてだ。『プロレタリアート独裁の国家として生れた国家が、全人民の国家、全人民の利益と意志を表現する機関に変わった』が故であろう。プロレタリア独裁の機関としてのソヴィエトから『全人民国家』の機関としてのソヴィエトへ——というわけであらう！

『全人民国家』が幻想であり欺瞞である以上、もはやいふべき語もない。ただ一つだけ質問しよう。

マルクス・エンゲルス・レーニンとは、すべての公務員の俸給を労働者なみにすることを強く要求した。現在のソヴィエト幹部諸公は、ことごとくこれを裏切っている。新綱領には『信頼を裏切った代議員をリコールする選挙人の権利』をうたっているが、一体、今日のソ連人民には、右のごとき裏切り幹部諸公をリコールする自由が認められているか？ フルシチョフは例の『秘密演説』でスターリンの粛清犯罪のごく一部をバカロした。だが、考えてみればフルシチョフ以下もスターリンの下ではこれに協力したのではなかったか？ 新綱領は『すべての重要問題のソヴィエト総会での、公開かつ自由な、そして全面的な討議』といっているが、果してこの粛清犯

罪の『公開かつ自由な、そして全面的な討議』ができるであろうか？ 十数回の原爆実験再開すら、今なおソ連人民に発表しないのに——全世界の人が知っているというのに——どうして、その自由を信じ得ようか？

だが、それはそれとして、我々はスターリリスト官僚の本丸ともいふべき党の問題に入らねばならぬ。

『共産党は労働者階級の部分であり、最も進歩し、最も階級意識に富み、故にまた最も革命的な部分である。……共産党インターナショナルは、プロレタリアートが自身の独立な政党をもたないでその革命を成就しようという意見を、断乎として否定する。』そして『労働者階級が共産党を要するのは、権力掌握のためばかりでなく、権力掌握の間だけでもなく、政権が労働者階級に移った後もそうなのである。約三年間も政権をとっているロシア共産党の歴史は、労働者階級の政権掌握後といえども共産党の重要性は減るところか、却って非常に増大することを示している。』

コミンテルン第二回大会が満場一致で可決した『プロレタリア革命における共産党の役割に関するテーゼ』は、かく述べつつ、その将来の見通しとして、——既に引用しておいたように、——『プロレタリア政党の必要は、階級の完全な消滅とともに初めて消失する』とハッキリ宣言している。

共産第一段階（社会主義社会）は、無階級社会であり、従って党はここに消滅するわけである。トロツキーの『スターリンの論法に従えば、ソヴィエト連邦にはさまざまな党がありえないばかりでなく、一つの党さえ存在しえないということになる。なぜなら、階級が、フルシチョフがこうだと『進歩的インテリ』諸君も、うかうか国民政党論を笑っておれまい。いや、彼らは恐らくいうだろう。それは違う、日本は階級対立のある資本主義国だが、ソ連は階級対立のない社会主義国であるから真の国民政党も生れるのだと。しかし、これこそ一層おかしかろう。スターリンによつてすら『党は階級の部分』であり、一つの政治的組織なのであるが、既に階級のないところに、『階級の部分』だけ存在するいわれはあり得ないことだからである。

『国民の党』などはない。だが、フルシチョフ綱領におけるそれは、まさしく『全人民の国家』説に対応したものであつて、符節は確かに合っていることは認めねばなるまい。その幻想性と欺瞞性も、またしかり。

なお、彼らの国民政党組織論で注目すべきことは、一つは、今度の綱領なり規約なりの新味として宣伝されている党幹部などの四選禁止制である。これは一見、党民主主義の新風らしくみえるが、ちゃんとぬけ道がつくられている。曰く、『個々の党活動家の場合、一般に認められた権威と高い政治的、組織的その他の素質によつて、それより長い期間にわたり、指導機関にひきつづき選出されることもできる。』商業紙がうまく表現しているように『フ首相らは例外』というわけである！ 実際には党内民主主義さえ存在しておれば、別に四選禁止案などどうでもいいことである。私には、むしろこういう規約は、党内民主主義の欠如をこそ現わしているように思われる。第二は新綱領は、社会主義下の『全人民の国家』とやらが、一定の条件つきとはいへ、二〇年後の共産主義では、一応消滅するこ

のないところには、一般に政治の余地はないからである』も、同一の思考をあらわしている。社会主義社会にプロレタリア独裁が存在するのをおかしいように、共産党などという政党が存在することが、そもそもおかしい話である。そしてこれが、ほんもののマルクス主義的見解なのであるが、では、フルシチョフ綱領は如何に？

『ソ連邦では社会主義が勝利し、ソヴィエト社会の統一が強化した結果、労働者階級の党、共産党は、ソヴィエト国民の前衛にかわり、国民の党となり、社会生活のすべての面での指導的影響力を拡大した。党は我々の時代、偉大な革命的変革を行なっているソヴィエト国民の英智であり、榮譽であり、良心である。党は、鋭く将来を見通し、科学的に基礎づけられた前進運動の道を人民に示し、大衆のなかに巨大なエネルギーをよびさまし、壮大な課題の解決へと導いている。共産主義の全面的建設期の特徴は、ソヴィエト社会の指導力、主導力としてのソ連邦共産党の役割と意義がますます高まることである。』

大変なものらしいが、いずれにしても、社会主義段階後期ともいふべき『共産主義の全面的建設期』においてさえ、党は消滅せず、反対にその『役割と意義がますます高まる』というのである。但し、党は党でも『労働者階級の党』としてではなく、『ソヴィエト国民の前衛にかわり、国民の党』となった党である！

ソ連共産党は、もう労働者階級の党ではない！フルシチョフ製国民政党論！我が国には左翼社会民主主義と右翼社会民主主義（民主社会主義）の間に、階級政党か国民政党かの論争があつて、『進歩的インテリ』諸君は、右派の国民政党論を大いに攻撃したものだ

とを認めている。しかるに、スターリニスト官僚の本丸たる党については、それすらハッキリしない。二〇年後の共産主義では覚ほどなるのか？ 消えるのか、存続するのか？ 明言しないところは甚だ意味深重といわねばならぬ！

以上、私は国家—政治の面でフルシチョフ綱領が、いかにマルクス主義の漫画にすぎないかを述べてきた。だが別して我々が留意しなければならぬ点は次の点にある。

レーニンは『国家と革命』(第二)でいった。

『プロレタリアートは国家を必要とする。——このことは、あらゆる日和見主義者、社会排外主義者およびカウツキー派が反復しているところであり、これがマルクスの学説だと確言している。しかし彼らは、それに次のことを附言することを、「忘れている」。第一に、マルクスによれば、プロレタリアートにとって必要なのは、ただ死滅しつつある国家、すなわち直ちに死滅しはじめるように、かつまた、死滅せざるをえないように構成された国家のみである。』
では、いかにすれば、『直ちに死滅しはじめるように、かつまた、死滅せざるをえないように構成された国家』は可能であるか？ 恐縮ながら拙著の一部を引かしてみよう。

『レーニンはいう。「官吏制度を即時に、全面的に、かつ徹底的に廃棄することは論外である。これはユートピアだ。しかしながら、古い官僚機関を即時に破壊すること、および一切の官吏制度を漸次なくせしむる新らしい官吏機関を直ちに建設しはじめること、これはユートピアではない。これはコンミュニンの経験である。これは革命的プロレタリアートの直接当面の任務である」と。』

では「一切の官吏制度を漸次になくせしむる新らしい官吏機関」は、いかにして可能であるか？ レーニンは答える……。

「マルクスは、まさにコンミュニンの実例によって次のことを示した。——社会主義治下では役員は「官僚」たること「官吏」たることをやめる。そしてこのことは、選挙制のほかに、さらに随時のリコール制を施行し、さらにまた俸給を平均的労働賃金の水準へ還元し、さらにまた、立法と執行をかねた行動的団体をもつて、議会的機関に代替させることに比例して行われる、と。」(なお、このことは、「住民の多数者及び全住民一人々々による国家機能の遂行」ということと密接不可離の関係にあることは言をまたぬ。)

実に、ここに「支配階級として組織されたプロレタリアート」と「もつとも完全な、もつとも徹底的な民主主義の獲得」との合致がある。実にここにこそ、コンミュニン国家の最高諸原則があるのであり、この骨組なしに、プロレタリア民主主義はありえない。そしてプロレタリア民主主義なきプロレタリア独裁はありえない。プロレタリア民主主義ぬきのプロレタリア独裁は、まぎれもなく悪質の官僚独裁といわねばならぬ。……

右の三原則の実施なくしてプロレタリア民主主義はなく、また、かかる原則の実施を通じてでなければ、レーニンのいつているように、——「万人が統制と監督の職務を遂行し、万人が一定の期間「官僚」になり、そのためにまた、何人も「官僚」になりえなくなる状態へ」移行することができないのである。この原則の実施を通じてのみ、「監督および經理の、ますます簡單化しつつある機能が、すべての人によって順番に遂行され、そして後には、それがひとつ

の習慣となり、かつ最後には、人間の特殊の層の特殊機能として消失する場合の秩序的漸次的な創造をもたらすのである。」すなわち、国家の完全な死滅であり、元来、プロレタリア国家は、「過渡的制度」として、かかる自己止揚的要素をそれ自身のうちに包蔵しており、また、おらねばならぬものである。右の諸原則の実施のみがそれを可能にする。これを否定せるスターリン主義国家が、自己死滅どころか、いよいよいでて「社会の公僕から社会の上に立つ主人」として、強化されつつあるのは、あやしむに足らないことである』
(『ソ連「社会主義」の批判』二七—三〇頁)

問題は、うまそうな美字麗句をならべ立てることではなく、実際に、忠実に、疑う余地なしに、断乎として、右のコンミュニンの諸原則を実行することである。この実行なしには、『歴史的発展は不可避免的に国家の死滅をもたらす』などといったも絶対に死滅することとはありえない。元来、プロレタリア独裁国家が、本来の意味の国家でなく、『半国家』(「セミ・ステート」)であるといわれるのは、それが最初から自己止揚的性質をもっているからである。勝ちやすきに勝つ、という言葉があるが、国家は初めから死にやすくしなれば絶対に死ぬものではない。

私は、もうすこしで満六十才をむかえる。いうところの『全人民国家』がソ連で死滅するのは、あと二〇年後という話だから、生きて立ち合うことはできなからう。それにもかかわらず、今日、私はタイコ判をおいてもいい。ソ連における『第二の補足的革命』なしに、その国家が死滅することは絶対にないであらうと。スターリニストは、レーニン・トロツキー下のソ連労働者国家をコン

ミュニン型でないものに根本的にかえてしまった。そして今や『全人民の国家』など……等々という美字麗句をパイならべ立てている。いやむしろ、そうでないからこそ美字麗句を以って扮飾する必要があった、といった方が正しからう。しかしその美字麗句すらも、いかにマルクス主義の漫画にすぎなかったか、政治の面では、既にみたところである。

では節をあらためて経済の面に入る。(以下次号)

(一九六一年九月下旬)

トロツキーの組織論

立川 美彦 訳

二〇年前にトロツキーは暗殺された。あらゆる種類の坊主的哀悼を蔑んだ、この偉大な革命家に対する最良の手向けは、彼の思想の批判的検討であろう。我々がここに提出する研究は、彼が濼測たる青年時代に提起した問題、その後の彼の一生につきまとい、今日でもなお我々と共にある問題に関するものである。それは党と階級との関係および前者による後者の代位(Substitution)の危険という問題である。

トロツキーの警告

政治活動の極く初期、たった二四才のときに、トロツキーは次のように予言した。すなわち、レーニンの党組織論は、党が「勤労諸階級に代位し」労働者の思想や欲求にはおかまいなく名実ともにその代理として行動するような状況をもたらすにちがいない、と。

レーニンの組織論は、「党組織が党全体にとって代り、次には中

央委員会が組織にとって代り、最後に「独裁者」が中央委員会にとって代る……といった状態を生み出すであろう。(「エヌ・トロツキー、新」ジュネーブ、一)
九〇四年、五四頁)

レーニンの、職業革命家より成る、中央集権化された党に対して、トロツキーは西欧社会民主主義諸党を範とした「基盤の広い党」を対置した。彼は彼の造語に「代位主義」(Substitutionism)を防ぐ唯一の保証を、民主的に運営され、プロレタリア諸大衆の統制をうける大衆党(マス・パーティー)のうちに見出した。

彼は結論のなかで、画一性に対して次のように抗弁している。「新制度の諸課題はきわめて複雑なものとなるだろうから、その解決はさまざまな経済的建設方法のあいだの競争をつうじて、長期にわたる「論争」をつうじて、社会主義世界と資本主義世界のあいだのみならず、社会主義内部の諸傾向、プロレタリア独裁が何十、何百という新たな問題を提起するやいなや不可避免的に出現するにちがいない諸傾向のあいだの組織的斗争をつうじてしか達成されよう

がない。いかなる強力な「支配的」組織も……これらの傾向や議論を抑圧することはできないであろう……。社会に対して独裁を行使する能力をもつプロレタリアートは、自らに対するいかなる独裁をも許容しないであろう……。労働者階級が……その隊列のうちに極く少数の政治的病弱者を抱え……陳腐な観念の脚荷(パラスト)を積んでいることは疑いないが、時いたればそれらを海中に投げ棄てねばならぬ。いまやその独裁期において、労働者階級は頭の中から誤った理論やブルジョアの経験を洗い流し、その隊列から美辞麗句を弄する政治的駄弁家や背後を気にしてばかりいる革命家たちを追いだしてしまわねばならないであろう……。しかしながら、この錯雑した課題の解決は、数人の選り抜かれた人々……または清算・懲戒の権限を授けられた一個人をプロレタリアートの上位に置くことによつては達成されえない。」(同、一〇五頁、アイ・ドイッチャー「武装から重引」)

レーニンの党組織論に固有の「代位主義」の危険に関するトロツキーの見解と画一性に対する彼の抗弁とのうちに、我々は彼の予言者の才能、生活のあらゆる側面を統一的な体系にまとめあげる能力を発見する。

一九一七年以降のボルシェヴィズムの歴史は、一九〇四年のトロツキーの警告を完全に擁護したものと想われる。しかし、トロツキーは二度とこの警告に立ち戻らなかつた。

本稿において我々は、彼が立ち戻らなかつた根拠を発見し、特殊的には「代位主義」の根源をあきらかにし、一般的には党と階級との関係の問題を考察することにしよう。

進歩的な「代位主義」

「代位主義」はロシア革命運動の伝統のなかにある。一九世紀六〇年代および七〇年代に、小グループのほんの一握りの知識人たちが、強大な専制政治に反対して斗っていたが、その際農民大衆は、彼らの名と彼らの利益とにおいて活動していたこれらの英雄的なナロードニキ(Populist)に対して、無関心に留まるか、もしくは敵意を抱いてさえいた。

いかなる種類の大衆運動もまだ現われていなかった時代の一般的無関心状態にあつては、これらほんの一握りの知識人の謀反が重大な進歩的役割を果たした。マルクスは一度ならず、彼らに最大の讃辞を与えることを惜しまなかつた。たとえば彼は、まさに八人民の意志団Vが潰滅した年に、彼の長女に宛ててかいている。「この人々は賞讃すべき人々だ、メロドラマ的なポーズも飾り気も全くない、真実の英雄だ。わいわい騒ぐことと行動することは、和解しえない正反対の事柄である。」

しかしながら「代位主義」は、すでに大衆運動が勃興し、党がこれにとつて代らうとするとき、一つの反動的な、危険な要素となる。

「代位」を回避するための客観的条件に関するトロツキー

科学的な思想家であつたトロツキーは、党の役割とその階級に対する関係についての党理論——その正否はともかく——のうちに「代位主義」を防止し、労働者の政治運動における真の民主主義を確

立するための十分な保障を見出すことができるとは信じなかった。

それを回避するために必要な客観的諸条件は、トロツキーによつて、彼が上掲の著書を執筆する数カ月前に、明確に定式化された。

彼は、ロシヤ社会民主主義労働党第二回大会（ロンドン）において、次のように述べた。「労働者階級の支配は、労働者大衆が一致してそれを欲するに至るまでは、想像することもできない。その時が至れば、彼らは圧倒的な多数となるであろう。これはちつばけな陰謀家団体や少数者の独裁ではなく、龐大な多数者の利益において反革命を防止するための龐大な多数者の独裁となるであろう。手短かにいえば、それは真の民主主義の勝利を表わすであろう。」

「共産党宣言」の内容をいい換えたこの発言は、「代位主義」に対するトロツキーの斗争と完全に一致している。もし多数者が支配するならば、少数者がその代理として活動する余地は全くない。

同じ時期にレーニンはいかなるプロレタリアートの独裁も、プロレタリアートが社会の少数者にすぎない場合は、反民主主義的な——彼の言葉では——「反動的な諸結果」をもたらすにちがいない、と少からず強調した。

トロツキーが自分自身の言葉を忘れて、ロシヤにおける革命運動の当面の目標として労働者政府を要求したとき、レーニンは鋭く答えた。「そんなことはありえない！ なぜなら、革命的独裁が存続しうるのは、それが人民の龐大な多数者に依拠しているばあいのみであるから……プロレタリアートが多数派を形成する……政治的民主主義の段階を経過することなく、なんらかの他の道をつうじて社会主義を達成しようと試みるものは誰でも、経済と政治の両面

において、もつとも馬鹿げた反動的な結論に不可避的に到達するであろう。」（レーニン「全集」）

「代位主義」に対するトロツキーの警告とそれを防止するための唯一の保障としての「龐大な多数者の利益における龐大な多数者」の支配の強調とは、たしかに、彼が労働者が少数者にすぎなかった一九〇五年および一九一七年に労働者政府を要求したことと甚だしく矛盾する。トロツキーは、あらゆる形態の「代位主義」に反対する彼の首尾一貫した社会主義的民主主義的見解と、プロレタリアの少数者が全労働者の代理として社会の支配者として行動するという彼の永続革命論との矛盾の只中で引き裂かれている。ああ、この矛盾はトロツキーの思考における何らかの欠陥の結果ではなく、首尾一貫性の欠如の結果でもなく、客観的諸条件の現実的矛盾の反映なのである。

革命の性格とその実現の時機とは、労働者階級の龐大さやその階級的自覚と組織化の水準によって左右されるだけではなく、数多くの錯雑かつ矛盾した諸要因によって左右される。革命を導く諸要因——経済的緊張、戦争その他の政治的社会的激動——は、プロレタリアートの覚醒と同時に起るわけではない。客観的条件の全体が労働者に革命を強制する時に至っても、労働者階級のさまざまな部分や集団における意識の不均等性が極めて顕著に看取されるのである。ツァーリのロシヤのように、労働者の一般的文化水準が低く、組織と大衆の自己活動の伝統が弱い後進国にあっては、この不均等性は特に顕著であった。そこでは全体としての労働者階級が極めて少数にすぎなかったために、その支配、プロレタリアート

の独裁は、多数者の独裁ではなく、ほんの少数者の独裁とならねばならなかった。

ロシヤ革命が現実的に直面したデイレンマを克服するために——一方における少数者支配と、他方におけるメンシエヴィキの受動的節慾主義的態度（「プロレタリアートは、社会の少数者である」とを回避するため——トロツキーは次の二つの主たる要因に着目した。すなわち、ロシヤ労働者の革命的衝動と活動性、およびプロレタリアートが社会の多数者をなす一層先進的な諸国への革命の拡大。しかしながら、ロシヤ自体における革命的衝動の衰退と——それに劣らず決定的なことだが——資本主義の暗礁における西欧の革命的諸斗争の難破とを伴った「代位主義」の運命はどのようなものであったか？

「代位主義」はどのように行われたか——労働者対農民

党と階級との関係は、労働者階級の文化および革命的意識の水準によって影響を受けたが、他方それはまた、社会における労働者階級の特長な比重によつても、つまりこの階級の大きさと他の諸階級、とりわけ——ロシヤにあっては——農民との関係によつても影響を受けた。

さて、ロシヤ革命が——メンシエヴィキが主張したように——本物のブルジョア革命であったとしたら、あるいは——労働者と農民を区別しなかったアナキストや社会革命党が主張したように——本物の社会主義革命であったとしたら、問題は簡単であったであろう

う。革命的諸階級の相対的な社会的同質性は、マルクス主義政党内プロレタリアートに代位するいかなる傾向をも叩きつぶすに十分強固な鉄床を提供したであろう。

しかしながら、十月革命は二つの革命の混合物であった。すなわち、成熟せる資本主義の産物たる社会主義的労働者階級の革命と、勃興する資本主義と旧封建制度との斗争の産物たる農民の革命である。あらゆるときと同じように、農民は大土地所有者の私有財産を没収する十分な用意はあったが、彼ら自身の小さな私有財産を欲した。こうした理由から、彼らは、封建制度に対して反乱をおこす用意はあったが、社会主義に賛成してはいなかった。

したがって、十月革命における労働者と農民の勝利的同盟が、ただちに極めて緊張した諸関係によって引き継がれたことは、なんら驚ろくに足りないものである。白軍と、それに伴って大地主制度復活の危険が、ひとたび克服されるや、労働者に対する農民の忠誠はほとんど残らなくなった。農民は土地を分配してくれる政府を支持したのであったが、同じ政府が彼の生産物を都市の飢餓人口に供給するように要求しはじめたときには、問題は全く別のものになった。

労働者階級と農民の衝突は、十月革命の当初から、すでに一九一八年レーニンがソヴィエト選挙において労働者の一票を農民の五票に同等と数える反民主主義的な手段に逃げ場を見出さざるをえなくなるという事実に表示された。

いまや革命そのものが、農民に対するプロレタリアートの相対的比重を、プロレタリアートの損害に交錯せしめた。

第一に、内乱が、労働者階級の特長な比重を恐ろしいまでに低下

せしめた。革命における労働者階級の勝利が、逆説的に、労働者階級の量と質の低下をもたらしたのである。

都市労働者の多くは農村との密接な関係を保っていたので、革命が過ぎ去るや、彼らの相当数は土地分配の分け前にあずかるために田舎に急ぎ帰った。この趨勢は、当然都市にもっとも手痛い打撃を与えたところの食糧不足によって、いっそう拍車をかけられた。そのうえ、新しい赤軍は、以前のツァーリの軍隊と全く対照的に、農民と比較して多くの工業労働者を含んでいた。これらすべての理由によって、都市人口、特に工業労働者の数は、一九一七年から一九二〇年にかけて極めて急激に減少したのである。人口は、ペトログラードでは五七・五パーセント、モスクワでは四四・五パーセント、四〇の地方都市では三三パーセント、その他五〇の大都市では一六・六パーセント、それぞれ減少した。大きな都市ほど、人口の相対的損失は大きかった。人口がいかに激減したかは、工業労働者数が一九一七年の三〇〇万から一九二一―二二年の一二四万へと五八・七パーセントも減少した事実によって、いっそう明らかに示される。こうして、工業労働者数は五分の二に低下した。そしてこれらの労働者の生産性は、その数以上にさえ低下したのである。(一九二〇年、ロセントにすぎなかつた。)
(一九一三年の約一三三パーセント)

これら残留労働者の大多数は、各方面の戦線にとっても、国家、労働組合、党の運営にとっても必要とされないような、もっとも遅れた労働者であった。国家行政と軍隊とは、当然のことながら、最古の社会主義的伝統と最大の政治的経験と最高の文化的水準の備わった労働者の部分から、大方の新たな補充を引きだしていたのである。

る。

労働者階級の士気沮喪

労働者階級の断片化は、さらにいっそう悪い効果をもった。労働者階級の残留部分は、食糧不足に強いられて、集団として団結せる一階級としてよりも、むしろ個人主義的な小商人として振舞うことを余儀なくされた。一九一九―二〇年には、国家は都市の消費する穀物のたった四二パーセント、他の食料品についてはもっと小さなパーセンテージを供給したにすぎず、残りのすべては闇市で取引されたものと計算されている。(エル・クリツマン、『偉大なロシア』労働者による家具や衣類の売却、彼らが工場からもちだしたベルトや道具類の売却は、極くありふれたことであつた。)(『第四回全露労働組合大会』第一巻、一九二二年、六六―一九頁)工業労働者階級のアトム化と士気沮喪のなんと甚しいことか！

個人的な闇商売に依拠するこうした生活様式のために、個々の労働者は、農民とほとんど区別がなくなつた。一九一九年一月の第二回労働組合大会でルズタークが述べたように、「我々の見るところでは、大多数の工業中心地において、工場の生産縮小の結果、労働者が農民大衆に併呑されつつあり、労働者人口は半農民的、ときには純農民的な人口に変化しつつある。」(『第二回全露労働組合大会』)

こうした条件の下で、ボルシェヴィキ党の階級の基盤は崩壊した——ボルシェヴィズムの諸政策のなんらかの過誤や、党の役割とその階級に対する関係とについてのボルシェヴィズムのあれこれの観念のせいではなく——もつと強力な歴史的諸要因の結果として。労働者階級の士気沮喪

労働者階級は階級としての地位を喪失してしまつていた。

なるほど一九二一年五月、レーニンは絶望あるいは必死の想いで語ることができた。「プロレタリアートは階級としての地位喪失を経験せねばならぬときさえ、なおその任務たる権力の獲得と保持とを遂行することができる」(レーニン『全集』第一二六巻、三九四頁)

しかし、これはまたなんと極端な「代位主義的」定式化であらうか！階級を失つた労働者階級の支配——姿を消したチェツシャー猫の笑い！

ナロードニキのばあいには、「代位主義的」観念は、第一義的主題ではなくて、なによりも客観的社会的諸条件に根ざしたところの人民の一般的無関心と自失との結果であつた。そしてまた、ボルシェヴィキ的「代位主義」のばあいには、それはゼウスの頭からミネルヴァが飛び出したようにレーニンの頭から飛び出したのではなくて、もともと少数の労働者階級の比重低下、断片化、農民大衆への解消という、農業国における内乱の客観的諸条件から生れてたものであつた。

一つの類推が、十月革命以後の「代位主義」の抬頭をあきらかにする助けになるかもしれない。それには、大衆的ストライキが長期化したばあいに、労働者の多数は疲れはてて士気沮喪し、ただ少数の者だけが、雇主の攻撃と大勢の仲間の嘲笑と憤慨との的となりながら、ピケット・ラインを守りつづけている光景を想像すればよい。こうした悲劇的状况は、階級斗争の戦場で幾度も繰り返される。白衛軍に直面したボルシェヴィキは、もし自分たちが斗争を放棄したならば、恐るべき流血が人民に襲いかかり、自分たち自身の孤立

も必至となることを知っていたからこそ、逃げ道を探さなかつたのである。「代位主義」は、あらゆる物神崇拜と同様に、社会的行き詰りの反映であつた。

党機関による党の「代位」

この地点から、党内民主主義の廃止と党の官僚支配の確立までは、ほんの一步である。

スターリニスト——メンシェヴィキその他のボルシェヴィキ敵対者はいうにおよばず——がつくりだした神話とは逆に、かつてのボルシェヴィキ党はけつして一枚岩的、すなわち全体主義的な党ではなかつた。それとは似ても似つかぬものであつた。党内民主主義は党生活において常にもっとも重要なものであつたが、なんらかの理由でこの要因は、この問題を扱う文献の中で、大方上手にいい抜けられてきた。

したがって、ここで若干脱線し、ボルシェヴィズムの歴史における党内民主主義の程度と一枚岩主義の欠如とを明らかにする数多くの事例を示すために、スペースをさくことは意味のあることである。

一九〇七年、革命の最後の敗北の後、ツァーリの国会(ドゥーマ)の選挙に対していかなる態度をとるべきか、という問題をめぐって、党は危機に見舞われた。ロシア社会民主主義労働党第二回協議会(七月開議)にボルシェヴィキもメンシェヴィキも代表を出席させていたが、そこで一つの奇妙な事態がもたらがった。すなわち、全ボ

ルシエヴィキ代議員は、レーニンを除いて、国会選挙ポイコットに賛成し、レーニンはメンシエヴィキの側に投票した。(「ロシア共産党集」、第四版、第一卷、第一二六頁) 三年後、ボルシエヴィキ中央委員会総会は、メンシエヴィキとの統一を呼びかける決議を通過させた。このときも唯一の反対意見は、レーニンのものであった(「ロシア共産党集」、第五版、第一卷、第一四六頁)。

一九一四—一八年の戦争が勃発したとき、党支部のうちどれ一つとして、レーニンの唱えた革命的敗北主義の立場を採ったところはない(「ロシア共産党集」、第五版、第一卷、第一四六頁)。そして、一九一五年におこなわれた数名のボルシエヴィキ党指導者に対する裁判の際、カーメネフと二名のボルシエヴィキ国会議員とがレーニンの革命的敗北主義の立場を法廷において公然と否認した(「ロシア共産党集」、第五版、第一卷、第一四六頁)。

二月革命の後には、党指導者の大多数は革命的ソヴェト政府に反対し、連立臨時政府を支持した。ボルシエヴィキ・フラクシヨンは、一九一七年三月二日のペトログラード・ソヴェトに四〇名の代議員を送っていたが、ブルジョア連立政府に権力を移行させる決議案が投票に付されたとき反対投票をしたのは一九名だけであった。(「ア・シリヤニコフ」一七七年、ロシア語) 党ペトログラード委員会の会議(三月五日)では、革命的ソヴェト政府の決議案は、たった一票をえたにすぎなかった。(「ア・エス・ブノフ」他、「ロシア共産党集」、第五版、第一卷、第一四六頁) 同、およびレーニン「全集」(第三版、第二卷、四三三頁) 当時スターリンによって編集されていた「ブラウダ」は、どうみても革命的とはいえない立場をとった。それは、臨時政府を「それが反動または反革命に対して斗争するかぎりにおいて」支持する、とはっきり宣言した。(「革命史」前出、第一卷、三〇五頁、角川版、第二冊、九八頁) またさらに、レーニンは一九一七年四月三日ロシアに帰って、彼

ルイコフ、ピヤタコフ、ミリュチン、ノギンらにひきいられた強力な分派は、蜂起に反対した。それにもかかわらず、政治局が中央委員会によって選出されたとき、ジノヴィエフもカーメネフも排除されなかった。

権力を握ったのちも、党指導部の対立は、ひきつづき以前と同様に鋭いものであった。革命後数日たつて、多数の党指導者が他の社会主義諸党との連立を要求した。これに固執したものの中には、内務人民委員ルイコフ、農業人民委員ミリュチン、商工人民委員ノギン、教育人民委員ルナチャルスキー、労働人民委員シリヤニコフ、共和国議議長カーメネフ、およびジノヴィエフが含まれていた。彼らは政府から辞職するところまでいって、レーニンとその支持者たちに他の諸党派との交渉を開くことを余儀なくさせた(交渉は、メンシエヴィキが連立政府からレーニンとトロツキーを排除することを固執したので決裂した)。

またさらに、憲法制定議会の選挙を実施するか延期するかの問題をめぐって(一九一七年二月)レーニンは中央委員会の少数派となり、彼の忠告に反して選挙が行われた。(「ドノッキ」一九四七年、三四—三六頁) 少しのちに彼はプレスト・リトヴスク対独和平交渉の問題をめぐって、再度の敗北を喫した。彼は即時平和を提唱した。しかし、一九一八年一月二日開かれた中央委員会と労働者活動家の会議において、三二票を獲得したブハーリンの「革命戦争の動議」および一六票を獲得したトロツキーの「講和でもなく、戦争でもなく」の動議に対して、彼の動議はたった一五票を獲得しすぎなかった。(「ブノフ」前出、五二—五三頁) 翌日の中央委員会の席上で、レーニンはふたたび敗北した。しかし、

の有名な「四月テーゼ」——党を十月革命に導く光——を公にしたとき、一時は彼自身の党の中で少数派になった。「四月テーゼ」に対する「ブラウダ」の論評は、それは「レーニンの個人的見解」であって、極めて「うけいれがたい」というのであった。(「ブラウダ」四月) 一九一七年四月八日に開かれた党ペトログラード委員会の会議では、「テーゼ」はたった二票をえたにとどまり、反対は一三票、棄権一票であった。(「ブノフ」前出) しかし、四月一四—二二日に開かれた党協議会ではテーゼは賛成七一反対三九棄権八で多数を獲得した(「ロシア共産党集」決議決定) 同じ協議会は、もう一つの重要問題——すなわち、社会主義諸党のストックホルム会議に党が参加すべきかという問題——をめぐってレーニンを敗北せしめた。彼の見解に反対して、それは全面的参加に賛成決定したのである。(「レーニン」全集、第六版、第二卷、六五—六六頁)

またさらに、九月一四日にケレンスキーが「民主主義会議」を召集したとき、レーニンはそのポイコット案に強く賛成した。中央委員会は九対八で彼を支持したが、票数が接近していたので、最終決定は、「民主主義会議」におけるボルシエヴィキ・フラクシヨンのから構成されることになっていた党会議に任された。この会議は、七七対五〇で、ポイコットしないことに決定した。(同上、第二卷、六五—六六頁)

十月以降

あらゆる問題の中でもっとも重要な十月反乱の問題が日程にのぼったとき、指導部は再度鋭く分裂した。ジノヴィエフ、カーメネフ、

ついに彼は、諸事件の圧力のもとに、彼の観点を中央委員の多数に説得することに成功し、二月二四日の会議には彼の講和動議が七票を獲得したのに、反対は四票、棄権も四票であった。(同上、二頁)

しかしながら、党内民主主義は、上述の客観的諸事情の圧力のもとで、衰退していった。孤立した党は、声をあげて論じあえない同意を唱えることをおそれるようになった。あたかも彼らは、激流の只中でもまれる小舟に乗っているようであった。自由な討論の雰囲気は、いやが上にも消え去った。

党内民主主義の侵害は、ますますひどくなつていった。たとえば、カー・カー・ユレネフは第九回大会(一九二〇年四月)において、中央委員会が批判を抑圧するために用いた批判者の事実上の追放を含む手段を問題にした。「ある者はクリスチアナに行く、ある者はウラルに、ある者はシベリヤにやられた。」(「ロシア共産党集」) 中央委員会は党に対する態度において、「責任ある内閣ではなく、無責任な政府」となっている、と彼はいった。同じ大会でヴェ・エヌ・マクシモフスキーは、中央が責任をとる「官僚的中央集権」に「民主的中央集権」を対置した。「魚は頭から腐りはじめるものだ」と彼は述べた。「党は官僚的中央集権の影響に頭から侵されはじめる。」(同上、六頁) またサプラーノフは、「諸君が選挙権がどうの、プロレタリアートの独裁がどうのと何辺唱えたところで、中央委員会に党の独裁を切望している以上、実際にはこれは党官僚の独裁を導くのだ」と断じた。(同上、七頁) 第一回大会でリヤザノフは次のように述べた。「我々の中央委員会は、結局のところ特殊な制度なのだ。イギリス議会は全能であり、男に変えることができないだけだといわれる。我々の中央委員会の

力はもっと大きい。それは極めて革命的な男性をすでに一人ならず老婆に変えた。こうした老婆の数は信じ難いほど増加している。」
〔「ロシア共産党」(ボ) 第一 彼はさらに、党生活のあらゆる側面に対する中央委員会の干渉を非難した。ヴェ・コシオールは、党および労働組合の地方指導者が政治局や組織局の決定によって解任される多くの実例をあげた。「多くの労働者が党を去りつつある。これをどう説明したらよいのか?同志諸君、このことは、我々の間で培養されつつある、真の党規律とはいかなる共通点もたない腕ずくの体制によって説明されねばならぬ。我々の党は材木を運搬し、街路を掃除し、投票もするが、いかなる問題をも解決しない。しかし、健康のすぐれないプロレタリアートは、こうした環境にとりまかれていくことに我慢できないのだ。』(三四頁) 第一二回大会でプレオブラジエンスキーは、県党委員会の書記の三〇パーセントが党中央委員会によってその地位に「推薦され」ており、これは党役員の選挙原則に違反するものである、と不満を述べた。(「ロシア共産党」(ボ) 第一 二三四頁) この地点から書記長の絶対的支配までは、ほんの一步であった。

孤立せるロシア革命の悲劇

我々は、躊躇することなく、いうことができる。支配的労働者階級が資本家階級にとって代ることは——資本主義がまだその幼年期にあり、人民の大多数が小資本家(農民)であったところでは——マルクス主義政党が労働者階級にとって代る原因となった、そしてこのことが官僚が党にとって代り、ついには書記長の個人的独裁を

導く結果となったのである、と。

マルクスとエンゲルスは、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係に代置するための歴史的諸前提がまだ存在しないときに、労働者階級が権力を握ったならば、何が起るであろうか、という問題を一度ならず取り扱った。彼らは、そういうばあいには、労働者階級は発展しつつある資本主義のために行手を照らすことになる、と結論した。エンゲルスは書いた。「およそ極端な党派の指導者が遭遇しうるいちばんわるいことは、自分の代表する階級の支配権のためにも、またこの階級の支配に必要な方策を実行しうるためにも、運動がまだ熟していないような時期に、自分が政權を握ることを余儀なくされる場合である。……こうして彼は必然的に解くべからざるディレンマのなかにおかれる。すなわち、彼がなす、ことは、彼のこれまでの全行動と原則、および彼の党の直接の利害と矛盾する。ところが、彼のなすべきことは実行できない。要するに彼は、彼の党、彼の階級ではなく、運動がちやうどその支配のためにまさに成熟しているところの階級を代表することを余儀なくされる。彼は、運動そのものの利害のために、縁もゆかりもない階級の利害を実行しなければならぬ。そして、彼自身の階級を、空文句と約束とをもって、またあらゆる他の階級の利害がすなわち諸君の利害なのだという誓言をもって、追い払わなければならない。こういう歪んだ立場におちこんだものは、すくいがたくほろんでしまう。」(エンゲルス「下」(ロシア) 二九二七—二九二八頁)

革命の拡大のみが、この悲劇的運命からボルシェヴィズムを助けたことができたであろう。そして、この見通しにこそ、ボルシェ

ヴィズムは、その運命を賭けたのである。ロシア・プロレタリアートの革命的力量の限界にまで突き進まないように、袋小路(cul-de-sac)に行き詰まらないようになどと、ボルシェヴィキに忠告することができたのは、節慾主義者と臆病者だけであった。革命的ダイナミズムと国際的展望がボルシェヴィズムの心臓に脈打っていた。

階級、党および国家——「代位主義」固有の危険

しかしながら、ボルシェヴィキ党によって建設された国家が、党の意志ばかりでなく、権力に付いたボルシェヴィキをとりまく全社会的現実の意志をも反映するものであったとするならば、職業革命家の階級制度にもとづいたボルシェヴィキの中央集権と将来のスターリニズムとの間になんらの因果関係も全くなかったと結論してはならない。この問題をもう少し詳しく考察しよう。

革命党が苟くも社会主義革命にとって必要であるとすれば、この事実が、労働者のさまざまな部分や集団の間には文化的・意識的水準の不均等性があることを示している。もし労働者階級がイデオロギー的に同質な一階級であるならば、指導部の必要はならん存在しなかったであろう。いやいや、革命は大衆の全体が一定の知的水準もしくは階級意識の水準に到達するまで待つてはくれない。資本主義によって物質的にも精神的にも抑圧されながらも、労働者の異なる部分は、階級的自立の異なる水準を示す。もし労働者階級のさまざまな部分に意識の相異が存在しないならば、先進国の資本家階級は、自らのためにいかなる社会的基盤も見出し難いであろう。こ

うした条件のもとでは、階級斗争は漸次的進歩のもつとも円滑な行動となるであろう。他の労働者の敵対——ストライキ破り(労働者)や警官や兵士(いずれも制服を着た労働者)の脅威——に直面することもない以上、そもそも階級斗争がほとんど問題とならないであろう。もし労働者階級が同質的であるならば、労働者国家の必要性もないであろうし、革命後には強制力も必要であろう。いやいや革命はこうした無政府主義的・自由主義的白昼夢とはなんらの共通点もたない。労働者階級の規律は、資本主義のもとでもプロレタリア革命の直後にも、さまざまな発展段階にある労働者の存在を、すなわち指導部の存在を前提とするばかりでなく、自覚と強制の結合をも前提とする——労働者階級は、資本家の野蠻の母斑を一挙に振り落すことはできない。

資本主義のもとでは、規律は、労働者に対して、外部的強制力として、資本が彼に向ける力として、対立する。社会主義のもとでは、規律は意識の結果であり、自由な人民の習慣となるであろう。過渡期にあつてはそれは、二つの要素——意識と強制——の結合の結果となるであろう。労働者による生産手段の集団的所有、すなわち生産手段の労働者国家による所有は、労働規律における意識的要素の基礎となるであろう。同時に、集団としての労働者階級は、その制度——ソヴィエト、労働組合、等——をつうじて、生産における個々の労働者の訓練に関する強制力として現われるであろう。

個人と集団とのこの斗争、自覚の要素をその醜い対立物たる強制と結合する必要性、労働者階級が資本主義からうけつけた野蠻な手段を資本家の野蠻と闘うために余儀なく用いねばならない必然性

は、労働者が資本主義のもとでは精神的に解放されることがなく、一人前の人間に成長するためには全歴史時代を要するであろうということの証明に他ならない。

国家は、労働者国家でさえも、階級社会の醜怪な末裔であって、真の人間史は真に一貫した労働者国家の獲得をまつてはじめて第一歩を踏み出すであろうという点でアナキストに同意するとしても、国家は最後的には死滅するであろう。

労働者階級が、一つないしいくつかの党を必要とするという事実は、それ自体、労働者階級の分裂の証拠である。文化的に遅れているほど、労働者の組織と自治活動が一般に弱ければ弱いほど、階級とそのマルクス主義政党との間の知的分裂は、それだけますます大きくなる。労働者階級のこの不均等性からこそ、党およびその機関の自己運動という大きな危険が発生するのであって、ついには党が、階級の召使ではなくて、その主人となるに至る。この不均等性は、「代位主義」の危険の主要な源泉である。

革命に先だつボルシェヴィズムの歴史は、この危険に対するレーニンの斗争を雄弁に語っている。どんなにしばしば彼は——特に一九一七年の嵐の数ヶ月に——逡巡し妥協する党指導部とその機関に對立して、労働者大衆に訴えたことだろう。トロツキーが、レーニンと大衆と党機関の間の内部関係を、極めて正確に要約したように、「レーニンが強かったのは、彼が階級斗争の諸法則を理解していたからばかりではなく、彼が大衆の生々とした活動を精確にききわける耳をもっていたからでもある。彼は党機関を代表するというよりも、むしろ、プロレタリアートの前衛を代表した。彼は、かつ

を、遺憾ながら指摘せねばならぬ。アメリカのトロツキスト指導者ジュー・ピー・キャノンが、官僚的保守主義のかどで非難をうけたときトロツキーは、この非難は「いうところの『保守主義』の基盤として、いかなる社会的特殊利益も示していない以上、全くの心理学的抽象にすぎない」と述べた。(「トロツキー」の機軸、ニューヨーク、一九四二年八月頁) スターリンを原型とする一九一七年以前の「委員」連中の基盤としては、一体どのような「社会的特殊利益」があったのか？ トロツキーは、「委員」の保守的・反民主的性格を中心テーマとした最後の著作「スターリン」の中でも——嘘いつわりのない話——これを示そうとはしなかった。

トロツキーは必要を美德に変える

トロツキーが実際にどのような程度にまで必要を美德に変えたか、どのような一般的限度までは反民主的・反労働者階級的・「代位主義的」実践を正当化するようになったか、を指摘することは、本稿の範囲ではない。

一九二一年に彼がなした「労働の軍隊化」——国家によって課せられる強制労働——支持論に言及すれば十分である。労働組合は国家機関化されねばならない、と彼は述べた。我々は「新しい型の労働組合主義者、経済的諸問題にアプローチするのに分配と消費という角度からではなく、生産の拡大という角度からこれをおこない、それらの問題を取り扱うのにソヴェト政府に要求をつきつけて取引するの」とする手合の眼をもってではなく、真の経済組織

て地下の党を支持する主力部隊をなしていたこれらの労働者の中から、いまでは何千もの人々が彼を支持するであろうことを確信した。このとき大衆は党よりも革命的であったし、党はその機関よりも革命的であった。すでに三月、労働者と兵士の実際の姿勢は、多くのばあい嵐のごとく明々白々であって、ボルシェヴィキを含めたあらゆる諸党派が発する指令には全く同意していなかった。……他方、党機関の権威は、その保守主義と同様、当時やっとなり形成されはじめたばかりであった。レーニンが影響力を振ったのは、一個人としてというよりも、むしろ彼が党に對する階級の影響、機関に對する党の影響を体現していたからである。* (「トロツキー」スターリン、二〇四頁)

人間が歴史をつくる。そして一つの党に組織されたこれらの人間が、その相対的な人数の保証する以上に巨大な衝撃を歴史に与えるとしても、彼らだけが歴史をつくるわけではない。善きにつけ悪きにつけ彼らだけが、彼らの比較的大きな特殊の比重の原因であるわけではないし、階級の、そしてまたこの階級の中の彼ら自身さえもの、一般的歴史の原因であるわけでもない。

結論的にいって、階級に對する革命党の「代位主義」と闘い、したがってまた革命党の保守勢力への転化と闘うための唯一の武器は、階級自身の活動であり、その社会的仇敵にばかりでなく、それ自身の代理人たる党にも向けるところの、この階級の圧力である。

※ トロツキーがトロツキスト諸組織内部の官僚的保守主義の危険性の問題を扱う際に、馬鹿々々しいとして取合わず、官僚主義について単純にわりきった唯物論的解釈に逃げ込んだこと

者の眼をもってこれを見るような、精神的・独創的経済組織者」を必要とする。(「ドイツ、一九五〇年、四二頁から引用) 国家に對して、労働者国家に對してさえ、労働者を擁護するという原則はどこにいったのか？ 労働組合はこの点を怠ってよいのか？ トロツキーはこの問題に答えなかったし、問題を立てさえしなかった。「軍隊化は」と第九回大会で彼は述べた、「労働組合なら労働組合なりの軍隊化なくしては、一人々々の労働者が自分自身を、自由に進退をきめることはできない労働戦士と感ずるような、一つの体制の確立なしには、考えられない。転戦の命令が下れば、これを遂行しなければならぬ。これを遂行しない労働者は脱走兵として罰せられる。誰がこれを監督するのか？ 労働組合である。それは新しい体制をつくりだす。これが労働者階級の軍隊化である。」(「ロシア共産党」第一、二四四年次) に述べたように至った。「党の意志を妨害しようとする。二四年次のように述べるに過ぎない。なぜならば、党は、基本的諸問題の解決のためにプロレタリアートに与えられたところの唯一の歴史的手段であるからだ。すでに述べたように、自分自身の党を前にして誤りを認めることぐらいはしやすいことではない。私のあらゆる批判、あらゆる声明、あらゆる警告、あらゆる抗議——これらはすべて誤りにすぎませんでした、ということぐらいはしやすいことはない。しかし同志諸君、私は自分ではそう考えていないから、そういう風に私はいっている。党とともに、党をつうじてのみ、正しくありうる。

というのも、他に正しくなる道を歴史はもち合わせていないから。イギリスの諺に『正しくあろうがなからうが——祖国は祖国』というのがある。これよりもっと歴史的正当性をもって、我々はいふことができる。一定の具体的な場合には——正しくあろうがなからうが——党は党……。そして、我々のうちの誰かしらに不当と考へる決定を党が採用するならば、その人はいふだろう——正しくあろうがなからうが自分の党だ、この決定の結果を最後まで支持することにしよう。』※(「ロシア共産党(ボ)第十三回大会」)

※ クロンシュタットの反乱に対するトロツキーとレーニンの態度は、メンシェヴィキやアナキスト、その他トロツキーやレーニンに対する左翼批判者たちによって、しばしば、官僚主義的弾圧の実例として、引き合いにだされる。実際には、クロンシュタットの主たる側面は、都市に対する農民的・半農民的反乱にあった。それだからこそ、その鎮圧にあつては、すべての党内反対派が——シリヤニコフとコロンタイの労働者反対派を含めて——積極的な役割を演じたのであり、その反乱のうちにきたものは、小資本主義、農民に対する譲歩政策——新經濟政策(ネップ)——であつた。しかしながら、クロンシュタット問題は、トロツキーが反対派にくみする以前から存在し、一九二三年に至つて彼の指導のもとに合同を遂げたところのさまざまな反対派グループの問題とともに、特別に研究するに値する魅力的な問題である。

先進諸国において、労働者階級内部に占める党员の割合が、一九一七年なり一九〇五年なりのロシアと同じであると仮定すれば、党は数百万の党员をもたねばならないであろう。

先進諸国においては、かつてのロシアにおけるよりも、意識と文化の不均等性が小さなものであるが故に、党の相対的な大きさは、かつてのロシアよりも、いっそう大きなものでなければならぬ(労働者諸党の合法性もまた、これを助長する)。改良主義諸党の實際の大きさから、これと反対の結論を引きだす者は、革命的斗争における大衆の眞の役割を理解しない者である。改良主義の党は主として、議會等の選挙において票をひきつけるための道具である。そこでそういう党は、眞に活動的な大衆を党に擁護することを必要としない。こうした党の支持者は、概して、その党に積極的に加入したり、その機関紙を読んだりする必要を認めないのである。これに対して、革命党に対する大衆の積極的な支持は、比較的多数の労働者がそれに加ふる結果をもたらすにちがいない。

このことから、いくつかの小グループが、労働者階級の大衆はいうにおよばず、大衆の革命党にとって代ることはけつしてできないことがあきらかになる。※

それでは、革命党と階級との関係はどうか？

いかなる党も、改良主義の党にせよ革命党にせよ、保守党にせよ自由党にせよ、なんらかの目標に向つて指導するために支持を獲得しようとする。革命的な労働者党もまた指導しようとする。しかし、類似はここでおわる。この指導性が確立される方法と指導の性格とが全く異なるのだ。

労働運動におけるマルクス主義者の役割

労働者階級との関係における革命党の役割を評価する出発点として、我々は「共産党宣言」の言葉に立ち戻らざるをえない。「今日までのすべての歴史的運動は、少数者の、すなわち少数者の利益における運動であつた。プロレタリア運動は、膨大な多数者の、膨大な多数者の利益における、自覚せる独自の運動である。」諸工業国においては、ロシアにおけるよりも労働者の文化的水準はるかに高いであらうからして、すなわち農民の蛮群に取り巻かれていないこれらの国々においては勤労者大衆の社会的同質性が比較的高いであらうからして、革命以前からその勝利以後にわたつて大衆の意識の不均等性は、たとえ完全に消滅してはいないにせよ、かつてのロシアにおけるよりもずっと小さなものであらう、と考へることができよう。

このことから、多くの結論を導くことができる。
第一に、全体としての労働者階級と比較した革命党の規模について。一九〇六年十月、ロシア社会民主主義労働党は(ボルシェヴィキ、メンシェヴィキ両分派を合わせて)七万の党员を擁した。同じ時期に、ユダヤ人「ブント」は三万三千、ポーランド社会民主党は二万八千、レット人社会民主党は一万三千であつた。結局全部で、非合法の社会主義諸党は、党员数一四万四千であつた。(レーニン「全集」一九一七年八月、ボルシェヴィキ党の党员数は二〇万であつた。平均すれば、二五都市において、工業労働者の五・四パーセントがボルシェヴィキ党员であつた。)(「ロシア共産党(ボ)第六回大会」)

指導の仕方には三つの種類を想ひ浮べることができ、あまりよい呼び方がないので、教師の指導、職長の指導、斗う仲間の指導と呼ぶことにしよう。小さな分派によつて示される第一の指導は、「黒板社会主義ブラックボード・ソーシャリズム」(イギリスにおけるこの種の極端な例がSPGB(イギリス社会党))であり、教授的方法が斗争への参加によつて代る。職長—労働者もしくは将校—兵士の関係をともなつた第二の指導は、すべての官僚的な改良主義およびスターリニストの諸党を特徴づける。幹部会を構成する指導部が労働者のなすべきことを決定し、労働者は積極的に参加することがない。これら二種類の指導を特徴づけるものは、指令が一方的になされること、指導者と大衆とのやりとりが独白になることである。

第三の指導は、ストライキ委員会とストライキ中の労働者、もしくは労働者代表委員とその兄弟たち、の間の指導に類似している。革命党とその外部の労働者とのやりとりは、対話でなければならぬ。したがつて、党は眞空の中で戦術を發明するのではなく、大衆運動の経験から学び、次にそれを一般化することを第一の任務とすべきである。労働者階級の歴史に現れた偉大な諸事件が、この主張の正しさを疑問の余地なく示している。一八七一年のバリの労働者は、マルクスが労働者国家の性格と構造の概括を与える以前に、新しい型の国家を——常備軍と官僚とをもたず、すべての官吏は労働者なみの賃金をうけとり、いつでも解任できるものとされる国家を——樹立した。また、一九〇五年のペトログラードの労働者は、ボルシェヴィキ党とは別個に、事実上ボルシェヴィキ地方指導部の反対

と、レーニンその人からは憎悪とはいわぬまでも少くとも疑惑をうけながら、ソヴィエトを樹立した。したがって我々は、ローザ・ルクセンブルグが一九〇四年に次のように書いたことに同意せざるを得ない。「社会民主主義の斗争戦術の主要な特徴は、それが『発明され』るのではなくて、基本的な階級斗争の中で継起する一連の偉大な創造的諸活動の結果たることにある。ここでもまた、無意識的なものが意識的なものに先行し、客観的歴史過程の論理が、その担い手の主観的論理に先行する。」(「ノイエ・ツァイト」一九〇四年、四九一頁)

マルクス主義者の役割は、階級斗争の生きた発展の経験を一般化すること、社会を社会主義的基盤の上に再組織する労働者階級の本能的運動に意識的表現を与えることである。

労働者階級は断じて一枚岩ではないが故に、社会主義への道は地図に描かれてはいないが故に、革命党の中には戦略と戦術の広範な相違が存在しうるし、存在しなければならぬ。他にとるべき道は官僚主義的な党、すなわち「指導者」をもったセクトである。「いかなる党内分派斗争も、結局はつねに階級斗争の反映である」(「マルクスの機軸」二一九頁)というトロツキーの十把ひとからげ式の評言はここで遺憾の意を表せざるを得ない。これでは、人間の思想を物質的諸条件から直接に生起するとす俗流唯物論者の解釈にほぼ等しい！レーニンをルクセンブルグから、あるいはトロツキーをレーニンから(一九〇三—一九〇七年)ひき離したのはどんな階級の圧力であったというのか、一九〇三年レーニンとともに、一九〇四年彼に反対して、一九〇五年彼に反対し、ふたたび彼とともに(そしてついにレーニンと革命運動とに事実決裂し、階級の敵に与するに

至るといふブレハールノフのジグザグ運動の中に、どんな階級斗争の変化を認めようというのか？レーニンとルクセンブルグの間の帝國主義論の相違点は、階級社会における両者の立場の分析からひきだされうるのか？科学的社会主義は論争によって生き、豊かにされねばならぬ。そして、同じ基本的仮定から出発し、同じ分析法を用いる科学者も、あらゆる研究分野で意見を異にするのだ。

党が大衆との間に対話をおこなうことができるためには、党が労働者階級の驚くべき活動能力を信頼するばかりでなく、党が国の情勢と労働者階級の状態とを、物質的にも精神的にも正確に理解することが必要である。党の側のいかなる自己欺瞞も対話を中断し、それを退屈な独白に変えてしまいうにちがいない。

党は全体に従属せねばならぬ。したがって、革命党の内部体制は、党と階級との関係に従属せねばならぬ。工場経営者たちは事業内容を秘かに検討して、労働者には既成事実をおしつけることができる。資本主義を打倒せんとする革命党には、労働者大衆の参加なしに党内で諸政策を検討することなど想いもよらない——そういうばあいには、それらの政策は「満場一致」出来合いのものとして階級におしつけられる。革命党は階級とは別個の利害をもつことはできないが故に、党のあらゆる政策問題は階級の問題であり、したがって、それらは階級の面前で公然と打ちだされるべきなのである。このことは、基本的な政策問題のあらゆる討論が、公然と、公開の新聞でなされねばならぬことを意味する。労働者大衆をして討論に参加せしめ、党とその機関と指導部とに圧力をかけさせよ。***

就中、革命党は、「共産党宣言」の次のような指示に従わねばなら

ない。「共産主義者は、プロレタリア全体に対してどのような関係にあるか？共産主義者は、他の労働者諸党に對立する特殊な政党をつくるものではない。彼らは全プロレタリアと別個の利害をなにももっていない。彼らは自分自身のセクト的な原則をうちたてて、プロレタリア運動をその型にはめこもうとするものではない。

共産主義者が他の労働者政党から区別されるのは、ただ次の点だけである。一、共産主義者は、さまざまな国のプロレタリアートの民族的斗争において、プロレタリアート全体に共通の、国籍に左右されない利益を強調し、前面におしだす。二、彼らは、ブルジョアジーに対する労働者階級の斗争が経過せねばならない種々の発展段階において、いづどこにあっても、運動全体の利益を代表する。したがって共産主義者は、実践的には、あらゆる国々の労働者政党のうち、もっとも先進的で断乎たる部分、他の全体を前方に押し進めてゆく部分であり、他方理論的には、プロレタリア運動の進路、条件、窮極の一般的结果を明瞭に理解する点で、プロレタリアートの大衆にまさっている。」(「マルクス・エンゲルス」一巻、四四頁)

労働者階級の全体が、思想斗争を含む長期の斗争をつうじて、その意識水準を組織水準に結合せねばならぬであろう。マルクスが、ドイツ労働者に追従する同時代の革命家たちに行ったように、「我々が労働者に向って、諸条件を変革するためのみならず、政權奪取の任務に適するように諸君自身を変革するためにも、諸君は一五年ないし二〇年のブルジョア的、民族的斗争を経験せねばならぬ」といふのは逆に、君たちは彼らに向って、ただちに政權を奪取するか、すべての希望をすて去るか、そのどちらかを択べという。」

* 一九一七年八月に約四千名のメンバーを有したトロツキーのグループ——メジライオンツィ——だけでは、事件の進行に重大な影響を与えうるためには余りに小さすぎることを疑うものは、ロシアには一人もいなかった。トロツキーが一九二一年に、当時のドイツ共産主義労働者党(KAPD)を、「たった三万ないし四万の」微々たる存在にすぎない、といったことを同じように理解することができる。(トロツキー「コミンテルン最初の五ヶ年」(ロンドン、一九五三年第二巻、二六頁参照))

* ローザ・ルクセンブルグはこの問題を次のように提起する。「もちろん、斗争の社会的諸条件の理論的分析をつうじて、社会民主主義は、意識の要素をかつてない程度にまでプロレタリア階級斗争に導入した。それは階級斗争の目標に明晰さを与えた。それははじめて、永続的な大衆的労働者組織を創出することに、階級斗争のために強固なバックボーンを建設した。しかしながら、もし我々が、今後は人民のすべての歴史的イニシアティブは社会民主主義組織の手中にのみ移され、プロレタリアートの未組織大衆は形をなさない物に、歴史の死重(デッド・ウェイト)になってしまふのだ、と考えたとしたら、それは破滅的な誤謬であろう。それとは逆に、人民大衆は社会民主主義の面前にあつてさえ、世界史の生きた素材として存在しつづける。そして、組織された中核と人民大衆の間に血液が循環するばあいには、一つの心臓の鼓動が両者に活力を与えるばあいには、社会民主主義は偉大な歴史的事業を遂行する能力を検証することができる。」(「ライプツィヒ・フォルクツァイト」(ウング)一九一三年六月、二六—二八頁)

*** 秘密を要するばあいがいくつかあることは当然であり、どんな労働者もこれを納得するであろう。工場集会所が資本家やその新聞記者その他の手先を閉め込めることができるのと同じように、革命党の活動には秘密を保持すべき時がある。しか

ト ロツキー

われわれの政治的諸任務 (部分訳)

我々は、同志諸君が、二つの活動方法の間の原則上の差異を看過しないように望んでいる。……この差異は、もし基本的な原則点にまでほりさげていくならば、我々の全党活動の性格を定めてしまうような決定的重要性をもつのである。一方の場合では、我々はプロレタリアートには思想を案出してやりプロレタリアートにたいし、政治的代位を行う。もう一方の場合では、プロレタリアートの政治的教育、その政治的動員を行うのである。……

政治的代位の方式は、「経済主義者」の単純な方式と同じように、プロレタリアートの客観的利益とその意識との関係にかんする誤った「こじつけ」の解釈から出発する。……

「ブルジョア知識人の心理」をあらわすことをおそれずに、我々は、プロレタリアートをして、団結した斗争に駆りたてる諸条件は、工場の中にはなく、プロレタリアートの存在の一般的社会的諸条件の中に存する、と主張する。……

もちろん、一般的には、資本主義が社会主義の前提条件をなすように「技術的に高度に発展した生産」は、プロレタリアートの政治的発展と政治的規律の基礎を創出する。しかし、ちょうど社会主義を資本主義と同一視できないのと同様に、プロレタリアートの工場における規律と革命的・政治的規律を同一視することは誤りである。

社会民主党の任務は、人間の思考活動を肉体運動のリズムでおきかえてしまうような規律に、プロレタリアートをして敵対させ、このような死んだ、ひからびた規律に代って、

し、どのようなばあいにも党はその理由を労働者に明らかにすることができ、いかなる基本的政策決定も彼らには隠されていまいことを納得させなければならない。

「International Socialism」1960.
Autumn)

「経済主義者」とは対照的に、「政治屋たち」は、マルクス主義の方法によって確立されたプロレタリアートの客観的な階級的利益を、出発点としている。しかし、彼らは「経済主義者」と同じような心配心から、自分が「代表している」ところの階級の客観的利益と主観的利益との間によこたわる「距離」を飛びこしてしまうのである。……かくして「経済主義者」はプロレタリアートの後から、このことについてゆくことによつてそれを指導しえないとするならば、「政治屋たち」は、自分自身でプロレタリアートの任務を遂行してしまおうとすることによつてそれを指導しえない。「経済主義者」が——歴史

プロレタリアートを、共通の政治的意識と革命的情熱で統一された一つの戦闘的軍隊の中に溶接することにある。このような規律を、ロシアプロレタリアートは、まだもっていない。しかし、工場も、機械も、職業病を駆逐するようには、そのような規律をもちきたらすことはできないのである。

兵營制度が、我々の党の制度である筈もない。工場が党のモデルにならないのと同様である。……

新しい制度の諸任務は、大そう複雑なので、それは、経済的、政治的建設のさまざまな方法間の競争、長い「論争」、単に資本主義世界にたいする社会主義世界のそれのみならず、社会主義内部のさまざまな諸傾向——そして、かかる諸傾向は、プロレタリアート独裁が、何十、何百の新しい、未解決の問題を提起するたびに不可避免的に生ずるであろう——の間の組織的闘争、などの手段以外に解決の道がない。そして、いかなる「強力な、権威ある組織」といえども、この過程を加速し、単純化するために、これらの諸傾向や不一致を抑圧しようとしてもできないであろう。というのは、プロレタリアートの社会に

の尻尾の後からついてゆくという——ひかえ目な役割に甘んずることによつて広範囲な任務を遂行する努力を減じているとするならば、「政治屋たち」は、歴史を自分たちの尻尾にしてしまうことによつて問題を解決してしまう。……

貧弱にしる、効果的にしる（より多く貧弱にはあるが）、我々は大衆を革命化し、彼らの中に単純な政治的本能をかきたたせようとしている。しかし、それが——この「本能」を労働者階級の政治的自己権力への意識的努力に転形するという——複雑な任務を含むにしたがい、我々は「案出」とか「代位」とかいう約められた、単純化された方法にたよっているのである。

党内政治においては、この方式は次のことに掃着する。すなわち、党機関が党に代り、中央委員会が党機関に代りそして最後には一人の「独裁者」が中央委員会に代ってしまう。

レーニンの新しい哲学によれば、プロレタリアートは、党において指導的役割を演ずるところのインテリゲンチヤによる政治教科の授業をうけるために「工場という学校」に行けば十分なのである。この新しい哲学によれば

たいする独裁は、それ自身にたいする独裁を許すということはない、ということはある。……

(訳注) トロツキーの「我々の政治的諸任務」は、一九〇四年に、第二回大会におけるレーニンの活動を批判するために書かれた。このパンフレットは、メンシェヴィキの手によつて出版されたが、のちまもなくトロツキーは、自由主義者との協同の問題をめぐって、彼らともたもとを分った。レーニンの方式では、やがて一人の独裁者が階級全体にとつて代るであろうという議論はすぐれて「予言的」であるが、ドイッチャーはこのトロツキーの「予言」が、ロシア社会の歴史的発展過程のうちに実現されていくものとして、彼のトロツキー伝を、マキアヴェリリの言葉をひいて「武装せる予言者」武装なき予言者」と題した。この訳文は、

A Documentary History of Communism の編者 Daniels が直接に、一九〇四年、ジュネーヴで発行された原本から抄訳 (Trotsky, Our Political Tasks, Russian, Geneva, Russian Social-D. ※

ロシア社会民主労働党の

組織問題 (部分訳)

ロシアの党会議に先立つ論戦において「イスクラ派」の著名な指導者、論争者の一人であった同志レーニンの最近の著作(『N.レーニン「歩進」(1904年)』)は、党の超中央集権派の視点の組織だった弁明だといえよう。そこにおいて、鋭い、徹底的な形式において表現されている概念は、徹底的な中央集権主義のそれであって、その原理は、一方で活動的な革命家の組織を、そのまわりにいる未組織ではあるが革命的で、行動的な大衆から切りはなすこととあり、他方では、厳格な規律と、地方党組織の生活にたいする中央機関の直接的、決定的干渉にある。例えば、この概念に従えば、中央委員会は党のすべての下級機関を組

織する権限を握ることとなり、ここから次のような権力をほしきままにすることに注意するだけで十分であろう。すなわち、ジュネーヴやリエージュからトムスクやイルクーツクにいたるまでの、すべての地方組織の人的構成を決定すること、自治的な地方規約を許しても、それを一片の指令で完全に廃棄し、新しいものを作ってしまうこと、そして、最後にこのようにして、最高の党の権威であるところの党大会の構成に影響を及ぼすこと、などである。これに従えば、中央委員会が党の本当の活動的核となり、他の諸組織はたんなる執行機関になってしまうのである。……

しかし、レーニンがそうしているように、

に党カードに組織され、階級意識をもったプロレタリアートの中核と、そのまわりにいる階級闘争には参加しているが、いまだ階級的自覚の途上にある部分との間には、絶対的な障壁が設けられるべくもない。レーニンによつて称揚されているように、全ての党組織が、その活動の際、細目の点にいたるまで、ひとり思考し、行動し、決定する中央機関に盲目的に服従するということが、党の組織された中核が周囲の革命的大衆から分離すること、

——この二つの原則の上に中央組織をうちたてることは、ブランキー運動における陰謀家サークルの組織原則を、労働者階級の社会主義的運動に機械的にもちこむことのように思われる。

……プロレタリアートが新しい規律を、すなわち、社会民主主義の自発的な規律を準備することができるとは、——たんなるブルジョアジーの手から社会民主党中央委員会の手へのパトンの譲渡によつて——資本主義國家によつておしつけられた規律を存続させることによつてではなくして、この規律の奴隸的精神をうちこわし、根こそぎにすることによつてである。

レーニンによつて次のようなおそれ、すなわち、インテリゲンチヤのプロレタリア運動への破壊的な影響ということ、が考慮に入れられているとしても、なお彼の組織論はロシア社会民主党に甚大な危険をもたらすであろう。

実際のところ、まだ若い労働運動を官僚的中央集権主義の狭い包皮の中におしこめようとするほど、それを個人的で、野心的なインテリゲンチヤの手にたやすく、確実にひきわたしてしまうものはないのだ。この官僚的中央集権主義は、戦闘的労働者を「委員会」の手中に握られた御しやすい道具におとしめてしまふのである。そして、逆に、労働者大衆の革命的自己活動、その政治的責任感の緊張ほど、労働運動を野心的なインテリゲンチヤの日和見主義的言辞から守るものはないのだ。……

全知全能の中央委員会の加護によつて、ロシア労働運動が辿った道からそれるのを妨ぐうとするロシア社会民主党内部の一小部分によつて行われているこのおどろくべき努力の中に、我々は、過去においてロシアの社会主義思潮がたびたび犯したのと同じ主観主義を

かかる否定的な性質をもった絶対的権力でもつて党の指導部を装おうと望むことは、そのような指導部が不可避免的に産み出すであろうところの保守主義を、人工的に、最も危険な程度にまで助長することである。丁度社会民主主義の戦術が、中央委員会のみならず全党によつて、より正確にいえば、運動全体によつて決定せられるように、党の各個別組織は、その場での状況によつて生れたすべての手段を完全に利用できるように、革命的イニシアチヴを発揮できるように、行動の余地を必要とするのである。レーニンによつて称揚されている超中央集権主義は、しかしながら、その本質において、積極的に創造的な精神ではなく、不毛な夜香の精神を吹きこまれたものと思われるのである。彼の思想が範としているのは、主に党活動の統制であり、その促進ではない。運動を狭めることであり、それをひろげることではない。運動を制限することであり、それを発展させることではないのである。……

……社会民主党中央集権化は、盲目的な服従、党斗士の中央機関への機械的な隷従の上に基礎づけられるべくもない。さらに、既

みることができよう。……

……さて、ロシアの革命家の自我は、頭脳でたち、歴史の全能の支配者であると宣明する。かくすることによつて、勇敢なる軽業師は、この役割がふりあてられるべき主人公は、いたるところでまちがいを犯しながら、自身で歴史の弁証法を学ぼうとしている労働者大衆の集団の自我であるということを見通す。さて、結論として、あけすけに語るなら次のようにいえよう。すなわち、真に革命的な労働運動が犯した誤りは、歴史の展望からいえば、最良の「中央委員会」の無謬よりはるかに実り多く、価値がある、と。

(訳注) *Leninism or Marxism* (1904, English translation, Glasgow, Anti-parliamentary Communist Federation, 1935, pp. 6—7, 15, 17—20, 22—23) — R. V. Daniels, *op. cit.*, pp. 27—30, 46

※(二二九頁(エ)) *emocratic Workers Party*, 1904, pp. 50, 52, 54, 73-75, 105.) — *そのた* (R. V. Daniels *op. cit.*, New York, 1960, pp. 30—33)

編集後記

「先駆」はここに創刊された。長い準備期間をへて、人びとの噂の中に漸やく登場する。

この「先駆」の性格については「発刊のことば」にのべられているが、読者には第一号の内容をみて、より正確な判断を下していただけるものと考ええる。

今日の状態では、個々の論文が強烈に自己を主張しあうことが望ましいのであって、たとえ「マルクス主義」の名においてであろうともそこに画一性が要求されるならば、それはひからびたものとなってしまふことは明らかである。

第一号には、それぞれ力作が寄せられたが、右の意味における画一性はありえない。個々の論文には執筆者だけが責任を負うものであること、これは「先駆」の性格からいって当然のことであるが、今後は誌上での活発な相互討論がおこなわれることを期待したい。

このような相互の批判の発酵過程を通じてのみ、我々の「反スターリン主義的マルクス主義」の今日における結晶がありうるだろう。

「先駆」の今後の歩みが、一見迂遠にみえるこの方法をとることによって、この結晶化のための一助となりうることだけが、我々の念願とするところである。

我々は「先駆」の執筆者は無数であると思っている。現実の場深く思索している人々が表現の場を容易に見出しえないでいるならば、「先駆」の誌面が躊躇なく提供されるであろう。力作の投稿は大歓迎である。

全理論分野を一種の混沌が支配している現在ほど、若き世代からの新人の登場が期待される時はないはずである。「先駆」は主として、このような人々のためのものである。

我々は、この雑誌の発行が意義をもつかざり、何が何んでも発行しつづけるつもりではないが、そのためにも多くの読者ばかりではなく、無数の執筆者によって支えられることが絶対に必要である。それに力づけられて我々は頑張りぬくつもりである。

「先駆」の誌面において特別の場合を除いては、寄稿、投稿の区別はしない。形式的にはこの区別がありえても、内容的には執筆者が自己の主張に責任をもっていたら、ということだけでよいと思っている。

ただし、誌面の都合その他で一般からの投稿を無制限に掲載することができないことはいうまでもない。

それで編集事務の責任は当面、深山真、佐久間元の兩人が受もつことになっている。(深山真・佐久間元)

表紙・陶山幾朗

季刊・先駆第一号

一九六一年十二月一日発行

編集兼発行人 深山真

発行所 先駆社

(東京都渋谷区千駄ヶ谷五の二二)
稲垣アパート矢野方)

定価 一五〇円 年四回発行

ロシア—官僚制国家資本主義論

トニー・クリフ／対馬忠行・姫岡玲治訳 ■ 辛四九〇

トロツキーを、墮落したロシア革命に対する初期の批判者とすれば——、クリフはその批判を継承し更に修正発展せしめたものである。

コミンテルン・ドキュメント

J・デグラス／荒畑寒村訳 ■ 辛一九〇〇

英王立国際問題研究所の援助によつてはじめてなしたげられた偉業、原資料による世界共産主義運動史辞典。未発表ドキュメント七七八〇編

狂信の創造者スターリン

イサド・ベイ／内山賢次訳・浅田光輝解説 ■ 辛四六〇

本書は、創生期の日本のコミュニスト達が原書で愛読したスターリンの人間形成の時代的、環境的面を生き生きと再現した伝記文学である。

革命の挫折

佐久間元著 ■ 辛五四〇

著者は、元共産主義者同盟中央委員。本書はソ連公認の革命史とその神話に飽き足らず、スターリン主義に対して強い批判を持つ著者が、スターリン時代の全革命史を客観的現実の光のもとに照らし出そうとして、その結果書かれたものである。

裏切られた革命

レオン・トロツキー／山西英一訳 ■ 辛三六〇

〔付録・今日のソビエト同盟——労働者国家とテルミドール及びボナパルチズムの問題〕我が國で初めてここに完訳決定版を得たトロツキーの古典的著作。この書を読まずしてソビエトの歴史を語ることは不可能である。

東京神田

論争社

美土代7

昭和二十六年十一月十五日印刷
昭和二十六年十一月一日発行

(年四回発行)

創刊号 定価 一五〇円

編集兼発行人 深山 貞・印刷所 興学社